

---

# ゼロクエスト ~第2部 異なる者

鈴代まお

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロクエスト～第2部 異なる者

### 【Zコード】

Z8376T

### 【作者名】

鈴代まお

### 【あらすじ】

極度に方向音痴な精霊術士。美形だが何処かがズレてる剣士。常に唄いながら喋る吟遊詩人。ひょんなことから一緒に旅をしている3人が、道中の村で、思わず止めを食らうことになってしまった。さらに何故か命を狙われるはめになり、それを助けた術士が彼女たちに、ある依頼をしてくる。異世界冒険ファンタジーです。「第一部」の続きですが、これだけでも問題なくお読みいただけます。

## プロローグ（前書き）

### 前書き

この話は「第1部 旅立ち」の続編ですが、それを読まなくとも問題のないようになります。

## プロローグ

その日彼女は、アクニ力村へ向かっていた。魔物が集まり始め、近々討伐隊も編制されるといつ噂が近隣町のギルドを中心に流れていたのだ。

アクニ力村は、ほんの数日前に通った村だった。故に彼女としてはまた引き返すことになってしまいだが、魔物ハンターという職業柄もあり、それに参加しないわけがなかつた。賞金首がごく稀に紛れ込んでいる可能性もあつたからだ。

それにこういつた場所へは、他のハンターも多数参加する。恐らくは彼女と顔見知りの同業者もいることだろう。顔見知りであれば、互いの情報交換の場にもなるのだ。

敵が現れたのは、そこへと続く山道を歩いていた時だった。

彼女は魔物との戦闘経験も豊富で、自信もあつた。当然のことながら普通に歩いている時でさえも、周囲に注意を払いながら動いている。

だがその時には何の気配もなかつた。魔物はおろか、生命そのものまでもが、全く感じられなかつたのだ。

「妾の術を受けてもなお、意識が保てるとはな。そには褒めてやるぞ」

相手のほうが、血のように艶やかな唇を先に開いた。同時に双眸にある真紅の瞳が、一瞬の煌めきを放つたようにも見えた。

「やはり特殊な身体を持つ『呪われたモノ』だけのことはある」

彼女は無意識に身体を震わせていた。しかし視線だけは微動だにせず、直ぐに口端を上げる。

「……成る程な。貴様はあたしのことを知つていて、そのために襲つてきたというわけか」

敵は彼女の殺気に気付いていないはずはなかつたが、その表情は全く変わらず、薄笑いを浮かべたままだつた。

「自惚れるでない。妾は貴様になど興味はないぞ。……それよりもどうだ、取引をせぬか？」

「取引……だと？」

その言葉を聞いた途端、彼女は右眉を僅かに動かした。

相手は魔物だ。

露出度の高い服を装つており、人間の成人女性に近い容姿もしていたが、角と尾が付いているのは外見上明らかだつた。その上プライドが高く、ヒトを常に見下しているような中位クラス以上の魔物。その魔物がこちらに対して「取引」などといつものを持ちかけてきた。

「貴様のような輩にこのような取引など、妾としても実に不本意な極みではあるのだが……しかしどうやら、利害が一致してあるようだからな」

「どういう意味だ」

魔物はそれには答へず、薄い笑みを浮かべたままでじらりへゅつくりと近付いてくる。

だが彼女は動くことができなかつた。

精神力を根こそぎ奪われでもしたかのように、全身を動かすこと  
ができなかつた。

残つてゐる氣力を振り絞り、辛うじて身体だけは起こしていたの  
だが、いつ倒れても不思議ではなかつたのだ。

魔物は目の前に腰を下ろすと彼女の顎をおもむろに持ち上げる。  
瞬間、彼女は顔を顰めた。綺麗に磨かれた長い爪が頬に食い込ん  
できたのだ。

よく研がれたそれは皮膚を裂き、傷を付けた。顎を碎くほどの力  
でその細い指に締め付けられている。

しかし予想に反し、魔物はそのままの体勢で耳許へ唇を近づけた。

「貴様の目的 ゼリューを殺したいのだろう?」

## 第1話 道程1（前書き）

第1章 暗殺者（エリス編）

## 第1話 道程1

「火炎砲弾」  
ファイア・パル・カノン

私は敵に火の弾を放つ。と同時に、ディーンも動いていた。

「水爆泡撃」  
ヴァッサー・パール・ボム

ディーンの放った水泡が、私の火弾に当たると爆発した。辺りには濛々と煙が立ち込めていた。

敵 ゴブリンはその煙で完全に囮まれ、怯んだようだった。その場で動きが止まつたのだ。

その瞬間、アレックスが透かさずその中へと突っ込んでいった。

徐々に晴れてくる煙の中には佇むアレックスと、小さなオジさんのような姿をしているゴブリンが数匹ほど地面へ横たわっていた。煙の中は視界が悪く相手の姿は見えないが、それを作る前に相手の位置さえ特定できれば倒すのは容易なことだ。

「取り敢えずこの辺は、これで最後かしら」

私は周囲を見回しながら呟いた。

辺りは暗闇であったが、光属性の灯りを二~三体ほど点けていたために、この場所だけ少し明るくなっている。

「それにしてもこの辺り、町が近いわりには魔物がやたら多いわね

魔物というのは大抵が森や洞窟、人間や他の魔物が住まなくなつた廃墟などを好んで根城にする傾向にある。つまりヒトと魔物とは住処に若干の違いがあり、殆ど重複はしないのだ。

といつても人里へ下りてきては町村を襲撃したり、旅人が街道を歩いていると襲われたり、そういうたケースもよく聞く話だつた。

そのため、各町村に配置されている王国統轄直属機関『ギルド』が他術士たちと協力し、討伐隊を編成する。そしてそれによつて増えた魔物を一掃するのだ。

「そろそろアクトーク村のギルドが、討伐に乗り出す頃なんじやないか？ この付近で魔物が急に増えだしたという話は、さつきの村でも噂になつていたようだしね」

倒した魔物の処理をしながらそつ言つたのは、私と同じ精霊術士のディーンである。

彼はその証でもある外衣フードを田深に被つており、唯一見えている口元には不気味な笑みを湛えていた。

全身黒ずくめで、一見すると墓守にも見えるその姿は「死体を埋める」という作業も手伝つてか、正に邪悪そのものであつた。しかしその下には甘いマスクが隠れており、かなりの美形なのだ。

ディーンと従兄弟である剣士のアレックス。

美形の一人が揃えば、街中の女性たちが振り向かないわけがない。しかし普段のディーンは「このほうが落ち着く」という理由からフードを被つたままで生活しており、この不気味な佇まいのおかげで通行人たちは誰も近寄つてはこなかつた。

「それに何故かここ数年で、下位クラスの動きが活発化していっているという噂だ。町や村が襲われる回数も増えてきているらしい。国もその辺りの動向には、警戒しているらしいよ」

表面上の容姿とは正反対の爽やかな口調で、ディーンは続けて言った。

この話は私が故郷の村を離れる時にも、父から聞かされていたこ

とだった。

町村を襲う魔物は大抵、下位クラスである。しかも下位クラスは中位クラス以上には絶対服従だった。

魔物の世界では、弱者が強者に抗うということを全くしないらしい。つまり下にいる魔物が活発になつてているのは、中位クラス以上が何か良からぬ事を企んでいる可能性がある、ということだった。そのことも念頭に置いて魔物には十分気を付けるようと、父から出発する際に口が酸っぱくなるほど注意されていた。

「やつぱりそなんだ。ウチの村も半年ほど前に襲われたのよね。話に聞けば村が襲われたのは、約五十年振りなんだって」  
「その点、我が故郷は安全だな。襲われる心配がない」  
辺りを警戒しながら、前を歩いているアレックスが言つてきた。

「アレックスたちの村って、そんなに安全な場所にあるの？」

「うむ、山の頂にあるからな。それに『英雄の血族』であり、ウンディーネ（水の精霊）の加護を受けた俺もいる。即ち魔物たちは、由緒正しき我が神聖なる故郷に恐れを成し、襲撃ができないのだ！」

「あー、はいはい」

背中からでも分かるほど熱気を全身にほとばしらせながら、アレックスは拳を握り締めていつもの熱い口調で語った。

しかし私はそれを軽く受け流していた。アレックスとは付き合いの長いディーンを見習いつつ、この数日で彼の扱い方が多少上手くなつたかもしぬ。

「でも、襲われにくいつていうのも確かだな。上空から攻撃される心配はあるが、飛行型の魔物というのは滅多に地上へは降りてこない。山頂にある俺たちの村は過去一度も、襲撃を受けたことがないらしいんだ」

「えっ、一度も！？ 近くには『水の社』だってあるんでしょう？」

ディーンの言葉に、私は驚いていた。

私が旅に出た当初の目的が『精霊の社』<sup>まいり</sup>巡礼である。

各精霊「風、地、闇、光、水、火」の祀られている社が各地に点在しており、それらを巡るのが目的なのだ。これは術士の修行方法として最もポピュラーな手段であり、一人前になるための儀式のようなものでもあった。

『精霊の社』といふのは魔物から『生命の樹』を守るために、精霊が人間たちに造らせた結界だと言い伝えられている。生命の樹はこの世の根源であり、古代の魔物たちは何故かこの樹を欲しがった

のだといつ。

しかしこれらの話は全て伝説。この世にいる殆どの人間たちは私も含め、ただのお伽話としか思っていない。

「今ほどの社も警備が厳重らしいけど、昔は絶えず襲撃されていたっていう話を聞いたことがあるわ」

かつて魔物たちは結界を壊すために社を攻撃していたといつ。各社は何度も破壊されたが、結果的に生命の樹は現れなかつたらしい。

「麓にあるフィオス町や山腹にある水の社は、確かに襲撃されたいたらしいね。村に保管されている古文書にも、そんな記録が残っていたよ。

でもウチの村は襲撃されなかつたらしい。多分、地形のせいじゃないかとは思うんだが」

「地形？ そんなに襲撃されにくい場所にあるの？」

「複雑に入り組んでいるというか……まあ、実際に行つてみれば分かると思うよ」

ディーンは何故か歯切れの悪い言い方をした。同時に苦笑いも浮かべているように感じられる。

「でもおかげで、家族を安心して村へ置いておけるという利点もあるのだけれどね」

「それでディーンは遠い町まで、アレックスを迎えてに来ることができたわけね」

これから私たちが向かう彼の故郷には、奥さんと生まれたばかりの娘さんが待っているのだといつ。

ディーンも昔は巡礼やギルドの仕事をしながら、各地を巡つていたらしい。その途中で奥さんと知り合い、現在は故郷に腰を落ち着けているそうだ。

「今日はリアにどうしてもつて、頼まれていたからね。アレックスが村の外へ一人では、あまり出たことがないから心配だつたんだろう。

でも今回だけだ。俺は家族と少しでも離れたくはないし、もう長旅はしないつもりだよ」

「皆わ～ん、」苦労様です～」

いつもの陽気なエドの唄う声が、前方から聞こえてきた。

「エド、ここは大丈夫だった？」

「勿論です～。魔物は来ませんでしたよ～」

赤々と燃えさかる炎の前に座り込んでいたエドは、持つている小型の楽器を弾きながら返事をした。

彼はいつも音楽を奏でており、唄いながら会話をしている。両手が塞がつていて楽器が使えない状態でも、常にアカペラで唄いながら喋るという、かなり変わった癖の持ち主なのだ。

私たちはそんなエドをこの場へ残し、別行動で野宿をする準備をしていた。周囲に群がる魔物を退治していくのである。

### 第3話 迷子対策？

「アクニカ村つて、明日のお昼には到着できるのよね。ディーンたちの村までは、あとどれくらいかかるの？」

私はエドが用意してくれた夕食の山菜スープに舌鼓を打ちながら尋ねた。

それにしても毎回思つことだが、彼の作る料理はかなり美味しい。手持ちの保存食と今の時期に生えている食用の野草やキノコ、彼が常に持ち歩いているといついくつかの調味料だけでこんなに美味しい物が作れるとは。

『芸術士』という術士の特性だからなのか、手先が器用なのである。

聞けばエドはキノコの選別もお手の物だという。彼にこんな特技があつたことを知り、私は驚いていた。もしかしたら吟遊詩人などではなく、料理人になつたほうが良いのではないだろうか。

「フィオス町は森を一つ越えた先にあるから、そこからはかなり近いよ。アクニカ村から歩いて一～二時間くらいかな。俺たちの村はその先の山を登ったところにあるから、休憩を抜きに考えると、合計一日半弱くらいで到着するはずだよ」

「一日！？ てことは、丸一日も山登りをしなくちゃならないの？」

「ああ。山の高さはそれほどでもないが、多少入り組んだ場所にあらからな。今から覚悟をしておいたほうが良いかもしねないな」

昔ハイキング程度でなら学校の行事で山に登つたことはあるのだが、長時間登山はあまり経験したことがなかつた。

「もつとも、順調にいければの話だけだね。これでも予定よりは、三日もタイムロスしているわけだし」

「そうですよ～エリスさん～。この前のようなことにはならないようになりますから～お願いしますよ～」

エドが眉を顰めながら私に言つてくる。

「エリスさんがこの前～ネタシナ町で～はぐれた時のことですよ～。あの時には大変だったんですけど～あの人混みを一日中、探し回ったんですからねえ～」

「全くだ。一つ手前の村へ戻つていようとは、流石の俺でも予想できなかつたぞ。まさか君がこれほどまでに方向音痴だつたとはな～う……だから「メンツ」で、何度も謝つているじゃないのよ。それにはあの時には人波に押されて、たまたま戻つちゃつただけじゃない。方向音痴とは全然違うわよ」

責めるような態度のエドとアレックスに対し、私は汗を搔きつつ辛うじて言い訳をした。

だがこれ以上の反論ができないのも事実だつた。非難されても仕方がないのは分かつていていたからだ。

パーティというのは当然の如く、団体行動が基本だ。一人がその輪を乱せば、他メンバーも道連れになる。運が悪ければ一人のせいでの、全滅することだつて有り得るのだ。

本当なら輪を乱した者など、即見捨てるのが正解だつた。  
だが彼らは私を探してくれていたのだ。

あまり強い態度をとることはできなかつた。不可抗力とはいえ、私はそれだけの行為をしてしまつたのだから。

「エリスさんの方向音痴は～僕も知つていたので～ちゃんと手を繋いでいたはずなんんですけどね～。あの混雑の中だつたから～思わず手を離してしまつたのです～」

ネタシナ町へ到着した時には丁度、国王歓迎パレードの真っ最中

だつた。その町には保養所の一つがあるらしい、年一回は訪問するらしい。私たちは運悪く、それに遭遇してしまつたのである。

「そこで俺は考えたのだ。方向音痴のエリスと手を繋いでいても、それが完全に外れることのない方法を！」

アレックスはいつも得意げな態度で、エドに向かつて胸を張つていた。

私はその様子を見ながら、心の中でひつそつと溜息を吐く。そもそも「方向音痴」と「手を繋ぐ」という行為は、何の脈絡もない。

「ではエド、手の平を外側に向けて前へ突き出してみてくれ」「いいですか？」

エドは言われた通りに田の前へ手を突き出した。

「今度はエリス、エドの手に自身の手を重ね合わせるのだ」「え、私もやるの？」

「うむ、これは君のためでもあるからな。また同じようなことが起きてしまつた場合、今度は探し当てることができるかどつか……」

「はいはい、分かったわよ」

そう言われてしまつたら、私には逆らつ「」ことができなかつた。渋々エドの手に自分の手を重ねる。

「そして互いの指と指の隙間に、その指を一本ずつ絡めるのだ。そうすれば普通に握つている時よりも遥かに、離れ難くなるではないか！」

「た、た、確かに離れないです～。これならどんな人混みの中にいても、全く外れる心配がありません～。アレックスさん、これは世纪の大発見ですよ～！！」

エドは私とも腕をブンブン振り回しつつ、アレックスを褒め称えた。分厚い眼鏡に隠れていてその表情はよく分からなかつたが、

興奮しているのか、代わりに鼻の穴がいつもより開いている。

(全く……「」の、アレックス信者めがー…)

私は心中で毒づいたが、口に出しては言わなかつた。単に呆れすぎて、喋るのが億劫になつただけである。

恐らくは指の関節が互いにストッパー役となり、外れ難くなつているだけであらう。別に「世紀の大発見」でも何でもない。

「ははは……アレックスは相変わらず、面白いことを考へるな。感心するよ」

私たちの遭り取りを隣で傍観していたティーンは呑気に、爽やかな笑顔を浮かべていた。今は食事中といふこともあり、先程まで被つていたフードは脱いでいる。

「しかしその繋ぎ方は」

続けて何かを言おうと口を開きかけたのだが。

「…………ああいや…………うん、何でもないんだ」

私たちの顔を見るなり急に気が変わつたのか、それを止めたようだつた。

ティーンが何を言い掛けたのかは、非常に気になるところである。が、疲れの押し寄せてきていた私にはどうでもいいことだった。途中で言うのを止めたということは、どうせ大した内容ではないのだらう。

## 第4話 いつでも全力

私たちは食事を終えると、後片付けを始めた。

食器や調理器具は、その辺に落ちていた木の枝や落ち葉に私とデイーンで強化の術をかけ、それらしい物に加工していた。だから使用を終えた物は元の姿に戻してやるだけなので、後片付けは簡単に終わる。旅をする時は食器など、重く嵩張る物を持ち歩かないのは常識だった。

精霊術というのはこういった使い方をすることもあり、日常的に大いに役に立つ術もある。「パーティーに一人の精霊術士」といわれるくらい、パーティには必ずといっていいほど精霊術士が含まれているのだ。そのため精霊術士を希望する者は、他術士希望者よりも全体的に多いらしい。

しかし一精霊のみを使用する他術士とは違つて強力な大技を出せないという欠点もあり、攻撃時には状況に応じて六精霊の能力を上手く使っていかなければならなかつた。

「エリス、疲れているんじゃないのかい？ もう休んでもいいよ」  
デイーンがいつものように、優しく私を気遣ってくれた。

「でも、デイーンたちだって疲れているはずなのに……いつも見張りを二人に任せっきりだなんて、何だか申し訳ないんだけど」

魔物を一度に十数体前後も相手にするのは、少々骨の折れることだつた。しかしそれは一緒に戦っているデイーンとアレックスにも同じ事が言える。

「俺はこういうことには慣れているからな。しかし君たちはまだ旅には慣れだ。今はじっくり身体を休め、いざという時のために万全の準備をしておくことも大切な修行の一つだよ」

「つむ、ディーンの言つとおりだ。休めるうちに休んでおぐ。これも修行だつ！」

アレックスは突然勢いよく立ち上ると、何故か拳を天へ振り上げて熱く叫んだ。相変わらず意味の分からぬいポーズだ。

「けどアレックス、あんた旅にはあまり出たことがないんでしょ？ 確か巡礼にも行つていないという話だし、なのに何でそんなに元気なの？」

私は彼を不思議に思いながら見上げた。あれほど前線で戦つていたといふのに、疲れている様子が全くないのだ。

「俺は長旅をしたことはないが山へ籠もり、修行に明け暮れる毎日を送つっていた。自己に課せる厳しい鍛練ゆえ、自慢ではないが疲れとこのものを知らないのだ」

「そんなものかしら」

「ははは……アレックスはこう見えても意外にタフだからな。しかしそろそろ、それも限界に来ているとは思うよ」

ディーンはそう言うなり、立つてアレックスのヒップを下から軽く叩いた。すると彼は私たちの前へ俯せで勢いよく、簡単に倒れ込んでしまったのである。

「な、何故だつ！？」

地面で藻掻きながらも立ち上がれないアレックスと、驚いてその場で固まっている私。しかしディーンは相変わらず、清涼感の漂う顔で私たちを眺めながら微笑んでいる。

「やつぱりアレックスは、かなり無理をしていたようだな。まあ、そんなことだらうとは思つていただけれどね」「どうしたこと？」

「通常敵と戦闘に入った場合には、能力をある程度まで押さえつつ、

余力を残して戦わなければならない。余力がなければ戦況を見通す判断能力を鈍らせたり、予想外の敵が出現したとしても、戦力がもう残されていないという状況に陥ってしまうからね」「

ある程度の余裕を持つて戦うのは、術士としては当然の行為である。毎回全力で戦ついたら疲れるし、次の戦いにも支障が出る。「ところがアレックスはその余力 先のことを全く考えないで戦っている。例えどんな弱い敵にでさえも同様の力を發揮しているのさ。だから戦闘が終わる度に体力のほうは、かなり消耗されているはずなんだ」

「え……つまりアレックスはいつも、どんな弱い敵に対しても、同じように手加減なしで戦つているってこと? でも疲れているようには見えないんだけど」

あまり体力を消耗しているようには感じられなかつた。戦闘が終わっても疲れを見せず、いつでも涼しい顔をしていたからだ。

「それは自分が『疲労している』といふ、自覚がないからさ」「は?」

「『疲れる』という状態がどういうものなのか、本人は全く理解していないんだよ」

## 第5話 装備のせい

私は「ディーンの話に耳を丸くしていた。  
果たして本当にそういうことがあるのだろうか。自分の疲れている状態が分からぬだなんて。

「なあアレックス。もしかして全身が怠<sup>だる</sup>かつたりするんじゃないのか？」

「む？」  
ディーンの声で、彼は初めてこちらへ首を巡らせた。その表情から察するに、近くで会話をしていた私たちの声が聞こえていないようだ。

彼は先程から苦しそうな表情で顔を赤くしながら、何度も起き上がりうと試みていたのである。その額には脂汗まで浮かんでいた。

「確かにいつもより妙に重い感覚はするが……心配はいらぬ。先の戦闘の影響によるものだろうからな。恐らくこれは、装備の調整が必要だという前触れなのかもしれん。

が、しかし！

これしきのこと、俺の根性を持つてすれば、負けることがないっ！」

気合を入れるかのように意味不明なことを熱く叫びながら、アレックスは再び上体反らしに挑戦しようとした。しかしディーンが肩に手を掛けて静かにそれを制した。

「だがアレックス、お前は一人じゃない。俺たちは今パーティを組んでいるんだぞ。じつは時にこそ、Hドの能力が必要なんじゃないのか？」

「え〜？ 僕ですか〜？」「

早々と一人で寝袋の準備をしていたエドは突然話を振られ、きょとんとした顔をしている。

「エド、アレックスのためにいつものアレ、かけてやつてくれ」「了解です〜」

『いつものアレ』というのは、エドが唯一使える体力回復術「アブソープライフ」のことである。但しこの術は『術が効きやすい』体質のアレックスにしか効果がなく、普通の私たちにはエドの使う技は弱すぎて、あまり効力が感じられないのだ。

「流石はエド、改めて君の演奏は素晴らしいと思うぞ！ 心が洗われるようだ。俺はいつも根性で逆境を潜り抜けてきたが、やはり仲間の助けを借りるというのも良いものだな。お陰で身も心も軽くなつたような気がするぞ！」

何故か涙を流しながら、アレックスはエドの演奏に聞き入つていた。

いつもの光景である。

(毎回毎回流して……飽きないのかしら)

私は呆れつつも、爽やかな表情で一人を見守つていてるティーンに訊いてみた。

「さつきの話だけど、アレックスが『疲れる』という感覚が分からぬいなんて本当なの？」

いくらなんでもそういうのって、自然に分かつてくるものなんじや

ないの？」

「まあ、普通ならそういう感覚は意識せずとも覚れるものなんだが……何故かアイツはそれを装備のせいだと思い込んでいてね。だから自身で気付かない限りは、納得できないと思うんだよ。特にアイツの場合は他人がいくら口で言つても、聞く耳を持たないだろうしね」

「あーそれは言えるわね」

彼はかなり思い込みが激しい、ということはこの数日間で分かったことである。更に自分の信念を曲げない一面もあった。

何故装備のせいだと思い込んでいるのかは分からないが、今までそう思い込んでいたのなら、他人がいくら否定したとしても聞き入れてはもらえないだろう。

確かに近距離系攻撃を主体とするアレックスの装備は、私の比ではないくらいに重かつた。これはこの前、私自身が身をもつて体験したことである。

それを當時彼は普段着でも着こなすかのように、身に付けているのだ。例え定期的な調整が必要だとしても、急に装備の重量が増えるはずはない。

程なくして、エドの演奏が止まった。

「おお、身体が軽くなつた。エドすまぬ、礼を言つや」

「いえ、いつもアレックスさんたちと戦えないのでも、こういつ時にお役に立てて、光栄です」

そう言いながらエドは寝袋の中に潜り込むと、直ぐにいびきをかき始めていた。

これもいつもの光景だった。

彼はここ最近アブソープライフを使用する度に、睡魔が襲つてくるようになったという。『ディーンの話では術力の上達に、エドの体力がついていけないのでないかということだつた。

確かに最初に出会つた頃に比べると、ほんの少しだけだが私もエドの唄で、身体が軽くなるような感覚はしていた。

気のせいかとも思えたのだが、ディーンによれば、この短期間で確実にエドの術効力は上がつてきているらしい。そのため彼の身体は急激な成長に追いつけず、休息を求めて睡魔が襲つてくるようになつたといつのだ。

回復術というのは精霊術の中でも、高度な技である。芸術士のような補助や間接系を中心とした、特殊な術士しか使えないものだ。まだ私たちの体力を癒すまでには至らないとはいえ、毎日使えば流石にエドの術力はパワーアップしていく。それに比例するかのように精霊術で消費する精神エネルギーも増えるのだが、消費した分とのバランス保全のため自然に体力も奪われる。

身体から大量に使用される精神エネルギーと体力。それらを補うには、ある程度の休息が必要なのだ。

エドの身体はヒトが元来持つている生存本能から、それが「睡眠」へと繋がつているのだろうということだつた。精神エネルギーと体力は無限にあるわけではないが、身体を休めさえすればある程度の回復はできるのである。

「では俺が先に見張りへ行つてこよう」「う

アレックスは傍らに置いてあつた長剣を掴むと、すつと立ち上がつた。

「それじゃ俺は休ませてもいい。交代の時間になつたら起こしてくれ

「了解した

ひじてこの田は特に何事もなく、暮れていった。

## 第6話　温泉の村

アクニ力村は山間にある、比較的大きな温泉郷だった。水の社も近くにあるので巡礼者だけでなく、観光目的の旅行者なども立ち寄ることが多い。そのため、かなり賑わっているという話だった。

翌日の暁過ぎ。道中では魔物数匹程度に襲われただけで、ほぼ予定通りに私たちはアクニ力村へ到着していた。

村の中へ入ると早速私たちは、散歩中らしき飼い犬の歓迎を受けた。

つまり激しく吠えられたのである。

だがいつものことなので気にしない。正確に言えば吠えられたのは、フードを口深に被った姿のティーンだけであるが。

「びえええええつ！」

今度は入口付近に立っていた幼い男の子が、彼の姿を見るなり大声で泣き出していた。

側にいた母親らしき女性はその男の子を抱きかかえると、慌てた様子で目を伏せながら私たちの側を足早に立ち去つていった。この異様な格好と全身から醸し出される雰囲気のせいだが、それもいつものことだ。

「そういえばティーンには、赤ちゃんがいるのよね。その子は怖がつたりはしないの？」

私はこの前から疑問に思つていたことを、何気なく口にした。年端のいかない子供には必ず怯えられ、泣かれるのである。自分の子供ではどうなのか、何となく気になつたのだ。

「そのことなら全く問題ないよ。何故ならウチの子の前では、素顔しか見せていないからね」

相変わらずの不気味な笑みを口端に浮かべながら答える。当然と言えば当然の答えかもしれない。

「でも普段からこの格好でいるほうが、落ち着くんじやなかつたつけ。だから家でもこんな姿でいるんじやないの？」

「ははは…まさか。

家では女の子たちに囲まれる心配がないからね。この姿にならなくとも落ち着くことができるよ」

(あ、「落ち着く」って、そういう意味だったのか)

『「フードを被る』という行為自体のことかと思つていたが、どうやら私の勘違いだつたらしい。

「それにこの姿を一度でも見せてしまつたなら、娘には完全に嫌われてしまつよ。そうなつたらこの先、俺は生きてはいけないかもしない。

なんといつても娘は俺の生き甲斐だからな。

やっぱり自分の子供は可愛いんだよな。妻に似ているしさ。周りの人間は俺のほうが似ていると言つが、俺よりも妻に似ていると思う。何故なら……」

どうやらティーンの連射トークタイムが始まつてしまつたようだ。彼は家族のことを話し始めると、連射する矢の如く止まらなくなる。この前など、奥さんとの馴れ初めノロケ話をエドと一緒に一人で、延々一時間も聞かされてしまったのだ。

「ん？ 何この人の山は」

私はここで、ふと気が付いた。

私たちは大通り付近にまで歩いてきたのだが、その先は人で溢れ、

中心部では更に人集りができていた。

いくら温泉で賑わっているとはいっても、通りの中央付近に人集りができるだけではいるのはただ事ではない。

「何つ!?」「これは……！」

集団を見たアレックスが突然、驚愕の表情を浮かべた。

「エド、今だ！ 今こそエリスにアレをつ……」

「了解です～」

エドは阿吽あうんの呼吸でそう言つと、私の手をガシッと力強く掴んできた。昨晩アレックスがレクチャーした方法で握ってきたのである。「うむ、これならばもうはぐれることはないだろう」彼は顎を擦りながら田を細め、私たちの繋いでいる手を満足そうに一人、眺めていた。

「…………」

もう、口を開きたくもない。

「ちょっと失礼」

私たちの横を丁度通り過ぎようとしていた男性を、ディーンが呼び止める。

「！ な……何でしょう」

一般の村人らしい中年男性は彼を見ると、一瞬ビクッと身体を震わせた。そして先程の幼児と同様に、みるみる怯えた表情に変わっていく。

「人が集まっているようだが、この村で何かあるのか？」

「あんた、知らないのかい。これからあの中心にいる騎士様たちが、何か大事なことを発表するらしいんだ」

男性は視線を逸らしながら早口でそれだけを答えると、逃げるように入混みの中へ消えていった。それを見送った後、ディーンは私たちのほうへ顔を向ける。

「どうやら騎士がこの村で、何か重大な発表をするらしいな」

「重大な発表とは何でしょうか。非常に気になります。では早く見に行きましょう」

エドの顔がぱあっと明るく輝いたと思った瞬間、有無を言わさず手を繋いだままの私とともに、群衆の中へと突っ込んでいったのである。

「ちよ……っ！　エド！？」

慌てた私の声は喧騒に掩され、彼には届いていないようだった。

私は引っ張られたまま、人の波に揉まれている。腕が千切れそうな上に、かなりの息苦しさだ。

悲鳴を上げつつ窒息寸前な状態にまで陥っていた私だが、急に呼吸が楽になった。気が付けばいつの間にか、人波が途切れている。どうやら最前列に辿り着いたようだ。

私は肩で荒い呼吸を繰り返しながら、乱れた髪と息を整えていた。

頭がグルグルして気持ち悪い……。

このような混雑には慣れていないため、もう既に人に酔つてしまつたのかもしれない。

目の前には五、六人程のシルバーの甲冑を着た騎士様たちが、横一列に綺麗に整列していた。その中心にいる金鎧を身に纏つたロマンスグレー風の人物には、私にも見覚えがある。

「あれ？ あの方～マクガレー団長ですよ～。こんなところにも～遠征しているのですね～」

隣にいるエドが疲れている私とは対照的に、キラキラと顔を輝かせながら言つてきた。

確かにあの見覚えのある角張った顔は、リーヴォン王国第五騎士団のフランツ・マクガレー団長である。あの団長がここにいるということは、やはり討伐隊がこの村へ派遣されているということなのかも。

それにしては騎士の人数が多いような気もする。

討伐隊の編制時には隊長と一緒に一名の騎士、他はギルドで雇つた傭兵や巡礼者などの術士で成り立つていて一般的だつた。しかしここには十名近い人数の騎士たちがいた。何か非常事態でも起つたのだろうか。

「騎士様たちがここに来たといふことは～一体何の発表をするのでしょうか～」

エドはあからさまに何かを期待している表情をしながら、中心にいるマクガレー団長に熱い視線を向けていた。彼はこの好奇心だけの人混みの中、最前列まで移動してきたのである。

「えー、静粛に――！」

しばらくすると、騎士の一人が群衆に向かつて大声で制した。周囲のざわめきが、徐々に静かになつていく。それを確認した後、マクガレー団長は一步前へ出でくる。

「私は王国第五騎士団所属、フランツ・マクガレーである。現時点よりフィオス町間の街道を、一時的に封鎖することになった」  
村中に行き渡るほどの、凜とした声だった。群衆が再びざわめきだす。だがマクガレー団長は構わずに続ける。

「これから説明するー！」

その一声で、辺りがしんと静まり返った。

流石は一個小団を束ねるほどの騎士長である。威風堂々とした態度で、民衆を一瞬にして沈黙させたのだ。

## 第7話 街中で狩る者

「…………といひことで討伐隊参加者は、速やかに申し出るよ  
うに。以上！」

マクガレー団長は一通り説明を終えると部下を引き連れ、事前に確保しておいたらしい路みちを通つてこの場を去つていった。続いてこれを見物していた群衆も、徐々に皆散つていいく。

私たちもこの流れに乗り、歩き出していく。

これからギルドへ向かうのだ。

ディーンたちとは既にはぐれてしまつたのだが、パーティの待ち合わせ場所といえば大抵ギルドである。彼らもそこへ向かつてゐるはずだつた。

先程の団長の話を端的に述べるなら、この界隈に下位クラスの魔物が集まつてきてるので、討伐隊を編制して退治するという。ここまでならよくある話で、私たちの予想通りでもあるのだが。

「モンスター・ミストですか~、是非一度は見てみたいものですが~」

並んで歩いているエドが顔を輝かせていた。

「モンスター・ミストっていうと、魔物を引き寄せる霧のことよね~」  
この霧が裏手にある山中に現れたせいで、魔物が集まつているらしい。

魔物というのは強い力に引き寄せられる傾向にある。特に下位クラスは本能的に引きつけられるらしく、魔物が集まるのはそれが原因の場合もあるそうだ。

当然モンスター・ミストも例外ではない。

一説によれば魔物が作った結界ではないかとも言われているが、自然発生しているだけかもしれないし、未だ謎が解明されていなかつた。

何故なら、誰も内部へは立ち入ることができないからだ。一歩足を踏み入れても、必ず外へはじき出されてしまうという話である。それほど頻繁に発生しているわけではなかったが、ここ数年で数件ほどの出現例があり、場所は各地方の社近辺が最も多いそうだ。何故その付近でのみ発生するのか、社とモンスター・ミストとの関連は何かなど、現在でも何処かの調査機関が調べているらしいという噂である。

「でも封鎖つて、一体どのくらいの期間になるのかしらね」「そんなに長くはないんじゃないですか？」聞いた話によると「大きくて一週間かそのくらいで、霧は消えるらしいですしね」今の私たちは、それに対抗する術はない。精々一時的な対応策として、魔物を周辺の村や町へ近づけさせないようにすることくらいだ。

私は気が付けばいつものように、無意識のうちに左腕を強く掴んでいた。

最近の私は中位、或いは上位クラスの女に付けられた用途不明の刻印を、服の上から手で押さえ付けるのが癖になっている。

その部分を無意識に庇おうとでもしているかのようだつた。全く意味のないことだとは分かつてはいるのだが、凄く不安なのも事実だ。

今のところ、この紋様が発動する気配はなかつた。

しかし普段あまり考えないようにしていることとはいえ、いつ何時発動するのかも分からぬのだ。自分の変調を予測できないといふことは、私にとってはこの上ない恐怖だつた。

(一刻も早く、先へ進まないといけないのに……こんなところで足踏みなんかしている暇はないのに)

私にはやるべきことがある。この旅が終わったら故郷で、父とともに村を守るのだ。

私はおもむろに前方を仰ぎ見た。そこには建物の隙間から覗いている、剥き出しの山肌が見えていた。私たちが今日指しているのは、あの場所だった。

目的地は目前、もう麓まで来ているのだ。

「エリスさん、突然立ち止まって、どうかされましたか？」

その声で我に返ると、エドが私の顔を見て首を傾げていた。

「あ……つうん、何でもない」

私が慌てて彼の後についていこうとした時、直ぐ脇の建物の陰から、何かが躍り出でてくるのが見えた。

瞬間。

ザシユツ。

空を切り裂くような音が聞こえてくる。同時に悲鳴。

それはすぐ田の前だつた。傾いていく身体からは飛沫が上がつているのが見える。

私は突然起きたその光景が信じられず、呆然と見てゐるしかなかつた。が、足元に何かがぶつかつたので、反射的に下を向いていた。

それは頭部。

仰向けで白目を剥いた男の顔がそこにはあつた。切断された首から血が吹き出し、地面へ広がりつつある。

私はそれを見た途端、自分の意識が何処かへ吹き飛ばされるよう

な感覚がした。気がついた時には尻もちを付き、動けないでいる。その時点で刻が止まつたままの男の顔。地面と垂直に向いているそれが、恨めしそうな表情で虚空を見ていた。

どくん……どくん……。

全身を駆け巡るかのように、鼓動も自然と速くなつていて。自分の身体なのに自分のものではないような感覚。動かし方を忘れているような気さえする。

尻もちを付いたままの私は、男の頭部から視線を逸らすことができなかつた。

だがそれは不意に、宙へと浮かんだ。私も自然とその軌道を追つていったが、よく見れば浮かんでいたのではない。

血に染まつた指なし手袋グローブを嵌めた褐色の細い指が、男の髪を乱暴に掴んでいたのだ。

私は呆然と持ち主をそのまま見上げていた。

その先には、左眼を黒い眼帯で覆つている隻眼の女性がいた。年齢は二十歳前後くらいだろうか。

線の細い綺麗な顔立ちであるが、私と同じ翠色まいじつをした右眼は鋭く、

どことなく近寄りがたい雰囲気を持っていた。

髪は錆色で短髪。それに服は濃紺の道着。この格好を見れば、彼女がモンク（格闘術士）だということは一目で分かる。

「まさかこのような場所にて魔物が紛れていたなんて、思わなかつたのです～」

エドののんびりとした声で、私は初めて気が付いた。

モンクの持つていてる男の顔を改めて見てみると、毛深い顔の中心に目玉が一つ。切り離された胴体の破れた服の隙間からは、灰色の

翼が覗いている。明らかに人間ではない。

(でもさつきは人間の……そうか、化けていたのね)

先程まで沸騰しそうだった心臓が、徐々に収まつていいくを感じていた。私はようやく深呼吸をし、心を落ち着かせる。

「エリスさん～大丈夫ですか～？　なんだか顔色が～悪いようですけど～」

「だ、大丈夫よ。ちょっとビックリしただけだから。……でも魔物、だつたのね」

モンクは横たわっている胴体へ歩み寄ると、片腕だけで軽々と担ぎ上げ、周囲へ素早く目を配った。

見物していた群衆たちは刃物のような視線に恐怖したのか、自然と左右へ立ち退いていく。彼女は割れた道筋へ歩みを進めると、何事もなかつたかのように颯爽と立ち去つていった。

周囲の野次馬たちはこの一連の行動を、呆気に取られながら見ているだけだった。勿論私もその一部だ。

「エリスさん～立つてください～。そろそろ行かないとい～日が暮れてしましますよ～。アレックスさんたちも～待ちくたびれているかもしけません～」

座り込んだ姿勢のままでいる私にエドは声を掛けてきたが、その場を動くことができなかつた。何故なら　。

「エド～めん……腰、抜けた」

## 第8話 テイーンの意思

私たちは日も暮れかけた頃になつて、ようやくギルド前へ辿り着くことができたのだが。

「なんか……凄く混んでいるわね」

「皆さ〜〜こ〜〜で足止めされていますからね〜仕方ないです〜」

狭い屋内には術士たちが、すし詰め状態だった。しかも建物の周りにも人が溢れている。

ただの「足止め」ではない。そのような理由だけで特定の村へ大勢の者が、押し掛けてくるわけはないのだ。

これらの大半は恐らく、討伐隊参加希望者だらう。この付近に魔物が大量発生しているということや、今日正式にギルドから発表があるという噂などを聞き付けて、事前に乗り込んできたとも考えられる。

討伐隊に参加するということは、特に傭兵を生業にしている旅人にとっては、路銀を稼ぐ一番の方法でもあるのだ。

「これでは温泉にも〜ゆつくり浸かることができませんね〜。物凄く〜樂しみにしていましたのですが〜」

「あんた、入る気でいたのね」

「勿論です〜。折角他所で〜この村の温泉マップを手に入れたついでに〜非常に残念です〜」

Hドは眉を顰めながら、青いマントの中から一枚の紙切れを取り出して見せた。

「そんなもの、いつのまに〜!？」

「〜の村を通るのなら〜当然のことです〜。H里斯さんは違うのですか〜?」

「……否定はしないけど」

「こここの温泉は疲労回復や神経痛、筋肉・関節痛、打ち身などにも効くらしいと、何処かで聞いたことがある。

「でもそうなると、宿屋の確保も無理そうね」

「街中で野宿ですか？」

「うーん、どうかな。もしかしたら野営場所を、ギルドが提供してくれるかもしないわよ。これだけ村中に術士が溢れていたら、村民も迷惑だろうしね」

その辺りのことは多分、なんとなるだろう。今はそれより、ディーンたちを探すのが先決である。

「これだけ人が多いと、探しようがないわね」

「中へ無理矢理、突っ込んで行きますか？」

「いや、それは止めておくわ」

私は即座にその提案を棄却した。この人混みの中でも、酔いたくはない。

「取り敢えず、この建物の周りでも一周してみる？ もしかしたら中には入っていなくて、外に出ているかもしれないし」

エドが私の提案に軽く賛成すると、私たちは建物の裏手へと回つてみた。

流石に裏の方は正面よりも薄暗かつた。日が落ち始めているので、点灯係の精霊術士が疎らにある街灯へ、明かりを灯しに来ていた。正面よりは人数が減っているようだが、それでも人影は途切れることがなかつた。

私たちが辺りを見回しながら丁度角を曲がつた時。

「えー？ 水の社から來たんですかー？」

「はつはつはつ、そうとも。なんと俺は、水の精霊ウンディーネの

「英雄を受けた英雄なのだ！」

「まあ、すつごおーい！！」

「超イケてるぅー」

「英雄だなんて、メチャメチャカッコ良すぎですう  
私と同年代くらいの女の子たち十人程が何かを取り囲み、賑やかな声で騒いでいる。私はそっと建物の陰に隠れた。

「エリスさん」アレックスさんがいましたよー。でも何で僕たちこんな所で隠れて見ているのですか～？」

「いや、なんだか急に他人のフリをしたくなっちゃって……」

私はモゴモゴと口の中で答えた。

あのような集団は昔から苦手なのだ。それに何となくではあるが、アレックスとパーティを組んでいると思われたくないような気もした。

「エリス、エド、こんな所で何をしているんだい？」

聞き慣れた声で振り向けば、背後の暗がりから人影がヌツと出てきた。あまりにもそこに溶け込んでいたために、一瞬で心臓が飛び出しそうになつた。それが事前にディーンだと分かつていても、突然その格好で現れたら誰だつて吃驚してしまつ。

「あ……えーっと、アレックスを見つけたんだけど

「おや、女の子たちに囮まれているのか。仕様のない奴だ。人目につかないとこりへ隠れていると、言つておいたはずなんだがな」

「ディーンさんは、今まで何処へ行つていたのですか～？」

「ああ、ちょっとギルドに用事があつたからね」

彼はそう言いながらスタスターと、アレックスたちのほうへ近付いていく。

「アレックス」

その声で一斉に振り向いた少女たちはディーンの姿を目にした途端、悲鳴を上げながら脱兎の如く逃げていった。

「ははは…あの『たち』、面白こみつけしていくな  
彼女たちの後ろ姿を見ながら彼は不気味な笑み　といふか、愉快そうに笑つた。

「君たち、遅かつたではないか。また迷子になつたのかと思つていたぞ」「

「その点は」安心を。地図を持っていますし、それにエリスさんともはぐれないようにアレックスさんの仰つた通りしつかりと手を繋いでいましたから～」

「うむ。どうやら俺の発想が、功を奏したようだな」  
アレックスは顎に手を置いて、ウンウンと満足そうに一人で頷いている。

そんな彼に向かつて、ディーンは少し強い口調で咎めるように言った。

「とにかくアレックス、隠れていないと駄目だ！」

「む、何故俺がコソコソと隠れねばならんのだ。胸を張り威厳を保つことこそが、皆から尊敬され愛されるべき真の英雄たるもの姿であり、努めではないのか」

逆に反論するアレックス。続けて何かを言いかけた様子だったのだが。

「分かつた、分かつたよ。どうせお前に言つ聞かせようとした俺が、馬鹿だつたよつだな」

ディーンは降参したかのように肩を竦めると、溜息とともに両手を胸の辺りまで挙げた。それに対し「分かれば良い」とあっさり納得したアレックスは、それ以上何も言わなかつた。

やはりこいつは、この場面では、こちら側から折れ、即座に話の幕を下ろすのが効果的なようだ。また一つ、勉強になつたような気がする。

「ヒカル君、ディーンさんはギルドについて何の用事があつたのですか？」

「そのことなんだが、俺はこの村では君たちと別行動をとることにしたよ」

## 第9話 魔物討伐隊へ

「えっ、何で？？」

「討伐隊への参加を申請してきたんだ」

ディーンはそのために、私たちのパーティからは一時離脱すると  
いう。

「何で討伐隊へ？」

「どうせここで足止めされるんだつたら路銀も稼げるし、参加しない手はないだろ」

本當ならば私たちも参加したいところである。しかし少なくとも修行中の私やエドには、まだその力はない。

「討伐って、いつから始まるの？」

「第一陣は、明日早朝から行動を開始するそうだ。俺もいつでも出陣できるように、今からギルドへ詰めなければならぬ」

「そつか…」

私が不安そうな顔をしていることに気付いたのか、彼は続けて言う。

「騎士や大勢の術士たちがいるこの村は、今は比較的安全な場所だ。余程のことがない限りは、魔物がここへ攻め入ってくる心配はないと思うよ。だから君たちも通行止めが解除されるまでは、ゆっくりと英気を養つておくといい」

ディーンの話を神妙な顔付きで聞いていたアレックスだったが、ようやくじこで口を開いた。

「ならば俺も参加するぞ」

「それはやめたほうがいい」

「却下」

「参加しないほうがいいと思います～」

「私たちは直ぐおも口を揃えて、その申し出を撥ね付けた。  
「な、何故皆して俺を否定するー？」

アレックスは私たちの息の合ったコンビネーションに、動搖の色を見せてくるようだ。

「ハツ、まさかこの前魔王に負けたといひことで、この戦でも俺が生き残れないと思ってるのかー」

「いやいやいや、そういうのじゃなくて」

「だがそれは心外というものだわ。

確かに俺は魔王に負けた。それは男らしく、潔く認めよう。  
だからといって、この戦でも生き残れないという保障が何処にある  
というのだ。

否。断じて否つ！

そのようなものなど何処にもないのだ。

戦といつもは、蓋を開けて見るまでは結果が分からぬ。戦況が変  
われば、窮鼠猫を噛むことだってあるのだからな。  
約束しよう。俺がこの命に代えても、君たちへの勝利を捧げてみせ  
よつと

「

「だから、違うって言つてんでしょうがッ！――！」

どんづー！

私は思わずアレックスを背後から突き飛ばしていた。

「な、何をするのだエリスよ。いきなり非道いではないか

「あ、『めん』『めん』。あなたの話が長くなりそうだったから、つい地面で平伏した格好のまま、肩越しから恨めしげな目でこちらを見ているアレックスに対して、私は頭を搔きながら素直に謝った。彼は人の話を聞こうともせず、訳の分からないことをまた延々と、熱い口調で語るのをしていたのだ。途中から我慢ができなくなつて、つい手が出てしまつた。

「くすくすくす…」

ディーンがこちらを見て可笑しそうに笑つてゐる。

「何か私、おかしなことを言つた?」

私が困惑気味な視線を向けると、彼は慌てた様子で手を左右に振つてきた。

「ああ、スマン。君はやっぱり少し、リアに似ているなと思つたものだから」

「へ? 似ている? ?」

## 第10話 アレックスへの説得

「顔が?」と続けようとして止めた。

リアというのはアレックスの妹である。

今回私たちが行動を共にしている理由は、水の社へ行くついでに彼女にも会つたためだつた。彼らの故郷で考古学者をやつている彼女が、私たちに付けられた刻印のことも何か知つてゐるかもしれないといつのだ。

そんな彼女と、年齢<sup>トシ</sup>が近いことぐらいしか接点のなさそつな私の、何処が似てゐるというのか。

しかもアレックスの妹ということは、かなりの美少女に違ひないのだ。一度も会つたことはなかつたが、似てゐるのが顔でないことくらいは分かる。

と、自分で言つていて何だか虚しくなつてくるが。

「似てゐるのはアレックスへの対応の仕方、とかかな。もつともリアの場合は素手じゃなくて、トマホーク（投てき斧）なんだけど」「ト、トマホーク…？」

トマホークが重量のある武器だということは、私でも知つてゐる。そのようなものを一体、どのようにして使用するというのだろう。それを投げられたら誰でも　例えアレックスといえども、確実に即死すると思うのだが。

「詳しいことはリアに会えば分かると思うが、そんなことより今は時間がない」

「そうなのだ。何故俺が討伐隊へ参加してはいけないというのだ。英雄たる者、民を守ることこそが義務ではないのか」

私が突き飛ばしたお陰で冷静になれたのか、先程の暴走モードから復活したようだ。ディーンは溜息を吐きながらも、アレックスの問いに答える。

「その理由か……原因はお前自身の能力にある」

「む、どういふことだ？」

「お前が精靈に与えられたという『精靈の加護』さ。それには魔物の術攻撃を防御する能力があるだろ」

『精靈の加護』というのは、対魔族用として選ばれた英雄にのみ精靈が与えた防御能力らしい。

普通なら精靈術士でもない限り防御術は使えない。しかしその能力を得たアレックスは剣士でありながら、術文や精靈石も使用せずに魔物から受ける術攻撃を防御できるのだ。但し物理攻撃は防げないという欠点がある。

そしてこの能力にはもう一つ弱点があった。

「だが逆に人が使う術にはかかりやすい。例え弱い術をかけられた場合でも、他人の倍以上の効力でかかってしまう」

「それは知っているぞ。だから何だというのだ？」

「まだ分からぬのか？ 人間の術攻撃をまとめて喰らつたら、お前は確実に即死なんだぞ」

「何故俺が人に攻撃をされるのだ？ 僕は魔物ではなく同じヒトではないか。恨まれる憶えもないぞ」

「いや、そんな意味じゃない。

討伐隊というのは様々な術士たちが集まつた、あまり統率が取れているとは言い難い寄せ集めの集団だ。今回は特に一つの部隊で人数が多く投入されるだろうし、乱戦も予想される。その時に術士の攻撃が、うっかり当たつてしまふことだってあるだろ」

「うつかり？……避けねばいいのではないか」

「簡単に避けられればいいが、乱戦時には確實に避けられるとは限らないんだよ。

お前はまだ経験がないから分からぬだらうが、敵に囲まれた場合、皆他人のことなんかを気にしている余裕はないのさ。気を抜いた時点で殺られるからな。

相手が敵じゃないとしても、誤つて味方から攻撃をされてしまつことだつてある」

私にもまだそのような経験はない。しかし父からは戦場とはどういうものなのかを、色々と聞かされていたから何となく分かる。

アレックスは顎に手を当てて宙を見詰め、考え込んでいる様子だつた。

「誤つて？ そのようなことがあるのか？」

「皆、自分を守ることに必死だからな。冷静さを欠くことだつてあるんだ。

思い掛けない者に攻撃されたら誰だつて、一瞬の判断力が鈍るだろ。流石のお前でもそんな時には、完全に避けられるとは思えないのさ。しかもお前の場合、掠つただけでも即死にはなるだらうし」  
(掠つただけで即死？)

ディーンは一見尤もらしいことを言つているようだが、この前の洞窟での出来事を考えれば、掠つただけでは即死にまで到らなかつたと思う。私がアレックスに痺れを感じる程度の弱い術をかけた時には、目を覚ましただけで死ぬようなことはなかつたし。

しかしエドはこのことに気付いていないのか、追い打ちをかけるように口を挟んだ。

「そうですよ～アレックスさん～。貴方がここで死んでしまつたら一体誰が魔王を倒すというのですか～？」

「ま、そういうことだ。この戦いは俺たちを信じ、任せてほしい。

今お前に死なれたら世界の……いや、この世の森羅万象生きとし生けるもの全てに對しての、莫大な損失になつてしまふからな。

この前も言つたように今のお前は、己を鍛え直す時期なんだ。自分が『英雄』だという自覚を持つて。それが一番だ』

ディーンの言葉でアレックスは、まだ何かを考え込んでいる様子だったのだが。

「成る程、言いたいことはよく分かつた。どうやら俺には、英雄としての自覚が足りなかつたようだな。今回は君を信じて身を退こう」  
よつやく折ってくれた。

（アレックスを説得するのって、凄く疲れるわ）

私が説得したわけではないが、この遣り取りを見ているだけでかなり疲れてしまった。ディーンはなんて忍耐強いのだらう。尊敬してしまう。

## 第1-1話 それぞれの修行

ディーンと別れた私たちは結局朝まで、ギルド裏手付近の外壁に並んで座り込んでいた。

ギルドでは私の予想通り野営場所を提供していたが、それは討伐隊参加者用のもので、私たちのような不参加者は門前払いだつたのだ。それで仕方なくこの場所で一夜を明かすることにしたのである。

周囲には私たちのような状況の旅人が、かなりいるようだつた。皆一様に膝を抱え、通りの片隅で仮眠していた。

それらの殆どのは私たちと同じように、水の社へ向かう修行中の旅人なのだろうか。私より明らかに歳の若そうな、弟のソーマと変わらないくらいの年頃の子供もいる。

「エリスさん～僕、待つている間に～温泉巡りがしたいのですが～」

「温泉？　でも昨日は入れないかもって、言ってなかつたつけ」

「混雑の予想はされるのですが～でももしかしたら入れるかもしれないで～その可能性にかけてみたくなりまして～。

それにこの村には～美声効果のある温泉もあるらしいので～どうしても入りたいのです～。

もし良かつたらお二人も是非～一緒にどうですか～？」

エドが隣で、持っていた温泉マップをひらひらと動かしながら説いてきた。

「温泉、ねえ……アレックスはどうする？」

私が考え込みながらアレックスへ振ると、今まで瞑想していた彼は静かに目を開けた。

「俺は辞退する」

「え、どうして？」

「今の俺には他に成すべき事がある。」のよつた時にこそ魔王を倒すべく、精神と肉体を鍛えねばならないのだ

アレックスの言いたいことは何となく理解できた。

私も温泉はかなり魅力的であったが、この間に少しでも自身の鍛練を積んでおきたいと思つていたところだつた。

「私も今はパスするわ。今は温泉でのんびりするより、少しでも力を付けたいから」

「そうですか」それは残念です

エドは肩を落として名残惜しそうに温泉マップを眺めると、やがてのろのろと懐へ仕舞い込んだ。その表情はいつもと違つて暗い。余程この村の温泉を楽しみにしていたのだろうか。

「それにしてもこの村には、美声効果のある温泉があるのね。道理でエドみたいな芸術士を、結構見かけると思ったわ」

今まで通つてきた町村でも見かけることはあつたが、すれ違う確率はこれほど高くはなかつた。

「そうなのですよ。美声効果のある温泉といつのは～世界でも珍しいのです～」

エドの話によれば、吟遊詩人の間ではここ温泉は有名らしい。直接攻撃型の術士とは違う間接系の彼らは、いざという時のために仲間をサポートしなければならない。そしてそのためには常に、万全のコンディションを整えておかなければならぬといふ。

だから彼のような巡礼者は、必ずこの温泉へ立ち寄ることが多いそうだ。

「もしかして芸術士の場合はそういうのも、修行の一環なの？」

「勿論です。ただ温泉へ浸かるだけではないのですよ。

喉を潰してしまつたら、吟遊詩人としての生命も絶たれますし、体

調を整えることもまた、鍛練なのです」

世の中には多種多様の術士がいるよう、「、それぞれの修行方法も当然異なる。エドも私たちと同様、修行目的で温泉へ行きたいのだ。私にはそれを止める権利がなかった。

「私たちはいいから、エドだけでも行つてきなさいよ」

「え、いいのですか？」

「うむ、それもまた修行があるのであるのなら、俺も構わないと思つた。やつくりしてくるといいのだ」

私たちの提案に、エドはしづらへ迷つてゐる様子だつたが。

「分かりました～。アレックスさんやエリスさんがそう言われるのなら～お言葉に甘えさせていただきます～」

エドはいつもの陽気な表情へ戻りながら、「皆さんとは夕方こちらで落ち合いましょう」と言つと、荷物を抱えて人混みの中へと消えていった。

## 第1-2話 感じる気配

私とアレックスの向かう先は村の外である。 フイオス町方面の門は封鎖されており、その向こうでは討伐隊が 戦っているはずだった。だから反対側 私たちがこの村へ入った 道から外へ出るのだ。

昨日はそこから直ぐのところで魔物に遭遇した。その辺りならば 修行するには十分だ。

だが。

「門が閉まってる？？」

閉じられた門の両脇には、騎士様が守衛として一人配置されてい た。しかしアレックスは構わずに近付いていく。当然直ぐに呼び止 められた。

「君たち、近付いてはいかん」

「何故だ」

「モンスター・ミストが出現したせいで魔物が集まってきた」と、 昨日団長が話していたのを聞かなかつたのか？」

「でもそれは反対側なんじゃ？」

疑問に思つた私は訊ねてみた。昨日の発表では、フイオス町間だけの街道を封鎖するという話だった。それなのにこの場所も同様に 封鎖されるといつのはおかしい。

「こちら側からも、魔物が徐々に集まり始めているとの報告がある。それを受けてフイオス町方面だけでなく、この近辺一帯もモンスター・ミストが消えるまでは、一時的に封鎖することになった」 守衛は一旦言葉を区切ると、胡散臭いものを見るような目つきで

私たちを見回した。

「何れにせよ、今外へ出るのは危険だ。デートをするのなら、この中ででもできるだらう」

「う……！」

私はその言葉に絶句した。

私たちはどう見ても術士である。装備を外した普段の格好ならともかく、この姿でそんな侮辱を受けるのは心外だ。

私は反論しようとした口を開きかけたのだが、ふとあることに気が付いて下に視線を落とした。

先程混雑している温泉街を通った時、「また迷子にならないように」とアレックスが言つてきたのを思い出したのだ。そういえばその時から、手を繋いだままである。

(ん？ あれ？ この繋ぎ方って…)

それを見詰めながらここにでまたもや、あることに気が付いた。それは彼が推奨してきた「指の外れにくい繋ぎ方」だったのだが。(そういえばこの繋ぎ方って、確かに別名がある…)

！  
カッフルつなぎ！？

私は実際にやつたことはなかつたが、街中で仲睦まじいカッフルたちがこんな手の繋ぎ方をしているのを見かけたことがある。かなりウラヤマ……いやいやいや、目に付いていたから憶えている。そのことに気が付いた私は急に恥ずかしくなつて、無理矢理手を

振り解いていた。

「ん？ 突然どうしたのだ？」

「な、な、なんでもない…わよ」

私は思わず動搖してしまった。当然である。

昨日もHドといのようにして街中で、ずっと手を繋いで歩いていたのだ。そして今日はアレックスと。こんな風に繋いで歩き回っていたら、術士のコスプレをしている、ただの間抜けなカツブルにしか見えない。何故もつと早くに気が付かなかつたのだろうか。

「やはりどうしても、外へ出してはもらえないのか？」

私が頭を抱え込み、門の片隅で小さくなつて反省していると、アレックスのほうはまだ諦めきれないのか、守衛に食い下がつている声が聞こえてきた。

「あんたもしつこいな。団長からは、鼠一匹通すなという命令が下つていて。もしどうしても外へ出たいというのであれば、討伐隊に参加するしかないな」

「！ ……なるほど」

アレックスは何を思つたのか突然後ろを振り向くと、スタスターと反対方向へ歩き始めた。私は嫌な予感がした。

「アレックス……あんたまさか、討伐隊に参加しようなんて考えてないでしょ？」

「無論、参加する」

当然のことのように、さっぱりと言ひ放つた。

やつぱり！

「昨日」ティーンからは、あれほど駄目だつて言っていたわよね  
「それは修行ができると仮定した場合の話だ。しかし今は状況が違う。外へ出られぬでは修行にならないからな。このままでは魔王を倒すどころではなくなつてしまつ」

「んな大袈裟な。出られないといつても、ほんの数日程度じゃない」  
エドの話では、霧は約一週間程度で消えるらしい。討伐隊の編制時期から推測すれば、ここに足止めされるのは最低でも一、二日ぐらいいのものだらう。

「たかが数日といえども、少しでも身体を動かさなければ感覚が鈍つてしまつ。昨日は討伐隊へ参加することよりも、修行のほうを優先した。だがこの状況では参加しながら修行をする以外、道がないではないか！」

いつものように拳を握り、堂々と宣言した。

（アレックスって、修行のこと以外は頭にないのね。クソ真面目なのかただの馬鹿なのか、判断が難しいところだわ）

頭を押されて呆れていると、アレックスが突然私を抱き寄せてきた。そして素早く建物の陰に連れ込まれる。

そこは表の通りとは違つて薄暗く、狭い路地だつた。建物間の隙間のような場所である。

「な……急にどうかしたの？」

後ろから抱き竦められた格好になつていたのでかなり焦つていたが、私は何とか冷静さを保ちつつ、警戒するように表通りを窺つている彼に向かつて尋ねた。

「うむ。どうも昨日から誰かに見張られているような気がするのだ。それに今一瞬だけだが、殺気のようなものも感じられた」

「見張られて……てあんた、只で立つんだから仕方ないんじやないの」

道行く人々 特に女性は擦れ違いざまに、必ずアレックスのほうを振り向くのである。いつも誰かに監視されているようなものなのだ。

「何を言つか。このように謙虚で人畜無害なこの俺の、何処が目立つといつのだ」

私の位置からでは背後にある彼の表情は全く見えなかつたが、声のトーンから察するに、恐らく心外だともいつよつな顔付きになつてゐることだろう。

長身な上に美形である。ただそこへ佇んでいるだけでも立たないはずはないのだが、本人にその自覚がないといつのは恐ろしいことだ。

しかし殺氣というのは気になる。私には何も感じられなかつた。とはいえたの緊張感は、腕の中にいる私にも伝わってきていた。

私は念のために意識を辺りに這わせてみる。

刹那

。

アレックスに抱えられ、私は一緒に奥へ飛んでいた。

素早く体勢を立て直してその方向を見ると、短剣ダガーが三本地面へ突き刺さっている。私たちがさつきまで立っていた場所だ。

疑問に思つ間もなく、その上へ覆い被さるよつて黒い影が落ちてきた。

「逢い引きの最中に……よく俺の攻撃が躊躇たな」

唸るような声とともにゆらりと揺ると、それは細長く上へ伸びた。

いや、よく見ればそれは影ではない。  
人間の男だつた。

全身黒いマントのようなものを羽織つてゐる。頭は黒い短髪が覗いていたが、口元は隠すように黒い布で覆われていた。

全身が黒ずくめで、見るからに怪しい格好だ。しかも今物凄く、的外れな独り言をぬかしたような氣もするが、それに対して突つ込んで良い空氣ではない。

「あんた一体、何者なのよ。何でいきなり攻撃してくるわけ？」

私は何處にでもいる一般的な、ただの巡礼者だ。誰かに恨まれる理由など当然ない。

だとすれば、狙いは一緒にいたアレックスなのか。それとも人違いで攻撃されただけか。

「答える義務はない」

「もしかして人違いじゃないかしら。私、あなたのことなんか知らないんだけど」

「貴様は知らなくとも、俺は貴様らを殺すのが仕事。これ以上の会話は、愚問愚答というものだ」

男はくぐもつた声でそう告げると両手に三本づつ、計六本の短剣を持ち身構えた。こちらを睨め付ける双眸には、鋭い眼光が宿つている。

「これ以上の会話は無意味」と、その態度が示していた。

全身から解き放たれる気には、妙な威圧感があつた。かなりの手

練れなのかもしれない。

仮にこの男と真正面から戦つたとしても、私には全く勝ち目がないことを直感した。私は精霊石の嵌め込まれた左腕のブレスレットを強く握り締める。

(精霊術……何とか隙を作れないかしら)

「ちらへ向けられる殺氣から考へると、いつ攻撃をされてもおかしくはない。

人間相手に、しかもこんな街中であまり術を使いたくはなかつた。が、この状況ではやむを得ないだろう。

しかし私が術文を口にする前にアレックスが先に動いていた。腰に下げていた長剣を引き抜くと、男に斬りかかっていったのだ。

刃と刃のぶつかる音がする。男がそれを右手に持つてゐる三本の剣で受け止めた。

男は透かさず空いでいる左手でそれを繰り出してきた。それらを指の間に挟み込むと、モンク（格闘術士）などがよく使う武器「鉄爪」<sup>ンクロ</sup>のように攻撃してきたのである。格好はモンクではないが、恐らくそれがこの男の武器なのだ。

剣はギリギリのところでアレックスの鼻先を掠めた。

が、それに気を取られていた彼の下半身はガラ空きだった。そこを蹴られ、背後へ吹き飛ばされる。

私は男へ向けて鎌鼬を放つ。  
かまいたち  
だが。

「ワイン・シャル・クリン  
風刃銳鎌！」

私は一瞬、自分の目を疑つた。

「！？」

彼は私の放った術を、両腕でいとも容易く振り落としたのだ。服には多数の切れ目が付いていたが、出血の様子は見られない。

「これで術士を名乗っているとはな。笑える冗談だ」

男は無表情な視線でこちらを一瞥したが、直ぐに剣を構えているアレックスの方へと向き直る。

私はその場で愕然としていた。

勿論男の他愛ない皮肉に傷ついたわけではないし、私自身が彼に対して怯えているわけでもない。

(術が……弱い！？)

私は魔物と戦闘する時のように、力を放出したつもりだ。だが今 の攻撃力にはいつもの手応えがなく、殺傷能力が皆無なほどに弱かつた。

男は私など見向きもせず、真っ直ぐにアレックスへと駆けていく。

「神撃水剣！」

アレックスは属性を剣へ付けると、迎え撃とうと身構えた。

私はその声で我に返り、続けて光弾を放った。

だが。

それは男に当たることもなく、勢いのないままフラフラと地面へ落ちていくだけだった。やはりいつもの威力がない。

その原因は一つしか思い付かなかつた。

この前の魔物に付けられた奇妙な紋様。それしか考えられない。

剣を再び受け止めたアレックスは、それを押し戻した。液体の蒸発するような音を立てながら、男の持つ短剣が斬られていく。アレックスはそのまま振り下ろしていた。が、それは切つ先を掠めたにすぎなかつた。相手が後方跳躍で避けたのだ。しかし口元を覆つっていたマントは切られている。

「それが貴様の能力か」

男はここで初めて露出した口端を上げると、折られた短剣を無造作に投げ捨てた。

私の足元に転がってきたそれは、刃の部分が溶けたように真つ二つになつてゐる。属性を付けたアレックスの剣は、金属をも溶かす能力を持つてゐるのだ。

男は新たに同様の剣を懐から取り出すと、再び攻撃を仕掛けいく。一体いくつ隠し持つてゐるのだろうか。

(それについてもあの人、まだ本気で戦つてはいないわね)

足元に落ちている刃の欠けた柄を見れば分かる。

精霊石が付いていないのだ。

精霊術士以外の術士であるならば、メインの武器には大抵付いているはずである。例えどんな術士であつても、特に魔物との戦闘では属性の力は欠かせないからだ。

私は彼らが戦つてゐる間に、タイミングを計りながらじりじりと後退していった。

「Hリスさん、アレックスさん！……」

私たちを呼ぶ聞き慣れた高音が、背後にある狭い路地の奥のほうから響いてくる。

「逃げてください…！」

その声に対し、私は後ろを振り向きたくはなかった。何となく嫌な予感がするのだ。

何故なら、つい最近にも似たような場面に遭遇した気がするのである。もしかしてこれが世間で言つた『デジャヴ』といつやつなのだろうか。

と、風を切るような音が直ぐ近くで聞こえてきた。  
足元にソレが突き刺さるのを見た私は、反射的にその場から飛び退いていた。

振り返ると案の定、Hドガこちらへ向かって必死の形相で走ってくるところである。しかもその背後からは、短剣が何本も投げられてきていた。

「な…っ、ちよ、Hド…? ?」

私は咄嗟に風のシールドを張った。それは音を立てて跳ね返される。

「は…あれ? ?」

剣がシールドで阻まれたのだ。つまりは私の術が「正常に機能」しているということになる。

「何で？ だつてさつきは弱い術しか出せなかつたのに

私は混乱していた。

思わずいつもの癖でシールドを出してしまつたが、弱術しか放て

ないとしたら防御もできないはずなのだ。

先程の術と今の術での違いは、攻撃か防御といふことだけである。自身の精神力と大気中にある精靈力。それらを精靈石で融合させ增幅し、術文を使い一気に放出する。攻撃と防御に違いはない。使用方法は同じはずだつた。

「エリスさん、早く逃げないと敵が来てしまいます～」  
エドが私の後ろへ回り込みながら叫んだ。

「へ？ 敵？？？」

前を見ると、黒い物体がじちらへスピードを上げて向かつてくるところだつた。

だが目の前で一瞬にして消えた。

私が慌てて周囲を見回していると、

「むうっ、いつの間に！？」アレックスの驚くような声が聞こえてきた。

私たちに攻撃を仕掛けてきた男。

その横にはいつの間に現れたのかもう一人、別の男がいたのだ。  
この男もマントのようなものを羽織り、口元が布で覆われていた。  
背格好や着ている服も、隣の男と全く一緒だ。

## 第15話 敵の誤解？

「まだ仕留めていなかつたのか、ボブ」「ふ…それはこちらのセリフだ、レグ」二人は並び、アレックスに向かつて構えを崩さず互いに声を掛けた。

「流石『精靈の加護』を受けた者だ。俺の攻撃を避け、よもやここまで逃げ果せるとはな」

エドを追つてきたボブと呼ばれた男が、苦虫を噛みつぶしたかのよつな目でこちらを睨んでいる。

「エド、あんたも攻撃されたの？」

「そうなのです。何故かあの人に殺されそうになつたので、ここまで必死に逃げてきたのですよ。それでようやくここまで皆さんに再会できたのです」

必死に逃げて。

そういうえばエドは、逃げ足だけは速かつたのだ。  
しかし。

(あの人、今確かに『精靈の加護』って言つたわよね)

アレックスにだけある特殊能力。

今の話から察するに、その能力がエドにもあると、あの男は言つているのだ。

(なんである人、そんな誤解を？ それに)

その能力のことはアレックスの故郷の人間と、私たちのよつなごく一部しか知らないはずである。しかも普通なら精靈や魔王関連の話は、伝説としか受け取られていないはずだ。なのにこのボブとい

う男も、それらを信じているということなのか。

「だがそれもここで終わりだ。貴様らには消えてもいい。」

その言葉を合図に、二人は同時に別れた。

ボブのほうはアレックスへ。そしてレグは私たちのほうだった。

「君たち！」

アレックスが叫びながら私たちへ駆けてこようとしたのだが、当

然それをボブに阻まれた。

「神風護壁！ 雷風烈破！」

私は風属性の防御術と攻撃術を同時に出した。

しかし攻撃術のほうはレグへ届く前に、自然消滅してしまった。

ツキイイイン！

音を立て、短剣の刃が私のシールドに当たる。

「グ……ツー！」

瞬間、思わず呻いていた。それでも腹の底から力を振り絞り、何とか堪える。

やはり攻撃力は弱く、使い物にならなくなっていた。が、防御のほうはいつも通りのようだ。

背後で流れていた唄が止まつた。どうやらエドの唄（術）のほうも、完成したようである。

身体全体に熱が帯びてくるのが分かる。エネルギーが外部から流れ込んで来ているのだ。

私はそれを体内にある精神エネルギーと融合させ、放出する。シールドがそれに反応するかのように強化されていく。

これは吟遊詩人などの芸術士がよく使う、支援系の術だ。

吟遊詩人の場合、補助術といえば敵味方問わず、唄の聞こえる範囲内のものであれば　クラスなどの制約は抜きに考えて　誰にでも効果が及ぶ。

しかしこの支援系だけは対象者一人にしか効力がないという、特殊な技なのだ。恐らく自身の体内エネルギーを他者に分け与えるという、他には例を見ない能力が関係しているのかもしないが、私はその仕組みについて詳しくは知らない。

エドは私に言われるまでもなく、事前に支援系の術を唄い始めた。

唄い始めた時にその系統の術だということは、私にも瞬時に分かった。何故ならこの状況で芸術士が使う技といえば、それ以外考えられないからだ。

しかしレグは強化されたシールドに阻まれていても、絶え間ない攻撃を繰り出してきている。私たちはそれに押され、じりじりと後退していった。

エドも後ろから私を支えているが、この男の力押しは半端ではなかつた。二人がかりでどうにか耐えているほどだ。

だが私の消耗も激しい。体力と精神力が大量に削られていくのである。

私はこれほどまでに短時間で消耗するような激しい戦い方を、今まで経験したことがなかった。このままいけばこちらが不利になるだろう。

「エリスさん、耐えて下さい」

いつもの気の抜けるようなエドの声で、私は本当に気が抜けてしまった。

「…しま…っ」

気付いた時にはもう遅かった。

鈍く銀色に光る先端が、直ぐ田の前にまで迫ってきていたのだ。

## 第16話 接触

「あだつ！」

私は思わず目を瞑ると、潰された蛙のような声を出していた。何かが額に当たったのである。

しかし私は死んではいなかつた。目の前に火花が軽く散つた程度だ。疑問に思いながらも額をさすりつつ、足元に落ちたソレを見る。すると

「？？？ まんじゅう？？」

そこに落ちていたのは、透明な包装紙に包まれた小さな丸い物体一つ。その中心には温泉マークの焼き印まで入っている。

（何故まんじゅうが？ まさか剣が変化した……とか）

一瞬そんなことを考えてしまつたが、はつきり言つて有り得ない。

「貴様は…」

脇から声がした。レグの声だった。いつの間にか私たちの横へ移動していたのだ。

だがそれは、私たちへ向けられたものではなかつた。

私は彼の視線の先へ顔を動かした。

暗がりから出てくる人影。

（あ、あれ？ あの人）

その人物には見覚えがある。というより昨日見かけたばかりなのだから、直ぐに忘れるはずがなかつた。

そこに佇んでいたのは、昨日街中で魔物を殺していた隻眼のモンク（格闘術士）だつたのだ。

「貴様は、キラー・アイ……名はルティナと言つたか」

「ふん、あたしのことを知つていいのか。その呼び名も有名になつたもんだね」

ルティナと呼ばれたモンクは平らな大きめの白い箱を小脇に抱え、白い何かを口に入れながら現れたのである。

先程レグの背後から饅頭を投げ付けてきたのは、恐らくこのルティナなのだろう。黒い餡が口元に付いているので間違はない。

「昨日の騒ぎを見ていたからな。それに俺たちの間では、貴様を知らない者などいない」

「……成る程な」

ルティナは眼光を宿しながら、口端に付いていた餡を親指で拭うと、ペロリと舌先で舐めた。

「なら容赦はしないよ。かかつてきな！」

彼女は視線を彼らのほうへ向けたままで、持っていた箱を素早くこちらに投げ付けてきた。私は突然のことだったので吃驚して、反射的に受け取ってしまう。

開いているその中を覗くと、先程と同じ白い饅頭が六個入っていた。

「この箱～仕切りが三十六個分ありますね～」

エドも私の背後から覗き込んでいる。

三十六個入りの箱の中で、残っているのが六個。ということはあの女性が一人で、三十個も食べたということか。

(あ、三十個じゃなくて二十九個だ。さつき投げた物もあるから)

私は足元に落ちている饅頭を見ながら思つ。

「では」ひりとして、本気を出せてもうおつ……ボブ！

レグはもう一人の名を呼んだ。すると今までアレックスと戦つていた男が、突然レグの横へ姿を現していた。それは一瞬の出来事で、私にはいつ移動してきたのかが速すぎて見えなかつた。

「アレックスさん～大丈夫ですか～？」

「ハッ、そうだアレックス！」

私はエドの声で我に返つた。饅頭の数などを数えている場合ではなかつたのだ。

駆け付けるとアレックスが、建物の背に凭れて倒れ込んでいた。

私は素早く身体を調べる。

「どうやら、致命的な負傷はないみたいね」

腕や足など、防具で覆われていない部分が切り刻まれてはいたが、急所の外れている箇所ばかりであつた。

「ククク…これから楽しくなるところだつたんだがな」

ボブはおもむろに着てゐるマントを脱ぎ捨てた。

瞬間、なんと彼の形態が変わつたのだ。先程まで覗いていた形相が緑色の鱗で覆われ、トカゲのような爬虫類系の姿に変化したのである。

同様に横にいたレグも変わつていた。昨日殺された魔物と同じよう、彼らもまた人間に化けていたのだ。

ボブがそのまま腕を上げると、辺りの「氣」が一変したように感じられた。

夜でもないのに一瞬で暗くなる。

空から降り注いでいた陽の光が、厚い雲に覆われてしまつたかのようだ。しかし上を見上げれば雲一つない。なのに視界が突然、モノトーンに変異したのである。

肌がビリビリと痺れるほどじ、張り詰められた氣の流れ。まるで

異界にでも迷い込んでしまったかのよつた、明らかに異質な感覚。

「な……!? これは……」

先程までしていた通りの向こうの喧騒も聞こえなくなっている。私はこのような体験をしたことがなかつた。だが講義の時間、父から話に聞いたことはあつた。

中位クラス以上が得意とする、結界術。

これを創り出すのには、多大な精神エネルギーと精霊力が必要とされるらしい。ボブが自身に掛けていた術を解いたのは、恐らくこれのために違ひない。ヒトへの変化にも同様にエネルギーを使うらしいのだ。

「フォール・デュー・ヴァイン  
強硬風拳！」

ルティナは術文で両拳に風を纏わせた。

それを合図にレグが彼女へ向かっていく。と、その周辺の壁が爆碎した。爆風と碎けた壁がこちらにも飛んでくる。

ルティナは壁に穴を空けながらそれを足場に、狭い壁を駆け上がつていった。レグとボブもそれを追いかけていく。

建物の上空で何かが交差しているのが見えた、と思つた瞬間。

「！？」

戦っているその場所から、無数の黒い何かがこちらへ降つてきたのだ。それも物凄いスピードだった。  
(駄目だ、間に合わない！！)

術文を唱えている時間がなかつた。

私はその衝撃に少しでも耐えるべく、無駄なこととは分かつてい

たがアレックスの身体に必死でしがみついていた。  
案の定、間もなくそれが全身に伝わってくる。

だが。

私はそっと目を開け、上を見上げた。

紋様が見える。

水の紋様が私たちを包んでいるのだ。

「そつか、精霊の加護」

アレックスの特殊能力が、彼を中心に発動していたのだ。

上空から落ちてくる黒い物体は紋様に弾かれるとそのまま地面へ落ち、爆音とともに穴を空けていた。

精霊の加護が発動しているとすれば、あれは上空で戦っている魔物の術である。恐らくルティナが彼らの攻撃を防ぎ、その流れ弾が真下にいる私たちに落ちてきたのだろう。

精霊の加護は魔物の術であれば、無条件で防いでくれるようなんだ。私たちも彼の側にいたので助かつたのである。

だがここで安心はできなかつた。

落ちてくるのは魔物の術だけではないからだ。

壊れた建物の残骸や、或いはルティナの術攻撃も同様に落ちてくる可能性があるので。

特にルティナの術攻撃だった場合には、アレックスの命にまで影響を及ぼしかねない。そうなる前に一刻も早く、この場を離れた方がいいだろう。

## 第17話　この状況で

「ともかく一人とも、安全なところへ避難しましょう。あの魔物たちが彼女に気を取られている間に、何とかここを脱出しなくてはならない。

私とエドは立ち上がり、逃げようとしたのだが。

「アレックス、どうしたの？　早く逃げないと……」

彼は座り込んだまま、全く動こうとしなかった。俯いているのでその表情は見えなかつたが、しかし何やらぶつぶつと呪文のように呟いていた。眩いでいる声が聞こえてきた。

「まさか俺が……」のよつなところでのような輩に……」

「ぐわあああっ！　またコイツはあああああ！」

「H、エリスさんへ落ち着いてください～！」

私はこの場で思わず頭を搔きむしりながら、身悶えしてしまった。アレックスはまたこのような状況の中で、一人落ち込んでいるのだ。一人で落ち込むのは一向に構わないのだが、時と場所を考えてほしい。

ともかく彼が一旦こうなつたら厄介である。周囲の言葉など、殆ど聞き入れなくなるのだ。

ここにディーンでもいれば上手く宥めてくれたかもしれないが、生憎今は別行動中だった。

「アレックスさんも～、しつかりしてください～！」

エドがアレックスを強く揺さぶつて正気に戻そうと試みているのだが、効果はなさそうである。

その間にも瓦礫の破片や、先程のような流れ弾も時々落ちてきていた。直ぐに正気の戻った私の防御術で今のところ防いではいるものの、私も逃げられるだけの体力や気力は温存しておかなければならぬ。そのため、いつまでもこの状態ではいられなかつた。

これは一番手っ取り早い方法で、アレックスを目覚めさせなれば。

「エド、退いて！」

落下物が来ないタイミングを見計らつた私は、押し退けるようにして急いでエドを退かすと。

「ドコッ！」

私はアレックスの綺麗な白い頬を、思いつきりグーで殴つていた。彼は右ストレートをまともに食らい、背後の壁へ上半身を打ち付けていたが、私は構わずにその胸倉を掴んで引き寄せる。そしてよく聞こえるように、その形の良い耳許で怒鳴つた。

「いい？ アレックス！

今はこんな所でヘコんでいる場合じゃないのよ。

こんな場所にいつまでもいたら、あんた本当に死ぬわよ。そんなことになつたら、元も子もないでしょ？

あんたが『倒す！』と息巻いていた魔王だつて、永遠に倒せなくなるんだものね！』

「……魔王」

彼の身体が反応するかのように微かに揺れると、色素の薄い金色の前髪が額の上に、はりりと落ちた。

「そうよ。あんたは英雄の末裔だつて、自分で言つっていたわよね。

つまりあんたの先祖は精靈に選ばれた、特別な人間なの！  
だから代々受け継ぐその使命を果たすため、愛する妹(リア)のために、魔王の元へ一人で赴いたんじゃなかつたの！？

「そう…… そうだった。この俺が…… 精靈に選ばれしこの俺が魔王を倒すことこそ、リアの…… そして我が一族の悲願……！」  
彼は突然覚醒でもしたかのように、カッと目を見開いた。そこへ透かさず畳みかける。

「だったら、あんなザコ魔物相手にちょっとやられたくらいで、落ち込んでなんかいられないじゃない。

そんなことをしている暇があるんだつたら、少しでも鍛練を積みなさい！

このままだと使命を果たせないどころか、あんたを選んだ精靈や尊敬する偉大な英雄、そして愛する妹にまで愛想を尽かされちゃうわよ

「

「……うむ、そうであつた。

このままでは、我が偉大なる先祖、そしてリアに顔向けができるん！…… そうだ、俺はここで立ち止まつている時間などなかつたのだ！

！」

ようやく彼の目に、光が戻ってきたようである。

アレックスはこう見えてわりと、精神的に打たれ弱いほうなのだ。少し挫折感を味わつただけでもこのように、絶望的なまでに打ちのめされる。とはいっても『一晩眠れば嫌なことはアツサリ忘れられる』という特技があるので、時間が経てば自然に回復するらしいのだが。

何故アレックスがこのように打たれ弱いのかという理由は、ディ

ーン曰く「挫折を知らないから」だといつ。

彼は修行で山へ籠もる以外、故郷の村を今まで殆ど出たことがないらしい。それに修行とはいっても、村周辺にいる自分より弱い下位クラスばかりを相手にしてきただけなので、中位クラス以上とは戦つたことがないといつ。

私も故郷を出るまでは、アレックスと似たようなものだった。しかし私の場合、本格的に修行を始めるようになつてからは、師匠である父にいろいろと叩き込まれていた。

アレックスの師匠は上の兄さんらしいのだが、放浪癖があるらしく、一年前に村を出て以来行方が分からぬそうだ。

それにこれもディーン曰く「奴は人を教えるということに全く不向きな男だ。だからアレックスにはあまり、一般常識を教えることがなかつた。もっとも、全てを彼に任せていた俺たちにも責任はあるのだが」ということである。そのようなことをつい先日、フードを外したディーンがいつものように、爽やかな笑顔で話してくれていた。

「ところでエリス

正氣に戻つたらしいアレックスが何故か背けるように、顔を脇下のほうへ逸らしながら話しつけてきた。

「そろそろ退いてはもらえないだろうか

気が付けば私は胸倉を掴んだままで、彼の身体の上に乗つっていたのだ。

「エリスさん、アレックスさんをいきなり殴るなんて、乱暴すぎます

」「なつ……だつてこの場合、仕方がなかつたのよ

呆れたように眉を顰めるエドに対して私は勢いよく立ち上がり、

慌てて反論する。

どうやら彼を説得するのに熱を入れすぎてしまつたようだが、しかし今は些細なことを気にしている余裕はない。

私たちは表通りに向かつて駆け出していた。

先頭にいたのは私だつたのだが、外へ出たと思つた瞬間、少し離れた先にいる二人の後ろ姿が目に飛び込んできた。

「エ、エ、エリスさんが、突然消えました！」

「何つ、また迷子か！？」

目の前で忽然と姿を消した私に驚いているのか、一人がその場で慌てふためいている。

「私なら、ここに居るわよ」

背後から静かに話し掛けると、彼らは幽霊にでも出遭つたかのような表情で更に驚いていた。その辺りに転がっている小石一つ分くらいは、確実に飛び上がつていると思う。

「さつきは前から外へ出て行つたはずです。なのに何故、後ろにいるのですか？ エリスさん、何か術を使つたのですか？」  
「む、そうなのか？ このような非常時に、冗談が過ぎるぞ」「いや、私のせいじゃないから」

（どうか寧ろ、あんただけはそんなことを言われたくないんだけど）

心の中でアレックスに対して文句を言いつつ、改めて表通りのほうへ歩み寄ると、外へ出る一歩手前で立ち止まつた。

「多分、魔物の結界のせいでしょうね」

私はセピア色に変異した空を見上げながら言った。

上では三人 正確には一人と一匹だが が、攻防戦を繰り広

げていた。まだ油断は出来なかつたのだが、今はそれぞれ戦い方を変えているのか、落下物は最初の頃に比べてあまり落ちてはない。

「結界、ですか？」

「そつ。さつきあの魔物の一匹が、この辺りに結界を張つていたのよね。

私の推測では恐らくこの場所と、あの後ろにある横道くらいの範囲だと思うわ。

……一人とも良く見ていて」

私はおもむろに右袖を捲り上げると、表通りへその腕を突き出した。すると入つた肘から先の部分がすっぱりと、切断でもされたかのように消えていたのである。

彼らは予想した通り、再び手を丸くしていた。

「後ろを見て」

私は背後を振り向いた。

後ろにはかなり遠くまで一本道が続いている。エドが先程逃げてきた道だ。

間にはそれを分断するかのように横へ入る脇道も何本があるのでが、一番近くにある脇道に奇妙なものが浮かんでいた。  
人の掌である。

「あ、あれは……人の手！？」

「そうよ、正確には私の腕だけね」

それは私の消えた部分だつた。精霊石の嵌め込まれたブレスレットが手首で揺れているのが、真正面からでも見える。

「どうやらこの場所と後ろの横道辺りまでの空間が、魔物の術によ

つて閉じられているような。

それにこの通りは、後ろのあの部分に繋がっているわ。だから外へ出たとしても、またここに戻ってきてしまうというわけよ

「人はきょとんとした顔をしているが、私は更に続けた。

「簡単に言えば、一定範囲内の空間が大きな硝子張りの箱の中みたいになつていて、出入り口には鍵が掛けられている状態なの。私たちは中へ閉じ込められているから、その鍵 つまり魔物の術を壊さない限りは、ここから出られないっていうわけ」

「あ！ 話には聞いたことがあります～。それが魔物の結界というわけですね～」

エドはようやく理解したようである。

空間を捻れさせる術は、中位クラス以上なら大抵使えるらしい。人間では人数と時間も掛かるのだが、魔物では先程のボブでも分かる通り独りで、しかも短時間で出来るのである。つまりヒトと魔族の術力の差が、それだけ大きいということである。

「要するに魔物の術の影響で、俺たちはこれ以上先へは進めない、ということなのか？」

どうやらアレックスも珍しく、すんなりと理解したようである。

「それにしてもエリスさん～よくこの空間が結界だつて～分かりましたね～。もしかして閉じ込められたことでも～あるのですか～？」  
「ううん、ないけど。話には聞いていたから」

「僕もお師匠様から～話にだけは聞いたことがあつたんですけど～実際に体験したことがなかつたので～直ぐにはピンと来ませんでした～。その冷静な判断力、流石です～」

エドは例によって、顔をキラキラと輝かせている。

実のところ私にも、魔物の結界術がどういったものなのかなは、あ

まり理解していなかつた。話に聞いていた状況と一致しているようだつたので、「もしかしたら…」と考えたのだが、私も実際に体験したことことがなく、半信半疑だつたのだ。

本当のことを言えば、最初に結界を通りて一人の後ろ姿を見た時点で、腰が抜けるくらいには吃驚していたのである。しかし彼らの慌てている姿を目にした途端、逆にそれが一気に萎えてしまつたのだ。

「何事にも動じない、強い心と冷静な判断力、同じ巡礼者として僕もエリスさんを見習わないといけませんね」  
エドはまだ顔を輝かせてこちらを見詰めてきていた。

## 第19話 破壊

上を見上げれば、相変わらず風と闇が交差していた。

彼らが場所を移動しないのは、この空間がかなり狭いから移動できなのだとと思つ。ということは、この術を掛けたボブの力量がその程度、といふことになつてくる。

「私もあるルティナっていうモンクを、手伝つことができればいいのだけれど」

私は歯痒い気持ちを抱きながら、ぽつりと呟いた。

一対一で戦つているのだ。ルティナがどのくらいの強さなのかは分からぬが、数ではこちらが不利だった。

「でも僕たちが出て行つても、ルティナさんの足手まといこゝなるだけですよ～」

「まあ、そうなんだけどね

特に私など、紋様のせいで攻撃術が使えないし。

外界との境目であるこの場所は、先程まで私たちが居た所よりは比較的安全のようだつた。先程は戦闘の真下だつたので落下物も頻繁に落ちてきつたが、ここは少し離れているため、殆ど落ちては来ない。

それに上の様子も見ることができる。私たちはこの場所で彼らの戦闘を、ただ見守ることしかできないのだ。

「では僕たちはその間に、この結界を破れる方法でも、探ししまじょうか～？」

Hドがそのようなことを提案してきたが、私にとっては予想外なことだったので驚いていた。

「え、そんなこと可能なの？」

普通こういうのって、術を掛けた張本人を倒さない限りは破れない  
つていうのが、セオリーでしょ」

「でも他に方法があるかもしないですしね。ここでじつとしてい  
ても、無駄に時間が過ぎていくだけです。僕たちにだつてくれ  
ることがあるはずですよー」

いつものように陽気な音楽を鳴らしながら、エドはそのようなこ  
とを軽く言つてきた。

だが彼の言うとおりもある。ただ見ているだけの私たちだが、  
もしかしたら今できることがあるのかもしれない。

私が思い直して周囲の壁や地面などを調べていると、大通りを見  
詰めながら顎に手を置き、真剣な表情で何かを思案している様子の  
アレックスの姿が目に入った。

「アレックスもひょっとして、この結界を破る方法でも考えている  
の？」

「うむ……」こちらからは向こう側が見えているというのに、何故こ  
こを通った物が遠く離れた後方へ移動できるのか、そのカラクリを  
解いている最中なのだ

（この男……さつきは理解しているようなことを言つておきながら、  
本当は全く理解できていなかつたというわけなのね）

私が半眼で見詰めていることに全く気付いていない彼は、何を思  
つたのかおもむろに大通りのほうへ歩き出した。自分でも実際に体  
験して、確かめてみようともいうのだろうか。

彼の身体がそこへ入りかけた時、バチッという何かの弾けるよう  
な音が聞こえてきた。同時に、身体上には水の紋様も浮かび上が  
つた。

まるで硝子の砕け散るような鋭い音が聞こえてくる。

静寂だった周辺からは津波の如く、一気に喧騒が押し寄せてきた。目の眩むような日映い陽の光と、行き交う人々。先程までの見慣れた光景だった。

「待て……」

頭上で怒鳴り声が聞こえてきた。見上げると建物の屋上を伝つて逃げていく、一匹の後ろ姿が見える。

恐らく結界が解かれたために、逃げ出したのだろう。この町は現在近衛兵により、厳重に警備されている。少しでも騒ぎが起きれば、直ぐに常駐している騎士たちが駆け付けて来るはずだ。昨日もルティナが去った直後、数名の騎士たちが現れていた。

だから彼らはここに結界を張ったのだ。

魔物が結界を使って戦うのは、戦闘の邪魔をされたくない故に外部の者を遮断するためとか、中は術士のテリトリー内だから有利に戦えるなど、それらの理由が一般的だと言われている。特にこのようないい街中では余計な騒ぎは避けたいはずだ。

結界は術士が創り出す異空間である。先程私たちが居た空間も建物や風景がこちら側と同じように見えてはいたが、別空間だった。その証拠に崩れているはずのそれらの残骸が、こちら側では全くの無傷だ。

「ちつ、逃げられたか」

舌打ちとともに、ルティナが壁を伝つて上から降りてきた。

「……まあいい。どうせ奴ら、またあんたたちを襲いに来るだろ？」

「て、ソレちつとも良くないじゃない！」

私は即座に抗議の声を上げていた。

## 第20話 3人への依頼

「あたしはルティナ。ルティナ・マーキス。職業は魔物ハンターだ」  
彼女はそう名乗った。魔物ハンターは魔物専門の賞金稼ぎである。

「あ、それで昨日は、あんなに派手に魔物を、退治していたのですね？」

エドは納得といった表情で両手をぽんと叩いていたが、私は眉を顰めた。

「だからって、あんな風に退治しなくてもあなたが魔物ハンターなら、もっと簡単でスマートな方法があつたはずでしょ。いきなりだつたから私、凄くビックリしちゃつたんだけど」

「アイツがあたしの顔を見た途端に逃げ出したから、そのまま追いかけたまでさ。

魔物<sup>ヤツ</sup>らの間ではあたしは有名人らしいからね、腰抜けのお嬢ちゃん

愛想もなく言つた最後の言葉は、私への皮肉だろ？か、やつぱり。ということは昨日彼女の目の前で、座り込んでいたのが私だと憶えていたのか。

「それじゃあ、あんたたち……ええと……」

「私はエリス。エリス・フルーラよ」

「僕はエドワード・ライアンです。そして隣にいるこの方は、アレックス・ヴォングさんと言います」

私たちは口々に自己紹介をした。ただアレックスだけは眉間に皺を寄せて腕を組み、未だに何かを考え込んでいる様子ではあるが。

「ああそつ。じゃあ、あたしについてきな

「…………は？ なんで？？」

ルティナは「ぐく自然な流れでそう言つてきた。だから反射的について行きそうになつたのだが、私は寸前で何とか踏みとどまつた。何故会つたばかりの身も知らない彼女に、私たちがついて行かなければならないのだろうか。それに「知らない人にはついて行くな」という言葉は、物心が付く前から言い聞かされている一般常識でもある。

「なんであつて……あんたたち、狙われているんだろ？　あたしが守つてやる」

「は……え、えええええー？？？」

私は吃驚して思わず大きな声を上げてしまった。

確かに先程助けてくれたことには感謝しているし、ありがたいとも思う。

しかし初対面の私たちに対していきなり「守つてやる」など……そんなことを軽く言つてくるだなんて、普通だつたら警戒するに決まつていい。

私が無言で疑いの眼差しを向けると、それに気付いた彼女はおもむろに眉を顰めた。そして苛ついたような表情に変わると、少しきセのある鎧色短髪を無造作に左手で搔き回す。

「つたぐ、分かつたよ。正直に言おう。理由は三つだ」

私の言いたいことを察したのか、ルティナはさう言つながら左指を三本突き立てた。

「まず一つ目は、あんたの持つているソレ、返して貰おうか」

「へ？　……あ、ああ、コレね」

言われた私は、自分が小脇に抱え込んでいる物に視線を落とした。それは最初にルティナから預かっていた、饅頭の入った箱である。

「まさかまだ預かってくれていたとはな。普通あの状況だったら、途中で捨てているぞ」

「そりやいきなり渡された物とはいえ、一応他人の物だし。勝手に捨てるわけにもいかないでしょ」

有無を言わせず人に頼んでおきながら、そんな言い方をするなんて。

私は明らかにムツとして、箱をルティナに突っ返した。本当は捨ててしまおうかとも思ったのだが、結局ずっと持っていたのだ。

「ああ、それはすまなかつた。これは謝礼だ」

ルティナは直ぐに謝ると、私の手の平へ饅頭を三つ乗せてきた。彼女が予想外の行動をしたので、私は呆然とそれを見詰める。

ルティナつて、もしかして。

実はわりと『良い人』だつたりするのだろうか。外見だけで判断するならば愛想の欠片もなく、一見恐そうな印象ではあるのだが。

「そして二つ目は、あの魔物たちだ。彼奴らはギルドでも指名手配されている」

「え、そうだったの？」

指名手配をされている魔物だといふのであれば、それを専門職にしている彼女がこの機を逃すはずはないだろう。

しかし疑問なのは、何故そのような魔物が私たちを狙っているのか、ということだ。

最初はこの前遭った、上位クラスの魔物「サラ」に命令されたのかとも思った。しかしあの時は彼女に『わざと見逃された』のである。

どうやら私たちは彼女にとつて、必要なモノらしいのだ。といつても正確には『アレックスだけが』であるが。

そして恐らくであるが彼女には、まだ私とエドのことがバレてはいないと思ひ。でなければ能力のあるアレックスにまで、危害を加えてくるはずがないからだ。

「最後の二つ目。ここにはあたしから、あんたたちへの依頼だ」

「依頼？」

「そうだ。あんたたちにやつてもらいたいことがある」

「僕たちですか？ ルティナさんにも頼まれるような、難しいことは出来ないとも思いますけど……」

「なに、実に簡単なことだよ」

首を傾げたエドに向かってニヤリと笑いかけた彼女は、事も無げに言葉を続けた。

「モンスター・ミストを破壊してほしい」

第21話 取引1（前書き）

第2章 追跡者1（ルティナ編）

## 第21話 取引1

それは近隣町で聞いた噂が発端だった。

『魔物が集まり始めた。討伐隊が近々編制されるらしい』

それがギルドを中心に流れていたのだ。

魔物ハンターであるあたしは当然の如く、その現場であるアクー  
力村へ向かっていた。

だが途中で不意を突かれ、魔物に襲われてしまつ。

そして魔物の口からその名を聞くことにならつてしまふ、思つてもみ  
なかつたのだ。

「貴様の目的 ゼリューを殺したいのだらう?」

襲つてきた魔物の女はあたしの顎を持ち上げると、耳元で二つ囁  
いてきた。

それを聞いた瞬間、沸騰するのかと思ひながら全身の血液がざ  
わめき立つ。

ゼリュー。

あたしが長年追い求めている魔物だ。

そしてヤツだけはあたしの手で、どうしても葬らねばならない。

それが魔物ハンターという職業を選んだ理由でもあった。

「貴様、一体何者だ？」

あたしは目の前にいる、真紅の瞳を持つ魔物の女を睨み付けた。

真紅　。

そう、ヤツの眼も真紅だつた。

それによく見ればこの魔物、顔立ちがヤツに似ているではないか。  
「ヤツとはどういう関係だ」

そう問い合わせると目の前の魔物　先程サラと名乗っていたが  
は、可笑しそうにクスクスと喉の奥で笑いながら、あたしから身  
体を離して立ち上がつた。

「ゼリューは妾わらわの兄だ」

魔族とヒトでは種族系統は違つが、生態系や容姿などは殆どの者が類似している。だからヤツに肉親が存在していたとしても、何ら不思議ではない。

「モンスター・ミストがこの辺に現れたのは、知つてゐるな？」  
あたしがアクト二力村へ向かっているのは、魔物が集まっているという情報だけが理由ではなかつた。

モンスター・ミスト。

これもあたしの目的だつた。

「それを破壊する方法が見つかつたとしたら、貴様はどうする？」

「な……んだと…？」

その言葉に、あたしは驚愕した。

未だかつて、その内部に入れた者はいないと聞く。それは魔物であつても、例外ではない。

ヤツのことは術士修行時代から追いかけていたが、足取りを掴むことができなかつた。そしてこの場合一番に考えられることは、自分で創つた『セカイ結界』の中へ雲隠れしているのではないか、ということだ。

ヤツは上位クラスの魔物だ。その可能性が一番高い。

大抵結界というものは、発動した術士の認証を得なければ、外部からは入れないようになつていて。

それにあたしたちの目に見えていなければ、地上の何処かには必ず存在しているものだ。即ち、現実空間と少しづれた場所に、それが存在しているだけだと思えばいいだろう。

しかし、ただ存在しているだけではない。術士が周辺一帯を模し、意図的に創り出している空間なのだ。

だが模造できるのは精々、建造物や木々などの植物くらいで、食物や水、着衣などのようなものを創り出すことは不可能だった。だから例えヤツがこの中へ雲隠れしていたとしても、永久に閉じ籠もついているはずがない。何故ならヤツもヒトと同じように、食事などといった生理的欲求を持つていてるからだ。

もし外部との関係を完全に断ち切るとしたら 伝説で例える  
ならばヒトや魔物、双方に当てはまらない存在 『精霊』くらい  
のものだろう。

『結界』とは、そのような場所だ。

あたしは長年ヤツについての情報を集めていたが、最終的に辿り着いたのが『モンスター・ミスト』の存在だった。

ソレが世界各地に最初に現れ出したのは、およそ十一年前。ヤツの消息が途絶えた時期と、ピッタリ一致している。

だからヤツがそこにいるのではないかと睨んで追いかけ続けてい るのだが、出入りしている痕跡を未だに発見することができなかつ た。

そのため他の可能性も模索している最中ではあつたが、モンスター・ミストがそこへ現れたと聞けば、他に手掛かりが掴めない以上 は追うしかない。

サラと名乗った魔物に奇襲をかけられたのは、そんな時だった。

「その方法が見つかっただからといって、それがあたしと何の関係がある」

あたしは表面上の冷静さを保ちながら、奴へ静かに問い返した。

「貴様は既に承知なのだろう?

人間どもがモンスター・ミストと呼ぶアレの中に、貴様の殺すべき相手がいることを

「……！」

その言葉に絶句したあたしは、変わらず薄笑いを浮かべたままの奴の顔をしばらく凝視してしまった。

「ならば……あの中にヤツが居るとでも言つのか？」

「無論だ。でなければ妾が貴様を生かし、このような情報を『』える理由がない」

自信ありげに断言したその言葉から、あたしの中の推測が確信へと変化していくを感じていた。

「妾が貴様にその情報を提供する。そして貴様はゼリューを殺す。だが断るといふのであれば、妾が貴様をこの場で殺す。これが取引だ」

「これは一方的な要求だ。無論、取引と呼べるようなものではない。しかしその時のあたしには、そのようなことを気にしている余裕がなかつた。

やはりあの中にはヤツが居る！

泉へ投石される波紋の如く「確信」の広がり始めていたあたしには、同様に高揚していく気持ちのほうが大きかつた。

だがあたしは冷静さを崩すことなく、保ち続けていた。

「あたしにヤツを殺せせる目的は何だ。ヤツは貴様の兄なのだろう？」

「妾たち魔族には、目先の近しい血縁者など意味を為さぬ。重要なのはその先にある、一族繁栄のみ。

ゼリューは我らにとつて、その障害となる邪魔な存在なのだ。

我らが繁栄するためには、奴を確実に消さねばならぬ。ただそれだけこと」

あたしの問いに淡々と答えていたサラからは、何の感情も見られ

ない。そこがやはりヒトとは違つ。

魔族の中にもヒトと同じよう、様々な種族がいる。

奴らにとって何よりも大事なことは、自分の一族が子々孫々まで繁栄することだ。

無論それはヒトでも同じ事であるが、ヒトよりも遙かにその気持ちが強い。

何故なら奴らの世界では、弱者は強者に絶対服従。奴らにとってのソレは、適者生存のための習性といつても過言ではないからだ。

「どうやら姉様がすきたようだな。そろそろ貴様の答えを聞かせてもらおうか。

妾の取引に応じるか。それともこの場での死か」

奴の有無を言わせぬ問い合わせが、あたしに直接向けられていた。

## 第23話 パーティ戦闘

あたしは左眼に違和感を抱くと、眼帯の上から手で押さえ付けた。瞳の中を小さな虫が、無数に這いずり回っているような不快感。いつもの感覚だった。

すると田の前の木陰から現れたのは、一体のゴブリン。先程から戦っているのは、殆どこの種類だ。

いくらこの辺りが奴らの縄張りだとはいえ、前に来たときよりも数が多くなる。やはり、モンスター・リストの影響が現れているせいなのだろう。

サラに遭遇してから一日が過ぎていた。

奴に精神攻撃を受けてから徐々に体力は回復しているが、それでもいつもより移動速度は落ちている。通常であれば、既にアクニカ村へ到着していても良いはずだった。

あたしはいつものように其奴らを軽く片付けると、視界を遮つている乱れた前髪を搔き上げた。同時に左眼を覆つ正在の眼帯にも、そつと手を触れてみる。

いつもの違和感は消えている。

「眼はいつも通り、か」

あたしの左眼には、特殊能力があつた。  
魔物の気配を感知できるのだ。

これは世間から「呪われたモノ」と呼ばれる、半端な存在のあたしにしか備わっていないものだ。

しかしサラと遭遇した時には、まるでゾンビが現れた時のように何も感知できなかつた。

だが奴は、ゾンビやスケルトン・キラーのような傀儡などではない。もしさらであるのなら、双眸の瞳に光を感じることがないはずだ。

あれは完全に気配を殺していた。

がしかし、果たしてそのようなことが可能なのだろうか。

あたしは奴の気配を探つっていたのだが、特殊能力のある左眼でさえも感知できなかつた。上位クラスの魔物は数が少なく、遭遇すること自体稀な種族ではあるが、例え奴らといえども命ある限り、「生氣」を完全に消すことは有り得ない。

自分の能力異常かとも思ったのだが、左眼も通常通り感知しているから、原因はそれではないだろう。

「レーゲ・ファイ・シオン  
雨激天圧！」

「アード・ヴァン・デスト  
雷風烈破！」

近くでは術文を唱える声と、地響きなどが聞こえてきた。何処かのパーティが戦つているらしい。

その者たちが戦つているということは、この付近にいる魔物もその場所に集まっているはずだ。つまりあたしがこのまま素通りしても、何の問題もないということになる。

討伐隊などといった特殊な状況を除けば、部外者が戦闘中の他パーティに途中参戦することは殆どない。

個々のパーティには、きちんとした連携ルールがあるのだ。危機的状況に陥っているのならともかく、途中で乱入すれば、それを崩してしまうことになりかねない。

そんなわけであたしはいつもの通り、この場を立ち去ろうと思つたのだが、途中で何気なくそちらのほうへ振り向いていた。

数匹のゴブリン相手に戦っていたのは、四人のパーティだった。格好から判断すると、剣士一人に精霊術士二人、そして楽器らしきものを振り回しながら敵に追いかけられている芸術士が一人だ。

「……ん？」

（剣士、精霊術士、芸術士？）

あたしはこの組み合わせに引っ掛かりを覚え、立ち止まつた。

『　その者たちは剣士の男、精霊術士の女に竪琴を弾いていた……芸術士の男、だつたか』

昨日サラから告げられた、三人の特徴を思い出していた。

更に奴は「剣士の男は妾から見ても大層、眉目秀麗であるぞ。貴様の美的感覚が妾と近似しているといつのであれば、直ぐにでも分かるだろう」とも言つていた。

そのことを思い出したあたしは木陰から口を細め、剣士の顔を改めて凝視した。

「.....」

何だあの、異様にキラキラした顔は。

輝いて見えるのは恐らく、飛び散る汗が陽に照らされてそう見えているだけかもしぬなかつたが、遠目から見ても明らかに目立つ顔立ちだつた。

が、しかし。

このパーティは四人だ。

もう一人、不気味な雰囲気を身に纏つている精霊術士がいた。フードを目深に被つており、見ただけでは性別を判断できないが、その背格好から男だと認識した。

四人パーティということは、サラの言つていた特徴と若干の違いがある。もしかしたら奴の話していたのは、此奴らではないのかかもしれない。

(に、しても)

このパーティは一目見ただけでも、あまりバランスの取れているほうではなかつた。

剣士の男は武器の持ち方、構え方も完璧だし、敵の繰り出す攻撃にも怯まず対応している。

一見すれば、ある程度の手練れにも見えるが、しかし全体的に無駄な動きのほうが多い。これでは直ぐに体力が尽きてしまつだろう。

精霊術士の男は、複数の属性を上手く組み合わせながら戦っていた。

こちらは全くといつていいほど無駄がなく、各属性の術を上手く組み合わせ、的確に使用している。加えて他の仲間のフォローにも回つており、この中では一番場慣れしているようだ。そして恐らく一番強い。

もう一人の精霊術士の女　　というより、まだ少女に見えるがは、一応考えながら戦っているように見える。

しかし動きのほうは、まだかなりぎこちなかつた。術の威力も中程度だ。

それらのことから判断すると、どうやら巡礼者のようなあるから、能力が伸びるのはまだこれからといったところか。

芸術士のほうは逃げてばかりいて、援護支援があまり上手くいつていらない様子だ。

楽器を持っていることから考えると吟遊詩人のようだが、まだ上手く仲間のサポートが出来ていないのだらう。こちらも巡礼者のようだ。

総合的に見るならば、まだ発展途上中のパーティといったところかもしれない。ベテランの前衛をあと一人くらい追加すれば、多少のバランスは取れそうな気もするが。

と、ここで、こちらに背を向けて一息吐いていた剣士が、突然振り向いた。

「アレックスさん、どうがされましたか？」

「　　む、いや……」

「ちょっと、あんたたち。突っ立つてないで、こっちも手伝つてよ  
ね！」

剣士はこひらを気にするような素振りで顔を向けながらも、前を歩いていた少女に促されるままに立ち去つていった。

まさかとは思うが、自分たちを見詰める視線に気付いたのだろうか。側には感覚の鋭い芸術士も居たから、あたしは慎重に気配を消していたつもりだったのだが。

あたしは彼らが木々の向こうへ消えていくのを、この場で見送つていた。

この森を抜けた直ぐ先にアクニカ村がある。  
あたしもそろそろ、出発しなければならない。

## 第24話 怒りのままに

あたしは予定より少し遅れていたが、アクニカ村へは無事に辿り着いていた。

が、あたしの機嫌は頗る悪かつた。  
すいぶん

「……つくしょう、あンのクソガキッ！！  
今度見つけたら絶対、ブツ殺す！！！」

あたしの放つ殺氣に触れまいとするかのように、周囲を行き交う人々が遠巻きに避けながら通り過ぎていく。  
いつもならこれほど簡単に撒き散らしたりはしないのだが、それも無理からぬことだつた。

財布を掏<sup>す</sup>られたのだ。

犯人は混雑中のどさくさに紛れて派手にぶつかってきた、さつきのクソガキ！

いつもなら気付いた時点で捕まえていたところだ。

しかしその時があたしは、この前食べ損ねたアクニカ村名物の『ソフトアイス』を、一本同時に抱え込んでいたために反応が遅れてしまつた。

その上ぶつかつた衝撃で両方とも、地面に落としてしまつたのだ！

兎にも角にも、このあたしの懐から財布を盗むだなんて、かなり良い度胸をしていやがる。

今度見つけたら両手足に、岩男（ロック・マン）を括り付けて巻きにし、何十もの鍵を掛けた保管箱に閉じ込めて、海底の奥底へと必ず沈めてやる！！！

あたしがそう息巻いていると、左眼が急に疼いてきた。  
どうやらこの近くに魔物がいるらしい。

が、特に珍しいことではない。このような街中の人混みであつても、大抵何匹かは魔物が紛れ込んでいるからだ。

しかし全てを狩るのは大変な労力だ。だからあたしはいつも、賞金首以外の魔物には目を瞑つてきた。

それにあたしの能力では、大勢の中から一つだけを特定することができない。つまり人がこのように大勢いた場合、その中のどの人間が魔物であるのかそこまでは判別できないのだ。

あたしは辺りに素早く視線を配つていた。

側を通り過ぎようとしていた一人と不意に目が合うと、相手のほうがあからさまに、ビクリと身体を震わせていた。いくらか顔色も青ざめて見えるようだ。

直感の働いたあたしはその人物から視線を逸らさずに、真っ直ぐ近付いていく。

恐らくあたしの形相は、伝説として語り継がれている魔王のようにな陥しかつただろう。自分でも自覚はしている。

当然男は逃げる。あたしもそのまま追いかける。

互いの距離を保つたまま。そして眼の違和感も消えてはいない。人混みを掻き分けながら、あたしはその男をしつこく追い続けていた。

「あんた、何故俺を追いかけてくる…？」

とうとう我慢の限界にきたのだろう。男は後ろを振り返ると、逃げながらこちらへ怒鳴ってきた。

「貴様が逃げるからだ。それに貴様の正体、全てお見通しなんだよ！」

「やはりそうか！ その隻眼は……お前があの『キラー・アイ』！」

「！」

あたしの通り名を知りながら逃げている、この男。  
間違いない。魔物だ。

しかしさか、あたしが試しにけよつとカマを掛けでみただけで、  
簡単に引っ掛けってこようとは。

この分かりやすい反応は恐らく、賞金首に掛けられるほどの大物  
ではないからだろう。一般的な中位クラスだ。

奴が大通りへ出た辺りでようやく捕まると、予め術の施された  
手刀を首の付け根付近へ、問答無用でぶち込んだ。瞬間、かなり驚  
いた顔付きをしていたようだった。

奴にしてみれば賞金首でもない自分が、まさかこのような公道の  
ド真ん中で攻撃をされるとは、露ほどにも思つていなかつたに違  
ない。

騒ぎを大きくすれば、先程見かけた数名の騎士たちが直ぐに飛ん  
で来て、あたしの手柄が横取りされる。

それに魔物にしてみても、あまり目立つた行動は避けたいはず。  
何故なら奴が何の目的もなしで、人間に変化するとは思えないから  
だ。

中位クラス以上はプライドが高く、日頃から嫌悪感を抱く人間に、  
自ら進んで擬態する者など殆どいない。大抵の魔物は自分より能力  
の強い者の命に従つて、人間に化けているにすぎない。恐らくは奴  
も同じだろう。

だから奴は人混みの中、こちらに攻撃を仕掛けではこなかつたの

だ。

それなのに何故あたし自らが、そのような暴挙に出たかといえば、  
答えはただ一つである。

当然、財布を掏られたせいだ。

このままではどうにも、腹の虫が治まりきれなかつた。というわけ  
で代わりに、たまたま目の前に居合わせたこの魔物を、ぶつた切  
ることにした。

しかしこのままではやはり、駆け付けて来る騎士たちに手柄を横  
取りされ、賞金も手に入らなくなる。

賞金首ではないから金額的には高が知れているし、財布も全てを  
掏られたわけではなかつたが、ここまで派手に立ち回つてしまつた  
手前、途中で横取りされるのは癪に障る。あたしの魔物ハンターと  
してのプライドも許されない。

要は騎士たちが来る前に、この場をすらかればいいだけのことだ。  
そのために急いで遺体の回収に向かつた。

あたしが地面に転がっている頭部を持ち上げた時、その前には呆  
然と座り込んでいる少女の姿があつた。

焦点の定まらない大きな翠瞳が、あたしの持つ頭部をじっと見詰  
めている。まるでソレに魅了されてでもいるかのようだ。

(あれ？ ロイツ)

肩まである真っ直ぐな、金に近い栗色髪の少女。その顔には見覚  
えがあつた。今朝、道中で見かけた精靈術士だ。

あの時には生氣に満ちあふれていたが、今は土氣色の顔で小刻み  
に震えている。

「まさかこのような場所にて魔物が紛れていたなんて、思わなかつ

たです」

側にいた少し太めの吟遊詩人がそれとは対照的に、朗らかな歌声で唄つていた。

「魔物……」

小さな咳き声が聞こえたあたしは、彼女の顔を肩越しから覗き見る。

すると、先程よりは幾らか顔色が良くなっているような気がした。頬には赤みが戻り、強張つていた表情も徐々に緩みつつあるようだ。

あたしはここで、嘗て一緒に仕事をしたことのあるハンター仲間のことを、ふと思い出していた。

他の職種でも同じだとは思うが、あたしたち魔物ハンターも目標が強敵の場合には即席でパーティを組み、同業者と協力して首を取りに行くことがある。

過去何度も一緒に仕事をしたことがあり、精霊術士だったが、あたしから見てもかなり腕の立つ男だった。

ある欠点を除いては。

何故そんな彼の顔をここで思い出したのかといえば、似ていたからだ。

遺体を見詰めた時の瞳。表情。

後からその事実を知った時の、憑き物でも落ちたような様子。

巡礼者とはいえ、彼女も精霊術士だ。少なくとも戦闘経験があり、死体にも見慣れているはず。

遺体を前にしたからといって、動搖するはずがない。現に今朝は普通に戦つっていた。

なのに先程のあの様子。

もしかしたら………といつ思いが胸を過ぎていたが、しかし通りすがりであるあたしには関係のないことだった。

寧ろ今は、最優先でやるべきことがある。

恐らくこの騒ぎを聞き付けた騎士たちが、直ぐにでも駆け付けて来るだろ？

あたしは残った胴体を急いで担ぐと、自然と出来た道を通り、彼らが到着する前にこの場を立ち去ることに成功したのだ。

## 第25話 遭遇1

この村はモンスター・ミストの影響でじばらぐの間、外部との流通を遮断するという。

そのことはあたしも事前に予想済みだった。ヤツがここにいると、いつことは、その規模も大規模なものだと容易に予測できた。

じちらに残された時間は、あまりない。いつモンスター・ミストが姿を消すのか分からなかっただ。

そうなつてしまつたら、今度は何処に現れるのか予測できない。そしてそこに必ずヤツが居るとも限らない。

その間、例の三人組パーティを捜すこととした。この村に必ず居るはずだと、サラが言つてきたのだ。

あたしは先程買った『温泉まんじゅう』の箱を小脇に抱えつつ、温泉街を彷徨いていた。

何故温泉まんじゅうを買ったかといえば、『温泉＝（イ）ホール（まんじゅう）』に決まつてゐるからだ。

温泉に来れば必ず饅頭を買うのが、世間一般での定番であり鉄則だ。でなければここに来る意味がないといつても過言ではない。

あたしがその場所を通り過ぎようとしていた時、

「貴様らには消えてもらう！」

その声とともに、金属の触れ合つ音が聞こえてきた。あたしは反射的に建物の陰から、その路地を覗く。

「ヴァン・マオ・デコウ フード・ヴァン・デスト  
神風護壁！ 雷風烈破！」

術文を叫んでいるのは、昨日地べたで震えていた精霊術士の少女

だ。

しかし攻撃術のほうは、相手に届いていないようだった。あたしが一目見ただけでも出た瞬間に、その威力が皆無だったのが分かる。（やはりそうか）

昨日彼女に感じた『勘』は、どうやら当たっていたようだ。  
だからといって、他人であるあたしにはどうすることもできない。

ただ一つ言えることは、今の状況では確實に彼女たちのほうが殺されるということだった。

シールドで防いではいたが、明らかに押されている。別の奴と戦っている剣士も防戦一方で、共に劣勢なのが一発で分かつた。それによより、相手の黒装束たちのほうが戦い慣れしており、能力にも差がありすぎだ。

「さて、どうするか」

あたしはその光景を眺め、独り言を呟きながら饅頭を口に運んでいた。

が、考える間もなく手が先に出ていた。黒装束の背後に向けて、思わず饅頭を投げ付けてしまったのだ。

目の前で弱者が一方的にいたぶり殺されるのを見るのは、あまり寝覚めの良いものではない。

だから何となく、邪魔をしたくなつたという気持ちもあった。

「貴様は、キラー・アイ……名はルティナと言つたか  
この黒装束は通り名だけでなく、あたしのファーストネームまで  
知つていた。どうやら只者ではなさそうだ。

あたしが前に進んで奴らに近付いた時、左眼にはいつも不快感  
が襲ってきた。先程は距離があつたため、魔物の気配を感じできなかつたようだ。

精霊術士と吟遊詩人は昨日あたしの近くに居たが、感知してはない。  
それに仲間である剣士の可能性も低い。

そう考えれば自ずと魔物は、黒装束の奴らだと断定できる。  
ならばこちらの専売特許だ。

奴らはあたしが気付いたと思ったのか、あつさりとその正体を現  
していた。そしておもむろに腕を上げ、フィールド結界を創り出す。

あたしは精霊石の埋め込んである両手袋グローブに術を掛け、近くの壁に  
穴を開けた。同様に上にも窪みを作り、それを足場にして屋上へと  
登つていった。あの狭い通路内で挟み撃ちにされたら厄介だ。

広い空間に出たあたしは、素直に追いかけて来た奴らの洗礼を早  
速受けた。

奴らの放つ複数の黒い刃がこちらへ向かってくる。

あたしは能力を纏つた拳で、正面から叩いて横へ薙いだ。それら  
は勢いをつけたまま地上へ落下していったようだが、まあ、あたし  
の知つたことではない。

その間にも奴らは、次々と攻撃を繰り出してくる。

前からはナイフの攻撃。それを躱せば背後からの術攻撃。

勿論あたしもその度に反撃をしているが、相手もなかなか隙を見せない。何より、奴らのコンビネーションプレイは完璧だった。

(面倒だな)

あたしは一匹同時に倒す方法を模索し始めていた。  
このままではこちらの分が悪すぎる。ここは一旦、体勢を立て直した方が良さそうだ。

「ヴァイン・ダブル・ボウ  
風雷破拳！」

新たに雷撃の附加した両拳を、それぞれの方向へ飛ばした。  
一匹には直前で躊躇されたが、その隙にあたしは奴らより十分な間合いをとる。

「貴様らは確か、ランドラブトルだつたな」

ここであたしはおもむろに、奴らへ話し掛けた。

ランドラブトル。

指名手配書によれば、危険ランクDの魔物。

五段階ランク中の『D』だから、度数はそれほど高くはないのだが、指名手配の魔物であることに変わりはない。

しかしこの『ランドラブトル』という種族、主に生息しているのは海を渡った先にある、サラマタル大陸。

取り分けその大半を支配している、セルフィール帝国周辺のはずだ。つまりこのアズテラス大陸では、殆ど見かけない魔物だった。

「ほう、我らを知っているのか

「当たり前だ。あたしも伊達に長いこと、この仕事をやっているわけではないからな」

などとハッタリで返答していたが、単に数週間前までセルフィール帝国へ滞在していたから、たまたま知っていたにすぎない。

指名手配書というのは魔物の場合、生息地域限定でギルドに提示される仕組みになっている。だからこの大陸を拠点にしていては、ここには馴染みがなく、海を渡らなければ知ることのない種族だった。

「それが何故、あいつらを襲う。誰の命令だ？」

「貴様の知るところではない」

(やはり簡単には口を割らないか)

だがその上の魔物 力の強いモノの命令で動いていることは、間違いないだろう。魔物自らの意思で生息地域を移動するというのは、滅多になうことだからだ。

「しかし倒すのは貴様が先だ。なあ、ボブ」

「そうだ、レグ。あいつらならここに居る限り、いつでも殺れるからな」

(……そういうことか)

結界を創つたのは勿論、外部との切断目的もあるに違いない。が、恐らくあの三人をここへ閉じ込めておくのも、理由の一つなのだろう。

「キラー・アイ。貴様の噂は、俺たちの耳にも入つている」「へえ、サラマタル大陸にまであたしの名が知れ渡つててはね。でもサインはやらないよ」  
「確か貴様の胆きもを撲取すれば、至上最強になれるという話だつたな」  
あたしの気の利いた冗談をあつさりと無視したレグが、下卑た笑みを浮かべながら言った。

その噂がこの大陸にいる中位クラス連中の間で流れていることは、あたしも知っていた。

過去、それに絡んで戦いを挑んできたものも数多くいたが、その都度撃退していたのだ。

「それはあくまでも噂だろ？　あたしはこの通りピンピンしているし、胆も取られたことはないよ」

「だが、そうだ……貴様にはこんな噂もあつたな。知つていいか？」

ボブ

「レグ、もしかしてアレのことか？」

ボブと呼ばれた魔物は、ちらりとあたしのほうを見ながら答えた。  
「キラー・アイが極めて特殊な、『半魔半人』の身体を持つという、アノ話」

あたしのこめかみが反射的に、ピクリと反応してしまった。が、奴らの様子に変化はない。どうやら氣付かれてはいなによつだ。

「そうだ。

通常の『半魔半人』は『母体』が我ら魔族でなければ、この世に生まれ出でることができないと言われている。

ヒトの身では器である母胎が、その精靈力に耐えきれないからな。しかしキラー・アイはその逆で、『母体』が人間。

しかもその胎内を破壊せず、死産にさえならずに生まれ出でたという

「それもただの噂だ。事実とは限らない」

「確かに。我ら魔族の血を受け継ぐ者が人間の胎内から生まれ、何十年も生き長らえているなど、今まで聞いたことのない非常識な話だ」

(……こいつら、喋りすぎだ)

あたしはお喋りな奴は嫌いだった。胃がムカつくほどに。だが奴はこちらの反応を楽しむかのように、まだ喋り続けている。「噂であれ何であれ、この大陸に広まっている話が我らの所にも伝わってきた。

ならばここで貴様に出会つたのも、何か運命を感じるとは思わないか？」

『運命』 これが恋人に言われた科白ならば心躍るところなのだろうが、こんな奴に言われているかと思うと反吐が出る。「だから貴様らはそれが真実かどうか、ここで確かめると申うのか」「そうだ。もしそれが事実ならば、我が最強になる!」

奴らは互いに交差しながらこちらへ駆けてきた。あたしは再び「風」に電撃を附加させて、奴らの持つ短剣ナイフを両手で受け止めた。

あたしはそのままの体勢で、口角を上げる。  
「お前らもお目出度いな。そんな定かでないものを欲するために、あたしに殺されたいというのか」

「眞実は貴様を食すれば分かることだ。それに噂のあるといひ、火種がないとも限らないしな」

あたしは後方へ飛んで再び間合いをとる。しかし奴らは透かさずこちらへ向かつてきた。

片方の魔物は、真正面から術を放つてくる。

あたしはもう片方の繰り出してくるナイフを受け止めながら、その術を躱す。が、今度はあたしの脇腹を掠つた。

そろそろあたしの体力が持たなくなつてしまっているようだ。動きも先程より鈍くなっている。

それは奴らも同じはずだ。先程までは攻撃に手応えを全く感じていなかつたが、今は拳に奴らの感触を微かに感じるようになつた。それがあたしと同様、動きも鈍くなっている。

だがあたしは攻撃の手を緩めることができなかつた。

2対1。

無論数の問題ではないが、気が少しでも緩んでしまつた時、恐らくそれがあたしの最期だ。

あたしは攻防を繰り出しながらも、奴らを如何にして同時に倒せるか考える。

(こうなつたら、下の建物でもぶち壊してみるか?)

要は何か、突破口さえ見つけられれば良いのだ。

だが突如。

何かの碎け散るような鋭い音とともに、空が割れていた。

第27話 彼女の理由（前書き）

第3章 魔物討伐（エリス編）

## 第27話 彼女の理由

「モンスター・ミストを破壊してほしい」  
彼女 ルティナは、‘ぐく普通の日常会話的な流れで、私たちに  
そう言つてきた。

私も同様に、‘ぐく普通の自然な動作で踵を返したのだが、即座に  
背中の外衣フードを掴まれていた。

「おい待て。いきなり何故逃げるんだ」「  
や……だつて、何言つているのかよく分からぬ  
「あんた、あたしの言つてている意味が解らないのかい？」  
その言葉に対し、私は深い溜息を吐かずにはいられなかつた。  
「じゃなくて、出来もしない依頼はお断りつてことなのよ」  
「そんなことはないだろう。これはあんたたちには、簡単なはずだ  
ろ?」

さも当然といった表情で、ルティナはさらりと言つてのける。私は眉根を寄せた。

「何で私たちが?  
私たちは一般的な、‘ぐく普通の巡礼者なのよ。破壊できるわけない  
じゃない。」

そんな簡単に壊れるものならば、他の誰かが既にやつてゐるわよ  
彼女に向かつてそう訴えた。ルティナは考え込みながらも、そん

な私をまじまじと見詰める。

「確かに一見そう見えるが……しかし、あの結界を破つたのはあんたたちだろ？」

ただの巡礼者がそんなことをできるはずがない」

「あ……」

私は先程の出来事を思い出した。そういうえば、アレックスがいとも簡単に破つてみせていたのだ。

彼には魔物の術が効かない。身体に当たる寸前で、周囲には精霊の結界が張り巡らされた状態となり、術を弾く。

先程は『術』である結界に彼が触れた途端、その能力が発動した。故に弾かれた術はその形態を保つことができなくなり、破壊されたのかもしれない。

無論この考えは、私の憶測にしかすぎないのだが。  
(ルティナも私たちのことを、何か勘違いしている?)

今彼女は「あの結界を破つたのはあんたたちだろ?」と訊いてきた。

「あんたたち」つまり、また私とエドのことまで数に含まれているのだ。先程の魔物たちと同じである。

確かに今は三人で行動しているが、エドは結界を通らなかつたので分からぬにしても、私は破ることができなかつた。

やつてみせたのは、アレックス一人だけである。彼女はそれを見ていなかつたのだろうか。

「さつきの結界を破壊できるということは、モンスター・リストも破れるということになる」

「それはつまり、モンスター・リスト自体が、魔物の結界術で出来ているということなの?」

「無論、そうだ」

「でもだからって、破壊できるとは限らないじゃない」

「アレはさつきの結界術と、何ら変わりない代物だ。破るために作られた張本人 魔物を倒すか、或いはソイツに無理矢理にでも解かせるしかない。」

だがその張本人である魔物は現在、その中に隠れていて外へは全く出てこないのさ。つまり、外部からアレを破壊するのは不可能というわけだ。

だからそれをできる、あんたたちの協力が必要だ」

その説明で彼女の依頼理由は分かつたのだが。  
(にしても何だか、やけに詳しいよね)

モンスター・ミストは中に入つて調査ができないので、その正体は殆ど分かっていない。なのに田の前にいる田付きの悪い女性は何か、あの霧は魔物の結界だと自信たっぷりに言い切つたのである。

「むう、どういふことだ」

「ここで初めてアレックスが口を開いた。

「何故ここにあるはずの手が、後ろの離れた場所へ、瞬時に移動するというのだ」

「あんたまだそれを考えとったんかいッ！……」

一応ツツコんでおいた。

とはいえることだから、ある程度の予想はしていたけれど。

## 第28話 初対面??

「ところで君は一体、誰なんだい？ いつからそこへいたのだ」アレックスはルティナに気付くと、いきなり不躾な質問をしてきた。彼女は当然、怪訝そうな表情をしている。

「さつきからずっと居たが……それに名は既に名乗ったはずだ」「む？ 名乗つただと???? 僕には全く、名乗られた憶えがないぞ」

真剣な表情でキッパリとそう返したアレックスに対して、エドが代わりに答えた。

「この方は～ルティナ・マーキスさんといつて～魔物ハンターだそうですよ～」

「魔物ハンター？ それは一体、どのようなものなのだ????（そこから説明しないといけないのか…）

正直、面倒だ。

私がうんざりして沈黙していると、エドがまた代わりに口を開いた。

「魔物ハンターというのは～ギルドにおいて～…（以下略）」エドの長々しい説明が始まつた。

私にとって彼の説明は、長く退屈なものでしかなかつた。途中で横道に逸れるし、更に要領を得ない話が延々と続くのだ。

しかしアレックスにとつては逆にそれが、とても分かりやすいらしいのである。なので彼への説明が必要な場合には、時間さえあれば大抵エドにしてもらつていた。

その間暇を持て余していた私は、常に携帯している懐中時計を眺

めながら、意味もなく時間を計っていた。が、二分が経過した頃になつて物音に気付いた私は、ふと何気なく隣へ顔を向けてみる。

先程までのルティナは、残りの饅頭を頬張りつつ彼らを無言で見ていた。しかし今は前を向いたままで、その空箱を力任せに千切っている。

無意識でやつている動作なのは分からなかつたが、無表情のまま千切つては破りを繰り返しているその行為は、端から見れば異様な姿だ。鬼気迫るものがあつて、かなり恐かつた。

これはヤバイ。もしかしたら限界が来ているのかもしれない。

この状況に慣れてしまつた私には、特にどうということでもなかつたのだが、彼女にとつてはかなりきつい状態に違いない。取り返しがつかなくなる前に、何とか手を打たなければ。

私は気を静めるべく彼女の肩へ、そつと手を置いた。

「ルティナ、あの二人のことはあまり深く考えないで。ほんのちょっと待つてくれさえすれば、直に終わるはずだから。ともかく、もう少しだけ我慢して」

「は？」

懇願するかのようにお願いした私に対し、彼女は鳩が豆鉄砲を食つたような顔をしていた。今は分からずとも、すぐにこの言葉の意味が分かるだろう。

「……と、いうわけなのです。それでルティナさんは～モンスター・ミストの破壊を僕たちに依頼してきたのです～」

説明を始めてから五分程経過した頃、ようやく終わりそうな雰囲気になつてきた。

私は安堵し、ほつと息を吐いた。

その間私とルティナは肩を並べ、無言で彼らの遣り取りをずっと見ていた。といつても私の場合、いつルティナがキレてしまふか気が気ではなかつたため、上の空で内容を全く聞いてはいなかつたが。

「モンスター・ミスト？ それは一体、どのようなものなのだ？？」  
「モンスター・ミストというのは、ルティナさんの話によれば……」  
(以下略)

また別の単語説明が始まつたようである。

私はガクリと首を頃垂れるのだった。何故か振り出しに戻つたような気分だ。

「……」で再び、恐る恐るルティナに視線を移してみると、眉間の皺が先程よりも更に深くなつてゐるような気がする。それに覗いている翠眼には、怒りに燃える赤い炎がチラチラと揺れて見えた。組んでゐる指も苛々と落ち着きなく動き、今にも全身から殺気が噴出しそうな気配だ。

これはもう、本氣でまづいかもしれない。

「あ、あのさあ、ルティナ

「なんだ」

ビクビクしながら話しあげた私に對して、彼女は前を見据えたままで機嫌の悪そうな返事をした。

その威圧感に氣圧されそうになつたが、いや、ここで去らではいけない。

「ええと……良い天氣、ねえ」

「天氣はさつきから良いだろ？ が。今更言ひつゝではない」

「……」

「あの……あ、じやあさ。ルティナの左眼つて、何で眼帯してこりの？」

「もしかして、怪我か何か？」

口に出してから直ぐに、物凄く後悔した。

その質問を訊いた途端、彼女が無言で睨んできたのだ。氷のよう

に冷ややかな視線だったため、私は一瞬で氷結してしまっていた。

「…………」

「てか、それはもう完全無理だしつ！」

これ以上、会話も続きそうにならない。

## 第29話 英雄

私がルティナの放つ鬼雪妖精<sup>スノーデビル</sup>のような視線に動けず、射殺されそうになつていた時。

「成る程！ 魔物の術かつ！――」

アレックスの叫び声が聞こえてきた。

どうやら説明のほうが終わつたようである。私にとつては正に、天の助けだつた。

すると彼は振り向いて、一ちらべすんすんと向かってきた。そしてグローブを嵌めているルティナの両手をガシッと力強く掴むと、真剣な表情は崩さずに、勢いのままで迫つていつた。

「分かつた、引き受けよう！」

「へっ！？」

吃驚した私は、反射的に変な声を出してしまつっていた。

「ちよつ、ちよつと待つてよ！ 引き受けるつて、モンスター・リストの破壊を！？」

「当然だ！」

彼は胸を張つて堂々と答えた。いつもの如く、かなりやる気に満ちてゐる顔だつた。

「話に聞けばモンスター・リストといつ術は、外部からの攻撃を一切受け付けないというではないか。

それを破壊し、魔物から世の人々を助けたいと願う彼女の気持ち心意気には、俺は甚<sup>いた</sup>く感銘を受けたのだ。

ならばそれを助け、救済をするのが、英雄としての俺の役目ではないか！」

アレックスは拳を振り上げながらいつものよっこ、熱く演説をしていた。

それにしてもエドは一体、どのような説明をしたのだろうか。この口振りから察するに、恐らくは多少の脚色を加えているのかもしないが。

時々忘れそうになるのだが、彼は何と言つても吟遊詩人なのである。

「英雄？　何を言つている」

「何！？　君はまさか、あの偉大なる英雄を知らないというのか！」

訝しんだ様子で訊き返した彼女の手を取りながら、再び凄い勢いで詰め寄つていくアレックス。

「いや、そうではないが…」

急に迫られたルティナは、戸惑いの表情とともに眉根を寄せると、顔を横へ逸らした。

「英雄といえば、アノ話だろう」

彼女は後退りながらアレックスの手を振り払つと、慌てるかのように後ろを向く。

「精霊に守護されし六英雄が、魔王を倒したとかいうアノ話

「おおつ！　何だ、君も知つているのではないか」

「知つているも何も、有名なお伽話だからな。

それを本気で信じているのは大抵、トイーズダーラマ大陸にいる精霊崇拜者がカルト信者くらいなものだが……あんた、信者なのかい？」「信者？」アレックスは首を傾げている。

「俺は英雄の末裔だが」

「…………は？」

「わーっ、そ、そ、それより、モンスター・ミストの話よつ！」

私は眼を丸くしているルティナと、不思議そうな顔で首を傾けているアレックスの間へ、慌てて割って入った。囁み合わない二人にこれ以上会話をさせたら、話が余計にややこしくなりそうな気がしたのだ。

「ああ、そうだったな。ではついてこい」

「うむ、了解した！」

突然一人で歩き出したルティナの後を、アレックスが足取りも軽くついていく。まるで尻尾を振りながら主人の周囲でまとわりつく、飼い犬のようだ。

そしてその場に取り残されたのは、私とエド。

「エリスさん、どうしましようか？ 僕たちも行きますか？」  
問い掛けられた私が彼を見ると、何かを期待しているような顔付きをしていた。

その瞳が分厚いレンズで覆われていても分かる。明らかに「行きましょー！ 是非ツ！」と、力強く訴えかけている表情だ。

「全く……分かつたわよ」私はその迫力に気圧されて、渋々承知した。

それにあのアレックスを勝手に行かせたりしたら、何をするか分からぬというのもあった。

彼の身に何かあれば、恐らくはティーンに怒られ……いや、それより以前から度々話に聞いているアレックスの妹、リアに殺されるかもしれない。

私は気が進まないながらも、仕方なく一人の後を追うのだった。

### 第30話 ハドの体験

「エリスさん、アレックスさんたちが、ビルやガーディーの中へ入つていつたようですよ~」

私たちがようやく一人に追い付くと、彼らは一度その中へと消えていくところだった。

相変わらず中は混雑している。外から見てもそれは明らかだ。

「僕たちも、入りますか~?」

「いえ、それは止しましょう。多分外で待つていれば、その内出でくるんじゃないでしょうか。この混雑じや長時間、中へは居られないはずだから」

と、何だか昨日も同じ会話をハドとしたような気がする。

「でも外は危険です~。何故なら、僕たちはまだ、狙われているのですから~」

「なら、余計にここは安全な場所かもしないわよ。流石に人が大勢いる中では、攻撃を仕掛けてはこないでしょ~」

「そんなことは、ないと思います~」

ハドは辺りを見回しながら、急に不安げな表情になつた。

「実は今日、エリスさんたちと別れてから、温泉へ入るために、今まで続いていた、行列へ並んでいたのですが、その時~……」

それから約七分が経過した。

「……と、いっわけで、エリスさんのところにて合流できたので

す~」「な……成る程」

彼の話を要約するところだつた。

エドが行列へ並んでいると、横から何かが割り込んで、いきなり突き飛ばされたのだといふ。

そのまま道路脇へ吹き飛ばされたエドが、直ぐさま身を起こして見てみると、なんと胸にナイフが刺さつてゐるではないか！

だがそれは丁度、胸に下げていた樂器<sup>ハープ</sup>に突き立てられていた。

その直後、前で人の気配がしたので反射的に見上げると、黒ずくめの男が自分に向かつて、更にナイフを突き立てようとする瞬間だつたといふ。

一瞬でも氣付くのが遅かつたら、確実に殺られていたらしい。

「それでエドは命からがら、私たちのところまで逃げてきたといふわけなのね」

「やうなのです。路地裏を滅茶苦茶に走り回つていたので、攻撃も上手く避けられ、何とか助かったようです。それにこの村には、路地が多くて、不幸中の幸いでした。その上、運良く皆さんと合流できても良かったです」

「けどその行列の場所では、騒ぎにはならなかつたの？」

「今さつき、そこを通つてきましたが、どうやら、なつてはいな様子でした」。

恐らく、誰も気付いていなかつたんぢや、ないでしようか。僕でさえ、氣付く間もなく、突き飛ばされていましたので、

エドは自分が殺されそうになつたといふのに、相変わらず明るい表情で音楽を奏でている。

「本体のほうは、多少決れてしましましたが、弦が無事で良かつたです。コレ張り直して調整するのに、多少時間がかかるんですよ

」。

危づく皆さんと一緒にモンスター・リストを見に行けなくなる  
ところでした」「見に行くつて…」

「見に行くつて…」

見物するために向かうわけではないのだが。それにナイフが弦の  
ほうに刺さった場合、エドは確実に死んでいたはずだ。

「ですが本体は、そのうち修理に出さないと、いけないですけどね  
」と、エドが呑気な歌声で唄っていた時、人混みの中から私たち  
を呼ぶ声が聞こえてきた。

「君たち。遅くなってしまったが、もづ登録は済ませてきたから安心  
するのだつ！」

アレックスは私たちに近付いて来るや否や、闘志を燃やしながら  
力強く拳を前へ突き出した。その様子から、彼がギルドへ入つてい  
た理由を確信した。

「登録つて、まさか」

「うむ。無論、討伐隊への参加申請だ」

彼らがギルドへ入つた時点で、何となく予想していたことではあ  
つたのだが。

「ちょっとルティナ、どうこうことよ。  
モンスター・ミストを破るだけなのに、何で討伐隊へ参加しなくち  
ゃならないのよ…」

遅れてやつて来た彼女に、私は食つて掛かる。

「あそこへ近付くには、それが一番手っ取り早い方法だからだ」「  
でも私たちが討伐隊へ参加するのは、物凄く都合が悪いのよ  
」「それはあなたたちが、まだ駆け出しの巡礼者だからかい？」「  
う……まあ、そんなところね」

何故私たちが「駆け出し」だと分かったのだろう。  
いや、そんなことはどうでもいい。

今私は腕に付けられた刻印のせいでの、かなり術力が落ちている。  
それにアレックスの特殊能力のこともある。  
人間の術にかかりやすいということもあるのだが、もし彼が術文  
もなして術を防御している場面を他人に見られてしまったなら、即  
「魔物」だと疑われる心配もあるのだ。

(あれ、でも)  
私はふと、あることに気が付いた。  
ルティナは疑問に思わないのだろうか。

『何故私たちがあの結界を、簡単に破れるのか』といつことを。

「ともかく場所を変えよう。ここは落ち着かない」  
彼女は周囲を見回しながらそう言つと、先頭を切つて歩き出した。

### 第31話 つかの間の休息1

(うわ、マズっ)

私はそれを口に入れた途端、思わず顔を顰めていた。

その場所は温泉街の外れにある、あまり綺麗とは言い難い建物の一角にあつた。

人ひとりがやっと通れるくらいの、薄暗くて狭い階段。地上から下っていくと、一枚の扉が現れる。

そこに掲げられていたのは古ぼけた小さな木製板で、表面には『喫茶フェアリー』と書かれていた。

しかし内装は「フェアリー（妖精）」という名には、ほど遠かつた。

狭い店内にあるのは小さなカウンター一つに、五つテーブルが並んでいるだけのシンプルなもの。

誰の作品だか分からぬ絵画が壁に掲げられていたり、花や観葉植物が生けられていたり、吟遊詩人による緩やかな調べが店内を流れたり……というようなことも全くない。

ましてや、『妖精』から連想されるようなファンシー系調度品なども一切なく、何故そのような名を付けたのかと、疑問に思わずにはいられない店だった。

その上、出てきた料理も不味い。

運ばれてくる時間はそれ程遅くはなかつたし、見た目も悪くはないのだが、一口食べただけで辟易するくらいの不味さである。

メニューの種類もあまり豊富ではなかつた。パスタも三種類しかなくて、他にはサラダとトーストがいくつあるだけなのだ。飲物

も香茶と黒豆茶、フルーツジュースくらいしかなかった。

私たちはこれから討伐隊へ参加するということで、少しでも腹の足しになりそうなもの パスタを注文していたのだが、まさかこれほどまでに不味いとは思わなかつた。

私が頼んだのは海鮮パスタなのだが、麺が水っぽい上に、歯<sup>ハ</sup>たえの全くない食感なのである。

当然の如く、私はそのままフォークを置いていた。

「なんだ、もう食べないのか」

皿の前で同じように食事をしているルティナは、そんな私に気付くと睨んできた。

もしかすると怒っているのかもしれない。何故ならこの食事が、彼女の奢りだからだ。

「『めんなさ』……ちょっと食欲が湧かなくて。疲れているのかも」肩を窄めながらも、申し訳なさそうに言い訳をする私。

「僕もちょっと食欲ないです」

隣で食べているエドも眉を顰めつつ、じたばたに紛れて便乗してきた。彼は普段であれば人一倍食欲旺盛なはずなのだが、流石にこの料理には手を付けられないようである。

「何!? エド、君が食べないとは珍しいな」

その前では海鮮パスタにかぶり付いているアレックスが、吃驚した表情でエドを見詰めていた。因みに彼は、「今までに味わったことのない珍味だ」と言いながら食べている。

彼女のほうは、口ちらの苦し紛れの言い訳に気付いている様子もなく、私たちの皿を両手で掴むと、無言でその中身を自分の皿へと

移し替えていた。

彼女はこんな不味い物を、二人分も追加で食べようといつのか。

しかも私が注文したのは海鮮パスタであるが、エドはホワイトパスタ、ルティナはミートパスタである。

異種類のものを一つの皿へ同時に放り込み、更には満遍なく搔き混ぜているのだ。それらは食欲の削がれる色へと、明らかに変化しつつあった。

これは完全に怒っているのかもしれない。

「それなら、飲物はどうだい？」

「え？」

「少しくらいは腹に入れておかない、これから先の体力が持たないぞ。旅を甘く見るな」

彼女は私たちにそう忠告すると、再びソレラを黙々と食べ始めた。（あれ。もしかして、怒っているわけじゃない……のかな）

言葉はかなりぶっきら棒だったが、こちらを責めている様子ではないような気がする。

私はしばらく迷っていたが、折角なので彼女の言葉に従うこととした。

他の三人も頼むというので、私がマスターに声を掛ける。今までカウンターの中で新聞を読んでいた彼は、早速準備に取り掛かった。

しかしこのマスターも、ルティナ以上に愛想がなかつた。

年齢は大体三十～四十歳代くらい。ドッシリとした大柄な体型に、口から顎にかけて毛むくじやらな赤髭に覆われていた。

これで大きな荷物を背負っていたならば、完全に山男である。あるいはヒトであれば熊、魔物であればベアベアに間違われる山男、といった具合か。

何れにしても、確実に客商売をしているよつには見えない。

おまけに出てくる料理も不味い。

それらのせいだとは思うが、客は私たち以外には誰もいなかつた。他に従業員もいないうつだし、この状態で店が潰れたりはしないのだろうか。不思議に思った私は早速、ルティナに尋ねてみた。

「このお店つて一体、何年前から営業しているの？」

「は？ 何故それをおたしに訊く？」

ルティナは口へ運んでいた手を止めると、吃驚したような顔で私を見詰めた。

「だつてルティナは、あのマスターと知り合いなんじょ？」

「おい、こきなり何故そう思うんだ。あたしはあのマスターの知り合いでも、この店の常連でもないぞ」

「え。じゃあルティナはこのお店のこと、何で知っているの？」

私は驚いて訊き返していった。

地上に店の看板は見当たらなかつた。故に知り合いや常連でもない限り、この場所を知ることなどあまりないような気がしたのだ。

「ここはこの前訪れた時、ギルドから紹介してもらつた店だ」

「ギルドから紹介つて……えつ！？ ギルドって、そんなことをしてくれるの？？」

「それは初耳です～。僕も知らなかつたです～」

私とエドは同時に驚きの声を上げていた。

「ああ。格安の宿とか郷土料理の美味しい店とか、尋ねれば一応教えてくれる。

だが提携店を無作為に選んでいるだけだから、当たり外れも多い。だからあまり期待はできないけどな」

ルティナはそう続けたが、私にとっては良い情報だつた。いつか私もそのシステムを、利用する時が来るかもしれない。

「でも『当たり外れが多い』と言つておきながら、ルティナがまたここに来ているのは、どういった訳なの？」

何となく小声になりながら、彼女へ更に訊いてみた。私にはどう見てもこの店が、「外れ」としか思えなかつたからだ。

彼女は手に持つていたフォークを再び休めると、怪訝な表情を浮かべながらこちらへ視線を向けてきた。

「だからさつきも言つたように、この前紹介してもらつたのを思い出したからだ」

「思い出した……つて、それだけの理由？」

「それだけだが、他に何かあるのか？」

「そりゃあ、ここは喫茶店だもの。料理が美味しいからまた食べたくなつたとか、店の雰囲気が良かつたからとか、そういうのもあると思つただけだ」

「料理、か……まあ、不味くはないと思つが」「えつ！？」

私とエドが再び声を上げた。カウンターで作業をしていたマスターが私たちに反応して、顔をこちらへ向けたようだったが、直ぐにまた戻つていった。

「どうかしたか？ 変な声を出して」

ルティナは私たちの顔を凝視しながら、眉根を寄せている。

「……いや、ええつと……」

「な、な、何でもないです。ルティナさんは、僕たちのことなど構わずに、食事を続けてください〜」

どうやらHNDが珍しげ、空氣を読んだようである。  
彼女はまだ訝しんでいるようだったが、直ぐに食事を再開した。

## 第32話 つかの間の休息2

無表情な顔のマスターがテーブルの上に、無言で黒豆茶入りのカップを四つ並べていく。

メニューにはアイスとホットの両方が書かれており、私たちは四人ともホットを頼んだ。

室内は片隅に置かれている、古ぼけた小さな暖炉のお陰で少し暖かかったが、外は肌寒い。やはりこの季節、身体の暖まるものが欲しくなつてくるのは自然の摂理といえよう。

田の前に置かれているものは世間一般で広まっている、「ごく普通の黒豆茶」。黒々とした液体が小さなカップへ、なみなみと注がれている。

黒豆茶といつのは、苦味のある黒豆から抽出されるお茶のことだつた。そこへは、たっぷりのミルクと砂糖を加えるのが常識である。それが苦味と上手く調和され、芳醇な香りを漂わせるのだ。

しかし田の前にあるソレは、少し違っていた。

湯気とともに立ち上つてこむ香りも、確かに普通のお茶である。が、一口飲めば舌先には、ざらりとした感触が伝わってきた。それだけで言つならばまるで、砂を間違えて舐めてしまったかのようである。

加えてともかく苦かつた。普通なら、黒豆本来の味と上手く混ざり合つたために美味しいはずなのだが、これは甘味と苦味が分離しているかのようだ。

恐らく液体が豆から抽出しきれずに、苦豆そのものも中に混ざってしまったのかもしれない。このお茶は茶殻を完全に取り除かなければ

れば、不味くなるのだ。

一口飲んだだけで思わず、吐き出しそうになってしまった。しかしルティナがカップを持ったままで、先程からこちらをじっと見ている。そのことに気が付いていた私は、何とかそれを踏み止まった。

(取り敢えず、飲めないことはないのよね)

何かの罰ゲームだと思い込むことにした私は、目を強く瞑ると、それを思い切って喉に流し込んだ。奥へ異物が入り込んでしまったかのような感触だった。

隣にいるエドのほうへ、ふと眼を向けてみる。私と同様に苦しそうな表情で、カップへ恐る恐る口を付けているところだった。こちらに向けられている彼女の視線には、彼もやはり気が付いているらしい。

一方アレックスはといえば、「独創的且つ斬新な味だ」と言いながら、珍しいものでも見るような顔付きで飲んでいた。

そんな私たちのことを見届けた彼女は、そこでようやく視線を外してくれた。

実を言うと私は猫舌なのだが、無理矢理熱いお茶を飲み込んでいたのである。お陰で喉の奥や舌が少し、火傷をしてしまったかもしれない。心なしか、視界もぼやけているようだ。

「ようやくこれで、落ち着いてきたな」

ルティナはカップ中のお茶を一気に飲み干すと、軽く息を吐きながらそう口を開いた。

彼女は全く表情も変えずに飲んでいた。しかもその後で三杯も、お代わりをしているのだ。

「上に居ると、こちらへ向けられる視線が気になつて、かなり居心地の悪い思いをしていたからな」

と、ちらりとアレックスのほうを一瞥する。

ルティナも注目される原因が、彼だとこうことには気付いているようだつた。気付いていないのは、本人だけである。

「それより、ちゃんと説明をしてくれないかしら」

「ん？ ……ああ。

あたしたちの出陣は、日の落ちる夕方頃だ。それまではゆっくりと、身体を休ませておくんだな」

「いえ。討伐隊ではなくて、モンスター・ミストの話よ。モンスター・ミストを破壊する、本当の理由が聞きたいの」

私は彼女の右目を真っ直ぐに見据えた。

「それは世の人々を助けたいと願う、善意の想いからではないか。さつき話していたことを、君は聞いていなかつたのか？」

「じゃなくて……つていうかアレックス、今は黙っていて。ルティナと話しているんだから」

アレックスが言つている理由は、エドが吟遊詩人として話の内容を少し誇張し、いつもの思い込みで間違つた認識をしているだけにすぎない。私はルティナの口からは一言も、そんな話を聞いてはいないので。

私はエドにも口を挟まないようになつと、意外にも一人とも素直に了承してくれた。

途中で彼らに口を挟まると厄介なことになりそつたので、先に釘を刺しておいたのだ。これで当分は大人しくしてくれるはずである。

私の真剣な眼差しを受け取つたルティナは、何かを諦めたような

表情で深い溜息を吐くと、自身の頭を左手でカリカリと搔いた。

「それはあたしが、あの中にいるヤツに用があるからだ」

「あの中っていうと、モンスター・ミストの中といふこと?」

「そうだ」

私は一瞬黙り込んだが、直ぐに疑問に思つたことを口にした。  
「さつきルティナは、モンスター・ミストの中にいるのが『魔物』  
だと言つていたわよね。何でそう言い切れるの? その根拠は?」  
私の質問で、今度はルティナが黙り込む番だったが、ややしてか  
ら重そうな口調で答えた。

「あんた、あたしの仕事を言つてみる」

「へ? 魔物ハンター……でしょ」

「それが全ての答えだ」

そう言つと彼女は椅子の背もたれに身を預け、両腕を組んで再び  
黙り込んでしまった。目を閉じた彼女の次の行動をしばらく待つて  
みるが、それ以上の反応はない。

魔物ハンターは、魔物を狩るのが専門の職業である。

当然、私のような半人前の術士では知り得ない情報を持つていて  
も、何ら不思議ではないのだが。

私はまだ、納得のいかない思いを抱いている。

とはいえ彼女の様子を見れば、これ以上の答えを聞き出すのは難  
しいだろう。

日も落ちかけてきた頃になつて、私たちは村出入口の集合場所に辿り着いていた。

ルティナの話によれば、日が山の向こうへ完全に隠れる瞬間が、私たちの出陣の合図だという。

周囲にいるのは、如何にも屈強そうな術士たちばかりだ。皆一様にして殺氣立つており、私たちのような見習い風情の姿は流石に見かけない。

私は精霊術士だからまだ良いが、吟遊詩人であるエドは完全に場違いだった。

パーティ内で支援援護を担当している芸術士が、このような現場に参加することなど滅多にないのだ。芸術士が参加する場合は主に、ギルドへ戻ってきた術士たちを治療する、救護要員としての役割である。

そのように、かなり浮いた存在の私たちだが、幸いなことに周囲では誰も気に咎める者などいなかつた。恐らく皆、目の前にぶら下がつている餌のことしか見えてはいないのだろう。

討伐隊に参加するのは、その日暮らしのためや修行目的などといった理由が大半を占める。賃金はかなり安いが手軽に路銀を稼げるし、更にスキルアップを図るには丁度良い仕事なのだ。

ただし自分の身は、自分で守らなくてはいけない。  
乱戦が予想されるからである。

個々の能力がある程度高くなれば、生き残れないといふのだ。

「しかし人が多いな。エリス、君は大丈夫なのか？」

「は？ 大丈夫って、何が？」

先程から落ち着きなく辺りを見回していたアレックスが、突然私に尋ねてきた。

「この人の多さでは、また迷子になってしまつぞ」「だから私は迷子になんて……」

「ご安心下さい～アレックスさん～！」

私の言葉を遮るようにエドが前へ出ると、自分の胸をドンッと叩き、自信に満ちあふれた顔をアレックスに向けた。

「僕がエリスさんの手を～しっかりと握つて～離しませんからあ～！！！」

「どわつ、いつの間にツ～？」

下に視線を落とすと、例のカツプルつなぎで手が繫がれているではないか。全くもつて、油断も隙もない。

私は必死に振り解こうと試みてみるが、ガッチリと組まれた指は意外にも、簡単に外れなかつた。最初の頃に比べれば何だか繫ぎ方が、格段に上手くなつているような気がする。

「うむ。でかしたぞ、エド！ これで一安心だな

「ちょっと、何が一安心なのよ」

振り解くのを途中で止めて口を尖らせると、それを宥めるかのようにアレックスは私の両肩に手を置いた。

「エリス、君がエドを守つてやつてくれ。この人数での戦闘では、エドの術が全く役に立たないだろ？ からな」

神妙な顔付きは崩さずに、澄んだ碧瞳をこちらへ向けてくる。アレックスでも流石にこの状況は、飲み込めていようつだ。

「本来ならば俺がエドを守るべき役割なのだが……しかし未だ修行

の足りてない俺とでは、逸れる可能性のほうが高い。

それにエリス、君ならば防御術が使える。恐らく俺といふよりは安全だろ？

確かに乱戦が予想される中で、他人を守りながら戦うところのは難しい。

しかしそれを言つのなら、いくら防御術が使えるとはいへ、私もアレックスと同条件のはずなのだが。

私がそのことを言つと、ここでルティナが口を開いた。

「あんたたちは、戦闘に参加しなくていい」

「え、どういづ」と？

「あしたたちの目的を忘れたのか。魔物討伐のために参加するわけじゃないんだぞ」

そういえばそうだった。

モンスター・ミストの破壊。これが当初の目的である。

「あんたたちは、あの方角へ真っ直ぐに向かうだけでいい。そこにモンスター・ミストがある」

ルティナの指差す方向を見れば、丁度日の落ちていく場所である。彼女は「真っ直ぐに向かうだけでいい」と簡単に言つているが、乱戦の中を潜り抜けなければならないのだ。戦闘に参加しないとはいへ、ただで済むはずがない。

「ルティナ……やっぱり私たちも、参加しないと駄目かな？」

「当然だ」

「けどその……非常に言いにくいくらいだけど私、今防御術しか使えない状態で……攻撃術が全く、役に立たなくなってしまったのよね」

私は思いきつてルティナに告白してみた。

術士が術を使えないというのは、翼のない鳥と一緒にあります。かなり恥ずべきことではあったが、手遅れになる前に言つておいたほうがいいと判断したのだ。

「知っている。眞間のあんたたちの戦いを、ずっと陰で見ていたからな」

彼女は腕を組んだまま胸を張り、偉そうな態度で堂々と言つた。

しばらく彼女を凝視していた私は、静かに口を開いた。

「ルティナ……それって、胸を張つて言つことじやないわよ」  
瞬間、彼女はバツの悪そうな表情をする。そして直ぐに、半眼気味の私から視線を逸らした。

「あたしは以前、あんたと同じような症状の奴に会ったことがあるんだ。

あたしの勘が正しければ、あんたは奴と同じ理由で一時的に、術が使えなくなっているだけだと思つ

「それ、どういう意味？」

「あたしが口で説明しても、ソレに気付いていないあんたには理解できないだろう。そういうものは、自分で気付いて直すよりほかないからさ」

ルティナの言つている意味こそ全く理解できなかつたが、攻撃術が使えなくなつた原因を知つてゐるよつな口振りで話してゐるのは、間違いない。

私は勿論のこと、アレックスやエドの一人でさえ、腕に付けられた紋様を彼女には見せていないはずだ。つまり、そのことを知つてゐるわけがないのである。

「それよりあんたたち、例の場所へ着いたら宜しく頼むぞ」  
ルティナは私たちを見回すと、念押しするよつに言つてきた。

「そのことですが～ルティナさん～」

エドがのんびりとした口調で、楽器を鳴らしている。

「僕とエリスさんは～結界術を～破る～ことができませんよ～」

その言葉を聞いた瞬間、ルティナの表情が凍り付いたかのように見えた。

そしてしばしの沈黙。

が、やがて。

「……何？」

「昼間の結界を破ったのはアレックスさんだけなのです～」

「つむ、当然のことをしたまでだ。何せ俺こそが精霊に選ばれし、無いの者であるからな」

血漫げに胸を張るアレックス。逆にルティナのほうは、顔色が徐々に曇つていくように見える。

「おい、結界は三人とも破壊できるんじゃなかつたのか？」

彼女は真顔で訊ねてくる。それに対して私は困惑し、眉を顰めた。

「は？ 一体ド情報よ、ソレ。結界を破つたのはアレックス一人だけよ。

少なくとも私には、そんな能力はないわ。エドは試していないけど、恐らく同じだと思うわよ」

「つまりこの男だけが、モンスター・リストを破れるということなのか？」

「まあ……あなたの話だと、そういうことになるわね」

「な……」

彼女は私の言葉で、じつやう絶句している様子である。

理由は見当も付かないが、やはり私たちに対して、妙な勘違いをしていたようだ。

とはいって、何をそんなに驚いているのだろうか。私からすれば、モンスター・リストを破壊できるという話のほうが、驚愕するべきことであると思うのだが。

「あたしの聞いている話と……いや、あれは元々あの魔物が……何故疑いもしなかったのか……やはり頭に血が……正常な判断が……ルティナは額を押さえながら、何やら一人でぶつぶつと呴いていた。

だが突然顔を上げると、決意を含んだような目で、私とエドのほうを見る。

「よし。それじゃあんたたちとは、ここでお別れだ。あたしはこの男だけを連れて行くことにした」

彼女はそう言って、アレックスの腕を強引に自分の方へと引き寄せる。

「なに、少しの間借りるだけだよ。あんたたちは街で大人しく待つていればいい」

私がそれに対して答える前に。

ピィィィーッ！！！

耳を劈くような笛の音が、辺りに鳴り響いた。途端、目の前で閉ざされていた門が、ゆっくりと開かれる。

同時に、周囲もそれに向かつて動き出していく。

その流れに逆らい、外からこちらへと傾れ込んでくる者たちもいた。私たちのいる部隊と交代するために、役目を終えて戻ってきた術者たちである。

私はあつと言ひ間もなく、交差するそれらの人々によつて、揉みくちゃにされていた。

ここから抜け出すには、もう既に手遅れだったのだ。

### 第35話 踏みつけられて？

「ヴァイン・マオ・デュウ  
神風護壁！」

「エリスさん～こちらです～」

私は防御術を掛けながら、エドの後に続いた。そして付近に生えている樹木へと隠れる。

既に周囲は闇に包まれていた。

村周辺には大勢の術士がいるので非常に明るかつたが、私たちは外れのほうまで来ているので、灯りは自分たちで用意するしかなかつた。

私は光属性で作った光球をいくつか周囲にまとわりつかせ、光属性の武器を持つエドはそれを本体に灯しながら、一人とも慎重に歩みを進めていた。

当然、その間にも魔物には襲われている。

私は防御術で敵を弾き飛ばしては逃げるという行為を、その都度繰り返していた。

敵の不意をついて逃げるのは、かなり原始的なやり方である。同じ敵には一回しか通用しないし、確実に逃げられる保障もないが、かなりの割合で成功率が高いのだ。

他人から見ればワンパターンな方法だとは思うが、私にとってはこれが最良の策なのである。

「……たく、次から次へと……」

一体これで、何度目になるだろうか。

私の息はもう既に切れ気味であつたが、まだ文句を言つだけの余力は残つていた。

「僕がエリスさんにアブソープライフをかけられれば良いのですか？」

「あれは！ アレックスにしか効かないものでしょうがっ！」

疲れているせいで、語氣を強めて返答してしまつた。しかしエドは特に気を悪くした様子でもなく、相変わらずのんびりと旋律を奏でていた。

彼は戦闘に参加していないとはいへ、私と一緒に敵から逃げ回っているのだ。そんな状況下で、よく落ち着いていられるものだと、こちらが逆に感心してしまつ。

「ですが最近の僕の術、エリスさんたちにも少しは効いていると思うのですが」。

この前、ディーンさんに僕の腕が少しずつですが、上がってきていくと言われたんですねよ～」

「けど、直ぐに寝ちゃうでしょ」

「そうなのです。僕もまだまだ修行が足りなくて……」

と、何故かエドは空を仰ぎ見ながら呑気に言いかけたのだが、その瞬間、いきなり私を突き飛ばしてきた。

当然前に倒れる私。大量に落ちている落ち葉の中に思わず、頭を突っ込んでいた。

「ちよつ、何す　！？」

窒息しそうになつた私は、直ぐに起き上がりて抗議をしようとした。が、今度は背中に衝撃が走り、またもや倒れ込んでしまう。

「ちいっ！逃がすかつ！――！」

その背中の遙か頭上から、怒声が聞こえてきた。

「ぎゃああっ！」

「おぞましきほゞの鳴き声とともに、慌ただしく動かしているかのよ  
うな羽音も、直ぐ近くから聞こえてくる。

程なくして羽音と足音は、同時に遠ざかっていった。

一方私はといえば、背中から伝わってくる激痛と、上から押さえ  
付けられているかのような圧迫感のせいで、身動きが全く取れなくな  
つていた。

私は何者かにより、後ろから背中を思いつきり踏みつけられたの  
だ。

恐らく他の術士だとは思つが、向こにはこちらのことなど全く眼  
中にはない様子だった。顔は確認できなかつたが、その声の雰囲気か  
ら容易に察することができた。

このよつな状況なので、当然と言えば当然だつた。だからそのこ  
とに關しては、全く腹は立たなかつたのだが。

「ふ〜、危なかつたですねえ〜」

エドが安堵の溜息を漏らす声が聞こえてきた。

「危なかつたつて、あんた……私を突き飛ばす必要なんて、なかつ  
たじやない」

突き飛ばされたお陰で、通りすがりの術士に背中を踏みつけられ、  
痛い思いまでしたのである。

「いえ〜、狙われていたのは〜僕たちですよ〜

## 第36話 空からの攻撃

「は？ 『ハーフ』と…？」

「先程真上で、殺氣のようなものを感じたのですう。ですが、エリスさんは気が付いていないようでしたので、咄嗟の判断で突き飛ばしました。僕の行動があと少しでも遅れていたのなら、攻撃を受けていたところでしたよ～」

私は空を見上げてみた。

そこには満天の星空が見渡す限り広がっていたが、その奥では何やら蠢く影が。

飛行型の魔物が何体か、上空を旋回しているのだ。

魔物は当然地上だけでなく、空からもやってくる。しかし鳥類に属する飛行型の大半は夜目が利かないため、魔物としては珍しく、夜間は殆ど行動をしない。それに例え昼間であつたとしても、地上へは滅多に下りることがなかつた。  
だがここには現在、モンスター・ミストがある。通常であれば下りてこないにしても、それを嗅ぎつける鼻はあるはずだ。

村周辺では上空を見張っている術士や騎士たちがいるので、比較的安全ではあつた。しかし集団で襲ってきた場合には、流石に一般人も避難せざるを得ないだろう。

それなのに、未だ避難勧告が出されてはいなかつた。といつゝとは、そのような気配がまだないということでもある。

「攻撃されそうな感じがしないんだけど」

魔物は遙か上空で旋回しているだけだ。今のところ下りてくる様子がない。

「僕が殺気に気付いて空を見上げた時、先程の魔物がエリスさんに向かつて、物凄いスピードで落下してくるのが見えたのです。その時に林の向こうから、槍が飛んで来て、一瞬で仕留めたのですよ。」

しかし攻撃がどうやら浅かったようですね。

致命傷を負わせずに魔物のほうはそのまま逃げていつたらしく……

私はエドの話を前半、半分くらいしか聞いてはいなかつた。しかし大体の状況は理解できている。

つまり飛行型の魔物がこちらに向かつて、一直線に降下してきたというのだ。

辺りの木はもうすっかり葉も落ち、上空を遮るものなど何もなくなつていた。飛行型がこちらに気が付いても、おかしくはない状況である。

それをたまたま近くにいた術士が見つけ、武器を投げつけてきたのだ。

その種類からして、恐らく「スピアラー（槍術士）」だとは思う。が、私を助けたというよりは寧ろ、降りてくる魔物に偶然気が付いたために、攻撃を仕掛けてきただけのような気がする。でなければ通り道にいた私をわざわざ、踏み付けて行つたりはしないだろう。

「それよりエド、よく殺気に気が付いたわね。私には何も感じられなかつたわよ」

私は彼の説明を途中で強引に遮ると、話題を変えて訊ねた。

「それは僕たち芸術士と、エリスさんたち一般的な術士とは、鍛え方が違うからですよ」。

何故ならエリスさんたちが、相手に直接作用できる能力にて重点を置いて鍛練を積むのに対し、僕たち芸術士は、場の気配などを読む能力、即ち『感性』を重点的に鍛えているのです

（……そういえば）

私が本格的に修行を始める前に、父から注意を受けたことがあります。

一般的な術士は視覚的能力を主に養っていくが、芸術士は目に見えない力、感覚的な能力に重点を置いて修行をする。そのため、希望する術士の選択は慎重に……などというようなことを言われたのだ。

他の術士は修行初期段階であれば、種類を途中変更することも可能だ。しかし芸術士の場合は根本的に修行方法が違うので、私たちが途中で芸術士に変更、或いはその逆も然り、することは、例え修行初期であっても容易にはできないらしい。

私の希望は最初から精霊術士だった。だから選択時において迷うことなどが一切なかつたので、この話を今まですっかり忘れていた。

「ですからエリスさんが、例え感知できなかつたとしても、仕方ないのです」

と唄いながらエドは、素早く横に移動した。

私も同時に彼の前に移動しながら、術文を唱える。

彼の背後から黒い影が、躍り出でてくるのが見えたのだ。それと一緒に放たれている殺氣も。

このくらいなら、私にも直ぐに感知できる。

「……」長い時間、留まっていたら危険ですう~

「ええ、そのようね。早く目的地へ急ぎましょ~」

魔物を弾き飛ばした私たちは、奴が追いかけてくる前に急いでその場を離れた。

### 第37話 敵襲、再び！

「で、ちゃんと田的地には向かっているんでしょうね  
私はここで、エドに向かつて訊ねていた。

辺りを窺いながら慎重に歩いていた私だが、途中で心配になつたのだ。

星明かりと光球で足元が見える程度には明るかつたが、道の向こうまでは照らし出すことができない。この先は闇が広がつていて何も見えないし、道標さえもない。

この状況で果たして無事に、田地へ辿り着けるという保障はあるのか。

「では～この辺りで～確かめてみることにしてます～」  
彼はそう言いながら自分の懐付近を、何やらゴソゴソとまさぐり始めた。しかし突然その手を止めると、私を覗き込むようにして顔を上げる。

「そついえばエリスさんは～方位を感知できるような術つて～使えるのですか～？」

「……え」

突然何を言い出すのだろうか、この男は。

私がしばらく何も答えないでいると、再度訊ねてきた。

「どうされました～？　使えるのでしょうか～？」  
「う……いや、ええっと……」

私は口籠もつていた。

それは方角を指示するだけという、ごく単純な初歩の術である。それを使えないと言つのは、かなり恥ずかしいことなのだ。

「アレはその……私には合わない術っていうか……だから……ええと」

「やつぱり～方向音痴のエリスさんでは～使えないんじゃないかと思うつていましたよ～」

私の渾身の言い訳を最後まで聞かず、何故か納得したかのように頷きながら、エドはいつもの笑顔をこちらに向けてきた。

……ああ、この二マニマニ顔を踏みつけたい。

「ですが、ご安心を～。僕は良い物を～持つてているのです～」「続けて胸を張つて取り出したのは、一枚の薄いカードだった。

「あれ、これって……  
『スピリットカード』  
『そうですね。精術札なのです～』

『精術札（スピリットカード）』。

この術札には　例えば「火をおこす」「風をおこす」などといつた、ごく単純な精靈術が封じられていた。しかも一般的な雑貨屋の店先へ並んでおり、属性の精靈石さえあれば術士でなくとも、手軽に使用できる魔術道具の一種である。

但し攻撃術などのような、強力な技は使えない。それに一回限りの使い捨てなので、無駄遣いができないというのも難点だった。

「これは～方位探査用の術札です～。僕が巡礼に旅立つ時に～両親

が餞別として何枚か持たせてくれました。

エリスさんたち精靈術士もパーティに居ますし、その間は使うことがないと思ってましたが、まさかここで役に立つとは、思いましたよ~」

最後の言葉は方位探査術を使うことの出来ない、私に対する嫌味なのだろうか。普段通りの歌声からでは、真意がさっぱり読めない。

「というわけでエリスさん、<sup>ハムストーン</sup>土属性精靈石を貰していただきたいのですが~」

「へ？ 他の石、持つてないの？？」

「旅の必需品として一通り持ち歩いてはいますが、エリスさんたちと一緒に行動しているので、他の荷物と一緒に、迂闊にも宿屋へ置いてきてしまいました~」

エドは相変わらず、へらへらと明るく笑いながら言つてきた。

確かに精靈術士が傍に居るのなら、術札を使つ機会は殆どないかもしれません。しかし私はぐれてしまつた時には、一体どうするつもりだったのか。これはかなり迂闊すぎる。

「あんた……仮にも私たちは、討伐隊へ参加しているのよ。いざという時の必需品が使えなくて、どうするのよ」

私は呆れつつも、腕輪から石を取り外してエドに手渡した。<sup>フレスレット</sup>

彼は描かれている紋様を表面にして地面へ置くと、重石のよつに石を乗せる。

更にその上に指先を触れさせた。すると一瞬だけ周囲の気が、僅かに動いた。

直ぐにエドが精靈名を唱えると、彼を中心にして地面から光の円が現れ出でる。

外縁の一端が四方へ伸び、その末端部分に古代文字も浮き出でています。

た。この文字は学校や修行での必修科目だから、ある程度のものならば私も読めるものだ。

「「J」の方角からすると、ルティナさんの仰っていた方向は、「J」になりますね~」

エドは私に石を手渡しながら、右方向へ人差し指を突き出した。  
「それじゃ、新たな魔物が現れる前に、早く目的地へ急ぎましょう」「エリスさん」そちらは違いますよ~。こちらです~」

「あ、そうなんだ」

何故かは分からなかつたが、左方向へ身体が勝手に動いてしまつた。私だって、たまには間違つことがあるのだ。

「「J」の辺りには、あまり魔物がないよつですね~」

「多分、他の術士たちが外側で、押さえているからかもしれないわね。村周辺では特に、かなりの乱戦だったものね」

「アレックスさんのはうは~大丈夫でしょうか~」

「そうね。私たちでさえあの中を抜けてくるのは、大変だったもの」

「ルティナさんと「J」一緒に良いのですが~」

「それはどうかしら。あの混雑で既に、はぐれていますかもしないわよ~」

「そうですね~。僕もエリスさんと手を繋いでいるから、はぐれていたはずですから~」

確かにそうである。

エドと手を繋いでいなかつたなら、今頃は一人で途方に暮れていしたことだろう。たまにはアレックスのアイディアも役に立つようだ。

「ですが~アレックスさんが~ちゃんと目的地へ辿り着いていれば

「何とかなると思つんですけど〜」

「だからそれが、一番の問題なのよ。当初の目的を途中で忘れて、あの中で戦っているかもしないでしょ」

「あのアレックスさんですから〜もしかしたら大丈夫かもしないです〜。何と言つても〜英雄の末裔ですし〜『精霊の加護』も守つてくれているはずですから〜」

アレックス崇拜者であるエドは、力強くそう断言した。根拠はないに等しかつたが、その言葉は今の私には心強かつた。

「そうよね。あの殺しても死にそうにないアレックスだもの、きっと大丈夫よね。それに無事でいてくれないと困るわ。でないと、ディーンに合わせる顔がないもの」

ディーンは私たちを信頼して、一人で討伐隊に参加したのだ。それなのに私たちも参加した上に、彼にもしものことがあれば、ディーンに顔向けができない。

今私たちは祈るような気持ちでアレックスのことを信じ、ルティナの指示した場所へ向かうしかなかつた。

あの乱戦の中で捜すよりは、目的地へ直接向かつたほうが、合流できる確率も高いと判断したのだ。但し先程も述べたように、彼が目的地へ向かうのをすっかり忘れ、途中で寄り道をしてさえいなければ、の話だが。

「そういえば〜ディーンさんは一度も〜会つことがありませんでしたね〜。ディーンさんのほうは〜大丈夫なのでしょうか〜

「ディーンのほうなら、恐らく大丈夫でしょ。私たちの部隊とは別部隊なのかもしないし。

それに彼は私たちとは違つて、旅をしていた頃に、何度も討伐隊へ参加していた経験があるつて言つていたもの。きっと心配いらない

わよ

彼は巡礼初心者の私たちとは違う。或いは私たちがいないほうが、思い切り戦えるのかもしない。

「それもそうですねえ～。僕たちが～心配するようなことでは～な……」

と、エドは言いかけたのだが、突然私を突き飛ばしてきた。

またもや、である。

「ちょっと……今度は何…………！」？」

落ち葉の上で四肢をついた私は、再び抗議の声を上げながら肩越しに振り返る。すると、私が先程まで立っていた地面の落ち葉が、下から勢いよく吹き上げられるのが目に入った。

それらは天高く舞い上がると、間もなく引力で下へと落ちてくる。このままでは落ち葉まみれになることにようやく気付いた私は、慌ててその場から離れた。

「くくく……よもや一度までも回避されるとはな」

不気味な笑い声とともに現れたのは、昼間私たちを襲ってきた魔物だ。但し今はその形態ではなく、最初に遭つたときのようになんの姿に変化している。

「あんたは確か……ボンバー！！！」

その姿と声が現れた途端、私は思わず指を突きつけていた。

しかし。

「ボンバー…………とは何だ」

「あ、あれ、違った？…………じゃあ、レバー！」

「…………だから何だ、ソレは」

「と、これも違うか。ええい、それなら、ビバ――！」

「…………」

魔物は険しい顔付きで、私を睨んできた。そこから、無言の威圧感が感じ取れる。

その様子から私は確信していた。

適当なアタリで名前を言つてみたところ、全てがハズレだったという事実を！

(せういえば、もう一匹はじりしたのかしら)  
昼間は一匹いたはずだが、私の見た限り、ここにいるのは一匹だけだ。

だが油断はできなかつた。

ただ姿を見せていないだけで、こちらの様子を何処からか窺つているのかもしれない。もしかしたらこの魔物と同様に、地面の下へ潜んでいる可能性もある。

私が緊張感を崩さずに魔物の行動を見守つていると、短剣数本を懐から取り出すのが見えた。

そして。

問答無用で一ひらへ突進していく。

### 第38話　辿り着いた場所

精霊術士が身の危険を感じた時、咄嗟に出てくるのは普段使い慣れている術文である。

だからこの瞬間で私が唱えるであろうものは、本来ならば先程まで使いまくっていた、風属性防御術であるはずなのだが。

「ヴァン・ウォレ・ヴィン  
烈風天駆シールド！」

瞬時に口をついて出てきた言葉は、意外にも予想に反したものだつた。

これはただ強風が吹き荒れるだけで、殺傷能力も皆無に等しい術文である。つまり戦闘時においては、あまり役に立たないのだ。しかも攻撃術でもあるため、今の私では普段の能力が出せない。それなのに何故出てきたのか、言った瞬間に自分でも戸惑っていた。

自分の過ちに気付いた私は、思わず目を瞑る。だが。

聞き慣れた轟音が耳許で鳴つていた。

「エリスさん～今のうちに、こちらですう～…」  
それとともに聞こえてくる高音ボイス。

弾かれるように開けたその田で見たものは、落ち葉のよじて上空へ舞い上げられている魔物の姿だつた。

私はその光景で再び、呆気に取られそうになつていた。が、今が逃げるチャンスだということによつやく気付くと、Hドから放たれる光に向かつて夢中で走り出していた。

いつもの術力だった。

咄嗟のことだつたので加減が出来ず、出力時には強い負荷がかかっていたはずだ。

その手応えを確かに感じていた。

つまり私の術力が、いつの間にか戻っていたのである。

『一時的に、術が使えなくなっているだけだと想つ

彼女の言葉を思い出す。

本当に一時的なものだつたのだろうか。それとも偶々、使えるようになつただけなのか。

何れにせよルティナには、後で詳しく訊いてみなければならなかつた。しかし今は逃げることに専念しなければならない。

息が上がつてくる。意識も朦朧として、前もよく見えなくなってきた。

いつ背後から攻撃をされるのか分からない。敵がどのくらいの距離まで縮めてきているのか、それを確認する余裕さえもなかつた。心臓から伝えられる鼓動が、有り得ないくらいの速さで動いているのが分かる。それでも今の私は余計なことを考えず、限界まで足を動かすしかないのだ。

だが自分の意に反し、地面へ向けて身体が傾いていた。

どうやら何かにつまずき、足がもつれてしまつたようだ。直ぐに体勢を立て直そうとしたが、疲れ切つた身体ではどうにもならなかつた。

そのまま勢いよく倒れ込む私。顔面から滑り込んだために皮膚を擦り剥いてしまつたが、そんなことに構つてゐる時間はない。

私は起き上がろうとした。が、焦る気持ちとは裏腹に、一度崩した身体は、言うことを聞いてはくれなかつた。

しかし。

「……は……あれ？」

私は異変に気付き、顔を上げた。そして肩で息をしながら辺りを見回してみる。

周囲の闇が一面、いつの間にか白濁色に変化していたのだ。  
おまけにエドの後ろ姿も見失つていた。後方にいた敵の姿も見えなくなつていて。更に先程まで宙一杯に広がっていた星々までもが、この白濁色に遮られているかのように確認できなかつた。  
だが唯一、周囲に樹木が生えていることだけは分かる。

この突然の異常事態で、私はいつの間にか冷静さを取り戻していった。

私は息を整え、やがてゆっくりと起き上がる。そして付近に生えている樹木の感触を確認しながら、改めて恐る恐る辺りを見回してみた。

「一体、どうなっちゃつたの？」

エドは何処へ行つてしまつたのか。  
敵も何処へ消えたのか。

耳を澄ませてみると、生き物の気配がまるで感じられなかつた。  
この世にたつた一人、自分が取り残されてしまつたかのような感覚だ。

どうしてこんなことになってしまったのか。先程まで夢中で走っていた私には、状況がさっぱり分からぬ。

「ええと、確かエドと一緒に、走つて逃げていたのよね」  
私はわざと大きな声で確認してみた。声を出していくないと、とてもない不安感が襲つてくるような気がしたからだ。

「で、それからどうなつたんだっけ？」  
私は首を捻つてみた。

知らない間にエドと敵が消え、周囲が闇から白に変化している。  
その原因を頭の中で探つてみたが、一向に解決できなかつた。しばらくその場で考え込んでいた私だが。

「……仕方ない。エドを探すか」

考へても分からぬのなら、先へ進むしかない。

そう判断した私は、樹木を辿りながら進むことにした。

恐らく先に行けば、エドと合流できるはずだ。

根拠のない一筋の希望を胸に抱きながら、私はそれを支えにゆつぐつと歩き出していたのだが。

不意に視界が広がる。

そこは辺り一面、赤や青、黄色に紫ピンクなど、色とりどりの名も知らない花が無数に咲き誇つていた。気が付けば、周囲を取り巻いていた白濁色のものが消えている。

「花？　この時期に？？」

私は眉を顰めていた。鮮やかな花々が今の寒い時期に、咲くはずがない。

しかも

。

「何で昼間？」

上空には雲一つない青空が広がっている。辺りも明るい。今は「夜」のはずなのに、だ。

周囲にはこの色彩空間を取り囲むように、青々とした樹木も立ち並んでいた。この光景を見れば、少しくらいことは暖かくても足をやつだが、妙に肌寒かった。

私は戸惑っていた。が、今の状況を把握しておかなければ、何も解決はしないのだ。

そう自分を奮い立たせた私は、足首ほどの高さに咲く野花を踏みしめ、慎重に歩みを進めていた。

だが何故だろうか。

足を一步前へ出す度に、全身が重くなっていく。視界も徐々に狭まってきていくようだ。足取りさえも覚束無くなっている。

気が付くと私は、咲き誇っている花々へ顔を埋めるよじじて、地面に倒れ込んでいた。

全身に力が入らない。それに起き上がりたいと氣持ちも、何故か全く湧いてはこなかつた。

（あー、このまま寝ちゃおうかな（ああ）

いろいろと面倒くさい。大体いつもやつて、考えること 자체が面倒

だ。それにこの体勢も、何だか妙に心地良い感じだし。

私は柔らかいクッションへ身を委ね、そのまま眠りに入ろうと目を閉じたのだが。

「やはり人間か」

頭上で声が聞こえてきた。

第39話 悪夢（前書き）

第4章 追跡者2（ルティナ編）

炎。

辺り一面、火の海だった。

幼いあたしがその中を彷徨つてている。

(お父さん、お母さん……何処?)

あたしは何度も瓦礫につまずき、充満している煙で噎せ返りながらも、両親の姿を探し求めていた。

その最中、破片が何かに引っ掛けたのだろう。既に片方の靴が脱げ、足の裏も血だらけになっていた。

歩く度に痛みも伴ってきた。だがあたしは、沸き上がってくる不安感とともに、小さな身体で必死に耐え続けている。

しばらくすると、煙の隙間から黒い影が姿を現してきた。  
少し浅黒い日焼けした肌に、漆黒の流れるよつた長髪。彫りの深い端整な横顔。

見知った顔だ。

ゼリュー。

一人心細かつたあたしは安堵して、その男に駆け寄らうとした。が、ここで異変に気付く。

彼はそこへ佇んだまま、足元をじっと凝視していたのだ。

視線の先を何気なく辿つたあたしは、それが視界に入った途端、足を止めていた。

そこには折り重なるように倒れている、両親の姿があつた。側にいる彼の指先からは、滴り落ちる赤い液体。

一体何が起こっているのか分からなかつた。ただ頭が混乱して、そこで制止しているだけだ。

だが気付いてしまつた。

ヤツの背に、黒い大きな翼が生えていることを。

(――魔物――?)

魔物なら見たことがあった。行商人である父の雇つた護衛術士があたしたちの目の前で戦つていたからだ。

それらは全てヒトとは違う、異形の姿をしていた。そして人間に変化する魔物がいることも、以前から話には聞いていた。

ゼリューはヒトのような容姿をしていた。しかし人間には翼が生えていない。

その上『人間』だつた頃にはなかつた、刺青のような模様が、頬

付近に浮かび上がっている。

不意にヤツが、ゆっくりとこちらに顔を向けた。

真紅の双眸。

今までに見たことのない、射貫くような冷たい瞳。

いつも優しく微笑みかけてくれる、そんな眼差しではない。  
それ以外を、あたしは知らない。

目があつた途端、あたしは急に恐ろしくなった。思わず後ろへ身を動かしていた。しかし落ちていた瓦礫に足を取られ、転んでしまう。

この場から逃げ出したかった。だが身体は動いてくれない。  
そこには両親の姿が見える。もう動かないであろうことは、幼いあたしにも直感で分かっていた。

それをやつたのは誰だ。

殺したのは誰だ。村を焼いたのは誰だ。

……誰だ……誰だ……。

「つー? ぐ……つ」

熱い……。

……痛い!

あたしは声にならない悲鳴を上げながら、左眼を押えてその場

へ蹲っていた。何か異物のようなものが暴れ出し、そこから強引に這い出してこよつとでもしているかのようだった。

……助けて。

痛いよ。

お父さん、お母さん。

先程の光景が浮かび上がつてくる。  
これはきっと夢だ。悪い夢だ。

目が覚めれば、そこにはいつものように両親が居る。  
あたしの頭を撫でながら「もう大丈夫だよ」「お父さんたちが居るから、安心していいんだよ」と言ってくれる。

気付いた時あたしは、両手首を強い力で押さえ込まれていた。はつきりしない頭で、それを眺めていた。

痛みと熱さで意識が朦朧としている。

虚構と現実の認識が曖昧になっていた。視界も真っ赤に染まっていた。

だが視線は、手首を掴んでいる腕に傾けられていた。  
それを辿るかのよう、ゆっくりと顔を上げる。

殺したのは誰だ。

村を焼いたのは　。

「……………？」

強い力で揺り動かされたあたしは、突然現実に引き戻された。  
「もう出発する時間なのよ」

目の前には覗き込んでいる彼女　エリスの顔があつた。  
あたしは左眼を押さえながら、むくりと起き上がる。手の平に当たっているのは、いつもの感触。

「ちょっと、あんたたちもほら、わっさと起きなさい」

彼女は直ぐに場所移動をすると、狭いソファーで折り重なるように、仰向けて寝ている二人のことも起こしにかかっている。

だが一人　アレックスとエドは、強く揺さぶられていても、一向に起きる気配がなかつた。

一体どんな夢を見ているのか。二人とも幸せそうな顔でスヤスヤと、気持ち良さそうに熟睡していた。全く呑気な奴らだ。

エリスが揺すっていた手を、ぴたりと止める。そして息を静かに吸い込み、深く吐き出したかと思つた瞬間。

「はっ……」「  
ドゴッ……！」

気合いを入れるかのよつた掛け声とともに、二人の顔面へ両拳を垂直に、勢いよく振り下ろしたのである。

流石のあたしでも、その光景には目を疑っていた。  
何故なら彼女の正拳突きが、素人にしてはかなり綺麗に決まつていたからだ。

「いや！……勿論、そんな理由ではなく。

彼女は何処にでもいるような、普通の少女にしか見えない。乱暴な行動を起こすとは思えないほど、外見上では十代半ばくらいの、「ごく平凡な少女だ。

「おい、どんな起こし方をしているんだ。二人とも鼻から流血しているぞ！」

「あら、手っ取り早く目覚めさせるには、この方法が一番効果的な よ。

故郷ではこのやり方で、なかなか起きてくれない父を毎朝起こして いたし。

でもシーツも汚れちゃうから、毎日の洗濯が大変なのよね

振り向いたエリスはにこやかな表情で、平然とそんなことを言つ てきた。

これでは娘に起こされる父親のほうも、毎日が災難だ。永遠に目 覚めなかつたらどうする というよつたことを、彼女は考えたこ とがないのだろうか。

（てことはまさか、あたしもさつき目覚めていなかつたなら……）

よつやく田を覚ました彼らを眺めながら、まだぼんやりしたままの頭で考える。

(それにしても)

あたしは隣にいるエリスを横目で一瞥した。彼女は先程から術士たちの集まっている人混みを、物珍しそうに眺めていた。

(あんなに討伐隊への参加を嫌がっていたわりには、時間になつたらきつちりと起こしていたな)

昼間魔物の結界が破壊された時、あたしはこの三人の誰かがやつたのだと確信した。

あの中には、あたしと戦つていた魔物二匹以外には、彼女たちしかいない。結界を破壊する瞬間は見ていなかつたが、それに間違いはないだろう。

だからあたしは無理矢理、三人を討伐隊に参加させることにした。我ながら多少強引な方法だつたとは思うが、今のあたしには手段を選んでいる余裕がなかつた。

討伐は朝晩、三交替での編制となる。今回現れたモンスター・ミストが、それほど大きなものだということだ。

あたしたちの出発は夕方だつた。本当ならば、魔物の行動力が比較的鈍る「朝」の出陣が良かつたが、こちらには選択権がないため仕方がない。

それまでの間に少し時間があつたため、あたしたちは宿屋で仮眠を取つていた。

宿はこの前、ギルドに紹介してもらつた、喫茶店のマスターが兼営している所だ。他の宿屋は満室だつたが、そこは店の看板を目立つ場所へは掲げていないためか、運良く空き室があつた。

「ねえ、ルティナ」

あたしが腕を組んでじっと考え事をしていると、エリスが不意に話し掛けってきた。

「さつき何だか酷くうなされていたようだっただけど、もう平氣なの？」

「さつき？……ああ、それなら大丈夫だ。心配はいらない」

「そう。なら良かった」

エリスは心配そうな表情から一転すると、いつもの少女らしい柔らかな笑顔に戻つていった。

彼女は世話好きなのか、ただお人好しなだけなのか。どちらのだろう。

いや、余計な詮索は止めておこう。

あたしはこれから彼女たちを利用し、ヤツの元へと乗り込まなければならぬ。

ヤツにはいろいろと訊きたいことがあつたし、最終的には戦うことになるはずだ。

上位クラスとは真正面から殺り合つたことはなかつたが、勝てる見込みは皆無に等しかつた。しかしつかは対峙しなければならない相手もある。

だからなのだろう。

先程あんな夢を見てしまつたのは。

「だからね、いくら私が防御術を使えたとしても、あの中での戦うことは初心者の私では難しいのよ」

エリスがアレックスに対して、何やら言い聞かせているような声が聞こえてきた。途中の会話を聞いてはいなかつたが、何か揉めているのか。

あたしはここで口を挟んだ。

「あんたたちは、戦闘に参加しなくていい」

その言葉を聞いたエリスは、大きな翠瞳を更に見開き、じらりと凝視してきた。その表情から「何で？？」という問い掛けが聞こえてきそうだ。

やはり彼女は自分たちが討伐隊に参加する、当初の目的を忘れているらしい。これはどうやら、それを思い出させる必要がありそうだ。

しかし脇からHドガ、陽気な音楽を鳴らしながら言つてくる。

「僕とエリスさんは、結界術を破ることができませんよ～」

その言葉の意味を理解するのに、数秒の刻ときを要した。

「おい、結界は三人とも破壊できるんじゃなかつたのか？」

あたしの問い掛けに、エリスも即座に否定する。

サラはあの時に言つていた。

『結界を破壊できるのは、その三人』だと。

だがよく考えてみれば、奴は魔物だ。あたしに對して真実を言つとは限らない。或いはその情報 자체が、何らかの罠だという可能性もあった。

何故そのことに今まで気づきもしなかつたのか。魔物ハンターである、このあたしが。

本来なら魔物の言葉など、耳を貸さないが普通だ。その時の人たちは、ヤツを倒すことだけで頭が一杯になり、正常な判断力が鈍っていたのかもしれない。

だが今更そんなことを考えていても仕方がなかつた。  
もう後戻りはできない。それにあたしには、どうしても成し遂げ  
なければならないことがある。

例えそれが罷だとしても、前へ進むしかないのだ。

## 第41話 魔物の霧1

「ルティナよ。俺たちはいつまでコソ泥のよつにコソコソと、隠れていなければならぬのだ？」

「あと少しの辛抱だ。目的地は直ぐそこだからな」

あたしは辺りを警戒しながら、アレックスの質問に答えた。  
今のおたしは彼と行動を共にしている。他の二人のことは、既に見失っていた。

最初はこの三人の中で、誰か一人でも目的地へ辿り着くことが出来れば良いと考えていた。

しかしそれはあたしの思い違いで、結界を破壊できるのは彼だけだと言う。だから門が開く直前で、咄嗟にアレックスの腕を掴み、手を離さなかつた。

何故なら三人の中で一番信用できないのが、この男だつたからだ。それは今までの彼らの会話を聞いていれば分かる。

そしてあたしの勘は、やはり正しかつたらしい。

外へ出たと同時に彼は率先して、侵入しようとしている魔物と戦い始めていた。

それだけであれば、まだ良かつたのだが。

放たれる魔物の術を、何もせずに跳ね返していた。  
無論、術文も精霊石も使用せずに、だ。

長年魔物ハンターをやっているあたしだが、このような人間に出会ったのは初めてだつた。

もしあたしが彼の能力を知らなかつたなら　そしてこの左眼が

なかつたならば、真っ先に「魔物」だと疑つていたはずだ。事実、周囲で戦つていた術士たちがそれを目撃した途端、一斉にこぢらへくも攻撃を仕掛けってきた。

「しかしこれくらいの怪我、俺には根性でどうとでもなるのだがな」「脂汗を流しながら何を言つてゐる。瘦せ我慢も程々にしないと、後で痛い目みるぞ」

左腕上腕部を押さえながら、汗を額に滲ませてゐる彼を横目で睨み付けた。

術士たちが攻撃を放つた際、その中の光の矢がアレックスの肩を掠つたのだ。

そこは防具に覆われていない『継ぎ田』と言われる部分で、術は丁度そこを通りていつたらしい。

破れた服の下には青痣が覗いており、大きく腫れ上がつてゐた。上から軽く押しただけで彼の顔は歪み、その感触で骨が折られていることに気が付いたのだ。

しかしあの時、術は確かに腕を掠つてゐた。直撃はしていない。それはあたし自身が証人だ。

だが何故か皮膚は裂けずに、中の骨だけが綺麗に折られてゐる。

彼の話では「人間の術に掛かりやすい体質になつてゐる」らしい。世の中にはそういう人間も確かにいるが、掠つただけでそこまでの効果があるのだろうか。とはいへ「結界を破壊できる能力」も聞いたことがなかつたから、強ち嘘ではないのかも知れないが。

「う……むむむう……これしきのこと悔しいが、俺もまだまだ修行に精進せねばなるまいな」

その辺に落ちていた棒きれで固定してゐる腕を押さえ込みながら、

アレックスは悔しそうに顔を歪ませていた。

しかしそれもつかの間。腰に携えている剣を直ぐに引き抜くと、右腕を高々と掲げて宣言する。

「だが！ 僕は諦めないぞ。

例え腕一本へし折られていたとしても、奴らを倒してみせる！

それが精霊に課せられた、英雄としての僕の使命だつ！！」

「待て待て待て。その前に、誰かが来るようだ」

あたしは今にも、勢いで飛び出そうとしている彼の襟首を捕まえると、そのまま奥へ引き摺り戻した。そして後ろから口を塞ぎながら、身体を羽交い締めにする。

ここで誰かに見つかるのは面倒だった。先程のような事態は、成るべくななら避けたい。

今回あたしが討伐隊に参加した目的は『モンスター・ミスト』の中に入るため、そしてヤツを倒すためだ。余計な戦闘で、体力や時間を取りたくないのだ。

程なくして、金属の触れ合う音と、人の話し声のようなものが聞こえてきた。

「この付近で、人間に変化した奴も潜んでいるらしいぞ」

「ああ。本人は人間のつもりらしいが、どうやら人間離れした容姿の奴らしい」

（人間離れ……）

あたしは腕の中で抜け出そうと必死に藻掻いている、アレックスの後頭部を見上げた。

確かにこの顔立ちならば、人間離れしているとは言えなくもないが

その声主たちは、互いに短い会話を交わし終えると、それぞれ相手にしている魔物と戦いながら左右へ散つていった。  
(もう既に、変な噂が広まっているようだな)

このような場所であっても、術士同士で互いの状況を交換し合い、戦闘を進めていくことも珍しくはない。無論、余裕のある状態でなければ出来ないことではあるが。

「いきなり押さえ込んでくるとは、非道いではないかっ！」  
あたしの腕からよつやく抜け出せたアレックスは、早速抗議をしてきた。

あたしは着ている道着の内ポケットから、光属性精霊石と『精術カード』を取り出した。そして石を重ね合わせ、意識を瞬間に集中させる。

精霊名を唱えると同時にカードが消え、代わりに光球がひとつだけ現れた。

「ほら、目的地が見えているぞ。すぐそこだ」

彼の抗議を軽く無視したあたしは、浮遊させているソレを前へ掲げてみせた。アレックスは「む… そうか」と呟きながら、釣られてそちらを見遣る。

前方一面、広い範囲にまで広がっている白濁色の濃い霧。木々の隙間から光球に反射し、その姿をくっきりと浮かび上がらせていた。それがモンスター・ミストだ。

あたしはこの方向から、ずっと強いエネルギーを感じていた。近づくにつれ、あたしの眼の疼きも徐々に強くなっている。

下位クラスの魔物が集まつてくるのは、その影響であり本能的なものだ。

とはいって、この付近で魔物が彷徨いている様子はなかった。ここへ辿り着く前に、投入されている他の術士たちに狩られているからだ。

それに見張りの騎士も居ないようだ。もつとも、今まで見張りを置いていなかつたから、今回も居ないだろ?とは思っていたが。周囲では術士が戦つており、この場所へ近付く魔物やヒトも殆どいない。仮にいたとしても、両者とも霧の中へは入ることができない。

いのだから、余計な人員を割いてまで見張りを置く必要がないのだ。

「成る程。これが例の何とかミストとかいうやつか」  
アレックスはモンスター・ミストの前へ立つとしばらく観察して  
いたが、おもむろに右手を前へ突き出した。

するとそれを中心にして、霧は逃げるように外側へ弾かれていく。

その部分だけ穴が空くような形になつた。昼間戦つた魔物の結界  
は完全に破壊できたが、どうやらこの場合、そこまでには到つてい  
ないようだ。

だが中へは入れそ�だつた。それだけでもあたしには十分役に立  
つ。目的はあくまでも、中に居るヤツを倒すことだけだからだ。

と、背後の森から爆発音のようなものが聞こえてきた。  
かなり近い。何処かの術士が付近で、戦つてているのかもしない。

「よし、俺も加勢に行くぞ！」

「つて、待ていッ！ こっちの仕事のほうが最優先だ！！！」

同じように音を聞き付けたアレックスが、早速駆け出そうとした  
が、寸前で押しとどめた。なんて血の氣の多い男だろう。

「む、仕事だと？ 僕に何をさせるつもりだ」「簡単なことだ。そこから後ろへ移動してみてくれ  
？」

彼は言われるまま素直に移動した。丁度霧の中へ身体ごと、突つ

込むような格好になる。

案の定それは彼を避けるかのように、周囲へ弾かれていった。先程手を突っ込んだ時よりも、遙かに大きな穴が空く。

「じゃあ、あんたはしばらくここにいてくれ。そうすれば直に、他の二人とも合流できるはずだ」

「何？ 君はどうする気だ」

「あたしは先に行っている」

「何だと！？ ならば俺も同行するぞ！」

「いや、今は大丈夫だ。あんたはあの一人を待つてくれ」

「しかし……俺も君の手伝いをしたいのだ。それが果たさねばならない、英雄としての義務もあるからな」

アレックスは真剣な表情でじつとこちらを見据えてきたが、直ぐに視線を逸らすと大袈裟な溜息を吐いた。

「とはいえ今の俺は、遅れてやつてくる仲間を待たなければならぬ。英雄としての責務と、大切な仲間を待つという役目。

ぐぬぬぬう……ここで苦渋の選択を迫られることになろうとは……」

彼は右手に握り拳を作ると、それに向かって心底悔しそうに顔を歪ませていた。

しばらくこの男と行動を共にして分かつたことだが、考え方や動作の一つ一つが、どうも大袈裟すぎるようだ。

あたしは呆れつつも、彼に提案した。

「だったら一人と合流してから、あたしの後を追つてくれればいいだろ」「うう」

「おおっ！ 成る程、その手があつたかっ！！！」

確かにそれならば、両方の実現が可能だ。

うむ、流石はルティナだ。実に合理的な考え方だ！」

アレックスは急に何かに目覚めたかのように、顔を輝かせていた。

しかしこの男と長時間話していると、何故か疲れる……。

森のほうでは、再び爆発音が聞こえてきた。

今、他の術士に見つかるのはまずい。こんな場所で、ぐずぐずしている時間はない。  
あたしは急いで、穴の空いた結界へ入るつもりしたのだが。

「おおっ！ 君たち、ようやく来てくれたか」  
アレックスの嬉しそうな声がしたのと同時に、バタバタと複数の激しい足音も聞こえてきた。

(ー もう来ちまつたのか)

正直、あたしはあの二人がこれほど早く、この場所まで辿り着けるとは思っていなかった。

村からここまではそう遠くない距離だが、乱戦の中をかいぐぐらなければならぬ。だからどうしても、迂回しなければならなかつたのだ。

振り向けば少し後方の暗がりで、複数の光がこちらへ近付いてくるところだった。前方には激しく動いている光と、後方には複数の光球が見えた。

それに照らし出されている顔を見てみれば、何故か必死な形相のエドを先頭に、続いてエリスもこちらへ駆けてくる。

だがその背後には

「フォール・デュー・ヴァイン」

「強硬風拳！」

術文を唱え、あたしは前へ飛び出していた。

あたしの術を纏つた拳を、奴は一本の短剣で真正面から受け止める。奴の踏ん張っている両足が、放たれた重い拳により地面へめり込んでいく。

「ちいっ、もう少しで殺れたものを！」

相手が忌々しそうに舌打ちをした時、

「おい、君たち、何処へ行くのだ！？」

アレックスが何事か叫んでいる声が聞こえてきた。

敵から意識を逸らさずに横目で見ると、駆けてきた二人の背中が霧の中へと、消えていくところだった。直後、彼もまた彼女たちを追つていく。

アレックスという「解錠器具」を失った霧は、徐々にそこも侵食しつつあった。再び結界が閉じられようとしているのだ。

このままではまずい。

あたしは咄嗟の判断で相手を押しのけると、後方へ大きく飛んでいた。

一面の白濁色。

全身に纏わり付くような、ヒンヤリとした空氣。

ここにあるのはそれだけだ。

周囲は何も見えず、視界が非常に悪い。方向感覚もまるで役に立たない。

加えてこの中には、強い気配が充満していた。

それは外にいた時から感じていた気配。無論、あたしの眼もずっと疼いている。

そのせいで、それ以外の「気」を感じ取ることもできなかつた。これでは一緒に入ってきた敵が何処に潜んでいるのかさえ、探ることも難しいだろう。

それにもう一つ、気がかりなこともある。

実は結界が閉じる寸前で、正体不明の黒い影を目撃していたのだ。

攻撃から逃れるために後ろを振り返った時、それらが数体ほど中に飛び込んできたのが見えた。その時には駆けだしていたから遠くて確かめられなかつたが、あたしたちの他にも何者が入り込んでいる。

だがここがモンスター・ミストの中である以上、いつまでもこの場所で立ち止まっているわけにはいかなかつた。それらの問題は一先ず置いておくとして、今は慎重に歩みを進めるしかない。

一体どのくらいの時が経つただろうか。時計を持つていれば確認できるのだろうが、あたしは時間に縛られないほうだから、普段から持ち歩かない主義だ。

それでもしばらく手探りで歩いていたのだが、不意に微かな音が聞こえてきた。立ち止まって耳を澄ませてみれば、それは何かのメロディーのようでもある。

(敵？……罠か？)

「ここはヤツの空間。

当然あたしたちが中へ入り込んだことも、既に把握しているはず。とはいっても、変わらない風景の中を歩くのにも、流石に飽きてきたところだ。例え罠だとしても、ここから抜け出せるのであれば何でも良い。

しばらくすると前方からは、明かりも見えてくる。点滅して光っているようだ。どうやら音はその方向から聞こえてくるらしい。

徐々に視界も鮮明になってきた。

そこには辺り一面、緑色の景色が広がっていた。

霧もいつの間にか晴れていて、あたしは少し拓けた場所に立つていた。

足下には膝丈ほどの草が、地面を覆い隠すかのように生えている。この場を囲むように、鬱蒼と生い茂っている木々も立ち並んでいた。周囲をざっと見回しただけでも、季節感が狂っているのが分かる。

上を見上げてみると、青空も広がっていた。季節ばかりか、時間までも狂つていやがる。

「JUJUはやはり、結界の中なのだ。

「あ、ルティナさんです～」

「何？ ルティナ？？」

声主たちを見れば、Hドとアレックスがそこに座た。

Hドは木に凭れるよつにして豎琴を弾き、アレックスはその前でJUJUに向かって立つていた。

「おお、君ともよつやく出会えたな」

「おい、あんたたち、こんな場所で何をしていい」

あたしは訝しんで、彼らに近づいていった。

「僕はいつの間にか～エリスさんとはぐれてしまい～一時間以上も白い場所を～彷徨ついていたのですが～ようやくそこから～抜け出せたのです～。

本当はそのまま～エリスさんを探したかったのですが～方向音痴のエリスさんのことなので～行き違いにでもなつたら大変ですしそのようなこともあって～もしかしたら近くに～いるかも知れないと思いつ～音楽と灯りで導く～ことを～思いついたのです～。そうしたら

～

「俺も導かれて、JUJUへやつてきたといつ訳なのだ。やはり君も、そうなのだろ？？」

「あれ、ルティナさん～どうされました？」

あたしはその場に四肢をついていた。突然、極度な疲労感に襲われてしまったのだ。

「それにしても～まさかアレックスさんとルティナさんが～近くにいるなんて～知りませんでした～」

「つむ。あとはエリスだけだが、しかし……」

「そうですね~。

先程のアレックスさんの話だと、エリスさんはどうやら無事なようなので、一先ず安心をしているのですが、しかしエリスさんの方向音痴は、筋金入りですから。もしかしたら、また隣村に行くつてしまわれているかも、されません~」

「隣村?」

あたしは地面から顔を上げて、エドを見上げた。

「ここはモンスター・ミストの中だ、外には簡単に出られない。あなたとエリスは結界を破れないのだろう?」

「はい、破れるのはアレックスさんだけです~。

でも、モンスター・ミストの中とは一体、どうここに」となのでしょうか?」

彼はあたしの問いに答えると、吃驚した表情で首を傾げている。  
「まさか、気付いていなかつたのか? あんたたちは走つて、この中へ入つて来たんだぞ」

「そうだ、エド。確かに君たちは俺の呼びかけにも全く答えず、横を素通りしてこの中へと入つていった。俺はそれを追いかけてきたのだ」

「えええええ! ? 本当にですか? ? ?

僕は、敵に追いかけられて、命からがら逃げていたのですが、その時に隠れられそうな場所を、何とか見つけ、夢中でその中へ飛び込んで行きました。

敵から逃げるのに必死で、アレックスさんたちのことなど、全く気が付かなかつたのです~」

彼は裏返つた声を上げ、更に驚いていた。この様子では本当に、

気付いてなさそうだ。

「それにしてもこゝが～モンスター・リストの中なのですね～。では～あの白い場所も～霧の中だったという訳ですか～。納得ですか～エドは周辺を感慨深げに見回すと、そんな感想を述べた。

「となると～昼間の結界とは違つて～桁違いの規模ですね～。このような空間を～創り出すことができるとは～一体どのようない魔物なのでしょうか～。

ルティナさんは～知つているのですか～？」

「……ああ

あたしは短い返事をするとそのまま立ち上がり、歩き出す。

先程霧の中を抜けた途端、この方角で更に強烈な気配を感じていた。

場所を移動する度に、左眼の疼きも段々と非道くなつていいくのだ。恐らくそこにヤツがいる。あたしは確信していた。

「ルティナさん～待つてください～。突然、何処へ行かれるつもりですか～？」  
「二人が走つてあたしを追いかけてくる。

彼らにはこの気配が分からぬ。何故なら、人間である彼らには感じ取ることのできない、魔物特有のものだからだ。  
雌の放つフェロモンに引き寄せられる生殖時の昆虫のように、特に下位クラスの魔物はそれに惹かれやすい。

あたしは彼らが近づいてくるのを見ると、足を止めた。

「あんたたちはエリスを見つけたら、直ぐにでも外へ出るんだ」

そして一呼吸置くと、続けて言った。

「この先には元凶である、強敵が潜んでいる。そいつを倒すのはあたしの役目だ。あんたたちは必要ない」

「む、それは何故だ？ 僕も君と一緒に戦うぞ。

モンスター何とかという、魔物を引き寄せる得体の知れない霧から

そしてその原因である敵から、周囲の人々を守るのだ。  
それを途中で放り出すことなど、英雄であるこの俺に出来るはずがない！」

拳を振り上げ、熱の籠もつた瞳であたしを見据えてきた。

そういえば彼は瞬間「世の人々を助けたいと願う…」などと、あたしのことでの妙なことを言っていたような気がする。

「あんたは何か誤解をしているようだが、あたしは他人を守りたい  
だと… 生憎とそのような、偽善的な正義感は持ち合わせていな  
い。

ただヤツに個人的な恨みがあるから、それで倒したいだけだ」

「個人的な恨み、ですか？」

「そうだ。あたしはヤツに両親を殺された。その復讐のためだけに  
動いている。

だからあんたたちの言つような、大層な理由なんて、一切ないんだ

よ

あたしが淡々と話している間の彼らは一様にして、驚きと戸惑い

の表情を浮かべていた。だが構わずに言葉を続ける。

「それにあんたたちと元から馴れ合つ気はないし、一緒に戦つとも

りもない。あたしに仲間なんて必要ない。

アレックス、あんたのことはこの結界を解いた時点で、既に用済みだしな

「

もしかしたら失望させたかもしれない。

だがそれでいい。

そのほうが、こちらとしても好都合だ。このまま一緒に行動しても、彼らはあたしにとつて、邪魔な存在にしかならない。

ややしてから彼は難しい表情を崩さず、おもむろに口を開いた。

「例えそうであつても、君は俺たちの仲間だ。

その仲間が成し遂げようとしていることを手助けしないで、何が『仲間』と言えようか。

いざといつ時に窮地を救うのが、真の『パーティ（仲間）』というものであろう

「おい待て。あたしの話を聞いていなかつたのか？  
いつからあたしが、あんたたちの仲間になつたんだよ」

眉間に皺を寄せ、真剣な表情でおかしなことを言つ男だ。

「む、違うのか？

『パーティ』とは共に協力し助け合い、深い絆で結ばれた信頼し得る、唯一無一の存在なのではないのか？」

小首を傾げながら不思議そうな表情で、こちらを見詰め返してくるアレックス。それに対してあたしは重い何かが、全身へ徐々にのし掛かってくるような、そんな感覚を憶える。

「それにこの何とかミストとかいう霧を発生させている元凶が、ここに居る魔物なのだろう？

ならば仲間の窮地が救え、尚且つ英雄としての役目も果たせる。

これで全てが、丸く解決できるのだ！」

アレックスは力強くそう言つと、右手の人差し指をあさつての方

向へ天高く掲げてみせた。

……何なのだろう。今までに味わつたことのない、この奇妙な疲労感は。

と、ここで、風の切る音を微かに感じたあたしは、考えるより先に身体を動かしていた。

無数の黒い閃光が、さつきまであたしの居た場所を通り過ぎていく。その先は森のような場所になつていて、そこに生えている数本の樹木を刻んでいった。

飛んできた方向に顔を向けてみる。

するとそこには、昼間戦つた黒装束の男。……いや、今は魔物の姿に戻つている。

魔物はこちらの様子を窺うように、ゆっくりと近づいてきた。

「やはり貴様とは、縁があるようだな」

奴は懐から短剣を一本取り出した。刀身が全般的にスパークしているようだ。それ自体に術を掛けたらしい。

あたしは溜息をひとつ吐いた。

コイツもあたしと同様、先程の演奏に導かれてきたのだろう。

「では俺が、君の楯となろう」

アレックスは腰に下げる鞘から剣を引き抜くと、あたしの前に立ち塞がつてきた。

「そんな！ アレックスさん～無茶です～。怪我しているんですよ」

「

エドが悲鳴にも似た声を上げる。

アレックスは左腕を骨折し、まともに使える状態ではない。

しかし今は先程のように、痛がつていい様子はなかつた。恐らく怪我をしてから大分時間が経過しているため、感覚 자체が麻痺しているのだ。

「俺ならば心配はいらない。

ルティナ、君は君の成すべきことをするのだ。そのための楯ならば、俺は喜んでなう」

「でもアレックスさん～それは自殺行為といつものですよ～」

「はつはつはつ、下手な冗談だぞ、エド。俺は無論、最初から死ぬ気などない。

例え腕一本使えずとも、君たちの期待に応え、立派に努めを果たしてみせるつもりなのだ！」

アレックスはエドの忠告を軽く一蹴すると、片手で長剣を掲げ、闘志を辺りに撒き散らしながら胸を張つていた。

しかし。

(「コイツ、分かって言つていいのか？）

あたしは半眼で彼を見詰める。

現実問題として、H.Dの言つてゐることが正論だ。この状態で戦つたとしても、恐らく足止めにさえならない。敵の能力を考えるならば、間違いなく瞬殺だらう。

本当にコイツは『顔だけ熱血無鉄砲バカ』だ。

「貴様だけでは話にならん。俺はその女とも戦いたいのだがな」  
そんな彼を尻目に、敵はこちらへ視線を向けながら言つてきた。  
どうやら相手は、こちらも一緒に倒すつもりらしい。やはりこれ  
以上余計な時間を取らせないためにも、自分が前へ出るしかないだ  
ら。

そう判断したあたしは、意識を集中させるかのように深々と息を  
吐くと、アレックスの前へおもむろに一步を踏み出した。それを見  
た彼が、慌てた様子で更に前へ飛び出してくる。

「ルティナ。ここは俺に任せて、君は先を急ぐのだ。君は自分の成  
すべきことを、最優先させるのだ！」

あたしの前へ右手を広げ、再び肩越しから熱い眼差しを向けてく  
る。

「この男、自分があたしの邪魔になつてこることが分からぬのか?  
あたしは苛立つ気持ちを何とか抑えながら、諭すように静かな口  
調で言葉を発した。

「……アイツはあたしも指名している。あんただけでは役不足なん  
だとさ」

「やうですよ~アレックスさん~。相手は~ルティナさんとも戦い  
たいのです~」

「む……だがしかし」

「あたしなら大丈夫だ。それともあんた、『仲間』であるあたしが  
信じられないのかい?」

「仲間？」

「さつきあなたは『パーティ（仲間）』とは、信頼し得る唯一無二の存在だ』とか言つていただけ。今の行動は、その言葉と矛盾しているぞ」

「む……むむむ……？？？」

彼は途端に、苦悶の表情を浮かべた。

「あんたは今、怪我を負つてゐる。その状態で敵とまともに渡り合えるとは思えない。

確かにあたしの目的やあんたの役目とやらも大事だろうが、それは目の前の敵を倒してからでも遅くはないはずだ。  
だから今は『仲間』である、このあたしを信頼してくれ

「そうですよ～アレックスさん～。ここは『仲間』であるルティナさんを～頼るべきです～。

それに～ディーンさんは信頼して～ルティナさんは信頼しないつもりですか～？

二人とも～同じパーティ（仲間）じゃありませんか～

アレックスは突然何かに気付いたかのように、目を見開いてエドを凝視した。そして直ぐに苦悶の表情に戻ると。

「むむむ……正しく……。

『仲間（パーティ）』とは即ち、信頼関係。

それを失うといつことは、最早パーティは、その機能を果たせなくなるという意味でもある

アレックスは何やら、難しい顔付きのまま咳き始めた。

そして程なくして

「うむつー！俺はようやく目が覚めたぞー！」

その碧い瞳に田映い光を宿しながら、彼はあたしの手を力強く掴んだ。

「やつだ。このような時だからこそ、仲間を信頼せねばならぬのだ。君は仲間である俺のことを、これほどまでに想つていてるところに……なのに俺は君のことを……済まなかつた。ここは君に任せるべきだつたな」

「あ……あ、分かればいいんだ」

あたしは近づいてくる、一点の曇りのない澄んだ碧瞳から顔を背ける。無駄に綺麗な容貌は、何となく苦手だ。

本当のことを語つとあたしも、アレックスがどうなるかと知つたことではなかつた。それにいつもなら「邪魔だ、そこを退け！..」の一言だけで済むところだ。

しかし彼を相手にしていると、怒るのが何故か馬鹿らしくなつてくる。

だから適当な御託を並べてみたのだが、まさかこんなつまらない言葉で、あつさり納得するとは思わなかつた。なんて単純な男だ。

「……貴様ら、さつきから何をコソコソとやつている

声の主を見てみれば、あたしよりかなり苛立つた顔付きをしていた。それなのに会話が終わるのを待っていたとは、魔物のくせに儀な奴。

「全員まとめてかかつてこいと言つてているんだ。そのほうがいいとしても余計な手間が省けるし、仕事も早く片付けられるからな」

どうやらコイツも『危険』なこの場所から、直ぐにでも立ち去り

たいらしい。あたしも精神力で今の状態を何とか保つてはいるが、長時間は持たないだろ？

「偉い自信だな。だが先鋒はあたしだ」「ほう？ 他の二人は介入しないのか」「あんたがあたしを指名したんじゃなかつたのかい」「うむ。それに一対三の戦いになると不公平であり、術士としての誇りをも穢すことになつてしまふからな」

「…………」

あたしはアレックスを無視し、無言で目の前の敵を睨み付けた。戦闘時において冷静さを欠き、尚且つそれを相手に悟られてしまつたら、確実にこちらが負けるだらう。

「ところで、もう一匹はどうしたんだ？ 姿が見えないよつだが」「ああ、ボブのことか。まあ、どうだったかな」「（何かを企んでいるのか？）

その表情を見ても、真意を量ることができない。それに蔓延する気配が邪魔をしていて、周囲を探ることも難しい。

だが条件なら相手も同じ。  
ならば。

あたしは左眼帯に右手を添え、同時に左拳も強く握り締めた。

しかしとしても、戦闘を長引かせたくはなかつた。それに余計な術力も使いたくない。

もし敵が何かを企んでいたとしたら、実行させる前にこちらから

仕掛ける！

あたしは相手のほうへ真っ直ぐに向かって、地面を蹴った。

「フォール・デュー・ワイン  
強硬風拳！」

左拳に精靈力を注ぐ。

相手がそれに対してもう一度口角を上げながら、いつものように身構えているのが目に入った。

この術は奴の目の前で何度も放ち、その度に受け流されている。敵にとつても「何を今更」という感じだろう。

あたしは近づくにつれて徐々に術力を上げていった。

そして拳を放つ直前で、左眼を『解放』した。

「！ 貴様、その眼は！？」

奴は驚きの声を上げたがそれには構わず、あたしは左拳へ集中的に術力を注ぎ続けている。

敵は次の行動へ移そうと身体を動かした。

が、それは既に計算済みだった。だからこそ、このタイミングでソレを外したのだ。

あたしは奴の鳩尾へ向かつて拳を叩き付ける。その手前では、一本の短剣をクロスさせるように<sup>ガード</sup>防御していた。  
いつもならこの攻撃は通用しない。

しかし。

術が施してあり、通常より強固なはずの剣中心部は、拳に纏う風の威力で粉々に砕け散つていた。

耳元では、まるで複数の狂犬が激昂しているかのような、唸り声が聞こえていた。自分自身でさえも、その威力に吹き飛ばされそうだった。

当然左拳も、意図しない方向へ持つて行かれる。全身の骨も内側から軋んでいく。身体も引き裂かれそうになる。

だがあたしは辛うじて、それらを押さえ込んでいた。そして奴が次の行動に移す直前で、そこへ叩き付けていた。

たつた一匹の獲物へ群がる獣たち。

周囲の草木をも巻き込んで、一気に激しさを増しながら丸呑みしていく。

「……ぐつ」

あたしはその衝撃に耐えきれず、左眼を眼帯で押さえ付けながら、地面へ顔を擦りつけるかのようにうづくまっていた。

一度に解放したのだ。両手はもとより、全身にさえ力が入らなくなっていた。

しかしそれはほんの一時的なものだと、今までの経験上から知っている。今は貧血のような症状が現れてはいるが、体力や気力と同様でやがて回復する。

あたしは震む右眼を無理矢理細めると、倒れている敵のほうへ顔を向けた。

そこに生えていた草木は、獰猛な獣にでも食い散らかされたかのような痕跡を残し、一本の道筋のようになっていた。

奴の通つた痕だ。<sup>あと</sup>

その終着点。

敵は薙ぎ倒されている木々の間にいるはずだが、ここからでは遠すぎてその姿が見えない。

手応えはあった。土手つ腹に風穴を開けたのも確認している。だが僅かであるが、急所が逸れてしまった。恐らくまだ生きている。

中位クラスであれば体内に宿る精靈力を使い、何れ自己回復をす

るはずだ。

しかし今は動く気配はない。当分の間、起き上がる」とのできないダメージは、受けているだろう。

だがトドメを刺す気にはなれなかつた。

こちらもまだそれだけの回復をしていない。それに今のあたしの目的は、目先の魔物を倒すことでもない。

「ルティナさん……今のは……」

しばらくして掠れるような声に振り向けば、二人が驚愕の表情を浮かべ、呆然とこちらを凝視しているところだつた。

「ルティナさんの片方の眼 紅い……」

(！ やはり、見られていたか)

あたしはその場でしばらく動かなかつた。一人もそれ以上、口を開いてはこない。

予想通りの反応。このような状況には、昔から慣れている。

ようやく力の戻りつつあつたあたしは、深く息を整えると、ややしてからゆっくりと身を起こし始めた。

そして。

「あたしの身体は半人半魔。……半分、魔物の血が流れているのさ

彼らが口を開く前に、あたしは自ら告白していた。

## 第47話 復讐心

「なんと！ 魔物の血が！？」  
驚きの声を上げているアレックスを尻目に、あたしはそのまま踵を返して歩き出した。

「あ、ルティナさん～待つてください～」

「待つのだ、ルティナ！」

彼らは再び、あたしを追いつめようとしている。

「何故、まだついて来る」

「無論、君と同じ目的だ。俺も君の手伝いをするぞ。それが英雄たる俺の使命でもあるからな」

「僕も勿論～何かお役に立てることがあれば～お一人のお手伝いをしたいです～」

あたしは歩みを止め、変わらずに胸を張っている彼らに顔を向けた。

「あんたたち、さつきの話で分かつたんじゃなかつたのか。あたしが本当の仲間ではない、ということを」

彼らは黙り込んだ。しかし直ぐにアレックスが首を傾げ、口を開く。

「君が仲間ではない？ 先程自ら、俺たちの仲間だと宣言したばかりではないか」

「さつきと今とでは状況が違うだろ？ あたしには魔物の血が流れている。つまりあんたたちにとつては、異質な存在だ」

「しかし～ルティナさんは人間にしか見えませんし～僕としては～まだ半信半疑なのですが～」

通常の半魔半人は、母体が魔物だ。つまりその子供の容姿もソレだというのが、一般的だった。

だがたしの場合は母体が人間。生まれてきた容姿も人間と大差ないものだ。ただ外見上で唯一違うところといえば、左右の瞳の色だけだった。

これはヒトから生まれてきたあたしだけの、特殊な身体のようだ。例え半魔半人であつたとしても、左右の瞳の色は、同色で生まれてくるのが普通だからだ。

「疑うのであれば、疑えばいい。だがたしは嘘を付いてはいない。だから仲間にはならない」

「ですが、もし魔物の胎内から生誕したとしても、僕たちと同じヒトの血も入っていますし」

「うむ。それに俺は一度言った言葉を、後から撤回などしない。例え君の身体に魔物の血が流れていたとしても、俺は今でも君のことを、大切な仲間だと思っている。だから安心してくれ」

「安心も何も……!? ……くつ」

反論しようとしたあたしだつたが、その途中で地面へ蹲つていた。

再び力の抜けるような感覚。

先程、自身の強大な能力を解放した。そのせいで少し、外部からの『毒』の侵入を許してしまったのだ。  
加えてこの能力は今でも、不安定なままだった。

これを最初に解放したのは、約十二年前。

当時はあたしもまだ普通の子供で、修行も開始していなかつた。

実際、現場に居合わせた師匠に助けられなければ、このように生きていなかつただろう。

だが今あたしは修行を重ね、ある程度の力は付いていた。そのための調整も重ねてきている。

それでもこの能力は、一度に二回が限度。

母体が魔物であれば簡単に制御できるものなのだろうが、人間であるあたしには、修行を積んでいてもこれが精一杯だった。

ヒトの身でありながら、内にある魔族の能力を解放する。つまり精靈力を自ら持つことの出来ない、ヒトの肉体の限界値を超えてしまつということだ。

最初は自身を生んだ母親を恨んだりもしたが、逆に今では感謝をしている。

能力が暴走するということは、限界を超えるということ。ちから限界値を超えるということは、予想外の能力が生まれる確率も高い。上位クラスの魔物を、あたし一人だけで倒せるかもしれない。

とは言つものの、この能力に関しては、あたし自身も熟知しているわけではなかつた。それゆえ、確実に勝てる見込みは皆無だ。しかし例え一欠片であつたとしても、その可能性を取り出すことはできるはずだ。

そのためだけにあたしは今まで生きてきた。

ヤツと戦つのは一度だけ。

その能力さえあれば十分だ。

「ルテイナさん～大丈夫ですか～？ 濃い汗です～。顔色も悪いです～」

「大丈夫だ……問題はない……」

あたしは伸ばされたエドの手を払い除けると、氣力を振り絞つて立ち上がった。

「この程度で立ち止まる」とはできない。

十一年前にあたしを 両親を裏切ったあの男を、決して許さない。

「ルテイナよ、君は何をそんなに独りで頑張っているのだ？」  
「何？」

「両親の敵を討ちたいという気持ちなら、俺にもよく分かるのだ。出来ることならば、俺の両親を殺した敵である憎き『流行病<sup>やまい</sup>』を、俺自らが手を下して抹殺したいと思っているのだぞ！」

「アレックスさん～『流行病（やまい）』は抹殺なんて～できませんよ～」

勢いよく拳を振り上げたアレックスに対して、エドは即座に突っ込んだ。

「む……む無論だ。俺もそのくらいは分かっているつもりだ。それと同等の気持ちを、自分でも持ち合わせていると、言いたかっただけなのだ」

アレックスは直ぐに咳払いを一つしたが、その白い頬には少し、赤みが差したように見える。

「だが復讐からは何も生み出さないし、得るものなどもないはずだ」

「……何だあなた、今頃あたしに説教するつもりかい」

「いや、説教などするつもりは毛頭ない。  
だが今の君を見ていると、何故か生き急いでいるような気がして仕  
方がないのでな」

## 第48話 信じる心

アレックスが真っ直ぐな瞳をこちらに向けてくる。その煌めきに耐えきれなくなつたあたしは、何となく視線を逸らしていた。しかし彼はそのまま言葉を続けた。

「パーティとは、喜びも悲しみも共に分かち合い、信頼し助け合う仲間のことだ。

もし君の苦しみを、少しでも分けてくれるといつのであれば、それを受け止めよう。

君が魔物であるうとなからうと、それはほんの些細なことだ。  
俺は君を信頼すると……仲間だと最初に言った。その信念はこの先も、決して曲げることがない。

何故なら俺はそんな自分自身を、一番に信頼しているのだからな」

アレックスは胸を張つて、堂々と宣言した。

ああそうか、この男は 。

この全身から溢れんばかりに漲る自信。  
それは自分自身を心底、信頼している証なのだろう。

『信頼』などという、陳腐な言葉を口にするのは簡単だ。  
だがこの男はそれを、心の底から信じ込んでいる。

自分の感じたこと、行為そのものを 全てを信じている。だからこそ、そんな自分の信じている他人も同様に信頼できる。

故に日頃からこれほどまでに真っ直ぐで、目が眩むほど自信に満ち溢れているのだ。

「……あんた、お目出度いな

「そうだ、俺は目出度い男なのだ。

だからこそ君が何を言おうとも、俺は君の手伝いをする。

俺自身が、そう決めたのだ」

「僕も～アレックスさんを信じています～。だからルティナさんにも～ついていくです～」

「イツラには、あたしの皮肉も通じないといつのか。

本当にお目出度い奴らだ。そして脳天気な馬鹿どもだ。

ようやく少し気力の回復したあたしは、そのまま無言で歩き出していた。その後ろから彼らも平然と、当たり前な顔でついてくる。

「しかし問題は、エリスのことだが……」

「そうですね～何処に居るのでしょうか～」

二人とも心配そうな声を上げていたが、直ぐに。

「ですが～エリスさんのことです～。きっと大丈夫ですよ～」

「うむ、そうだな。この中には確実に居るのだ。そのうちまた会えるだろう」

彼らは傍から見れば、根拠のない自信とともに明るい調子に戻っていた。が、突然エドが、怯えたような声を出してくる。

「な、なんだかこの先、変な気配がします～。この先へは行きたくないような～……そんな変な感じです～」

「変な気配……つむ、それなら俺も感じているぞ」

ようやくここにきて、一人とも気が付いたようだ。

この中に蔓延している気配 痢氣の存在に。

「しかしこの禍々しい気配、外にいた時から疑問に思っていたのだが、一体何なのだろうな。この強力なものせいで、他の気配が何も感じられぬ」

「！ 何だと！？」

「ど、どうしたというのだ、ルティナ。いきなり吃驚するではないか」

勢いよく振り向いたあたしに対し、アレックスが目を丸くしているようだった。しかしあたしは、それ以上に驚いていた。「あなたは外にいた時からこの気配……痢氣に気付いていたのか！？」

「それがどうしたというのだ。とこより、これは『痢氣』と言つものなのか？」

人間は痢氣の発生場所へ近付かなければ、感知できない。それを排除しようとする本能が、無意識下で働くからだ。

例え感覚の鍛えられている芸術士であつたとしても、近付かなければ感知できないのが普通である。

芸術士の感知能力というのは、自身に向けられる殺気にのみ有効なだけだ。それ以外は他の術士と、何ら違いはない。

それなのに彼は人間でありながら、更に外界からも感知できたと云うのか。

「この何だか嫌な気配、これが痢氣のですか？」

魔物には麻薬のような症状が出ますが、ヒトにとっては毒にしかならないと聞きます。

僕のお師匠様も中位クラスと戦った時、それを浴びたことがあると聞きました。その禍々しさゆえ、直ぐに逃げ出したくなつたそうです

です。

「それは恐らく中位クラスが、人間を威嚇するために放つたものだろう。

瘴気というのは、あたしたちが術発動時に必要な精靈力と同様、通常、空中に拡散されて浮遊している。それは知っているだろ？」「はい。ですが濃度がかなり低いため、人体には殆ど影響がないと、言われています」

「そうだ。例え魔物であつても、意識していなければ感知はできない

い

それはあたしも例外ではなかつた。

あたしも他の魔物と同様に、濃度の高い瘴気は感知できる。しかし普段生活している上では、あまり意識することがない。

「それでもこのように高濃度のものが蔓延していれば、知らずに体内を蝕んでしまう。特に人間というものは、その影響力を直に受けやすいからな」

「では、その中にいる僕たちは、大丈夫なのでしょうか？」

「それは何とも言えない。だが一説によれば、何者にも屈しない強い心、精神力を持つ者だけが、瘴気の影響力を弱めることができるらしい」

「うむ。ならば何も心配はいらないぞ、エド。

強い心、精神力であれば、俺たちに常時備わっているものではないか

「そうでした~。アレックスさんの言つとおり、僕たちは～心配無用なことでしたね～」

彼らは再び明るく笑い合ひながら、自画自讃していた。

そんなことをしている間に、あたしたちは歩みを止めてはいけなかつた。

徐々に目的地へと近付いていく。あたしの足は、自然と速くなっていた。

もうすぐ。

もうすぐだ。

長年の悲願を果たす時が、ようやく来たのだ。

背後で一人が何かを言つていていたようだ。だがあたしは振り向かず、足を止めることもなかつた。

周囲で変わることのない緑色風景が、一段と加速していく。

。

そして不意に途切れたその先には

ヤツだ。

ヤツがいた。

漆黒の髪。切れ長の瞳。

面長気味な彫りの深い端正な顔立ち。浅黒い肌。

問い合わせねばならない。

何故、友人でもある両親を殺した？

何故、村に火を放つた？

何故、人の姿であたしたちの前に現れた？

何故、あたしの眼を封じた？

何故、『母親』を裏切った？

だが十二年前と変わらぬその姿を見た途端、それらが綺麗に無くなっていた。

今まで積み重ねてきた想いごと、頭の中から全てが吹き飛んでいた。

代わりにヤツの名を叫ぶ。腹の底から叫んでいた。

そしてあたしは

。

**第49話 精霊の加護（前書き）**

第5章 異なる者（エリス編）

## 第49話 精霊の加護

「やはり人間か」

地面で微睡まどろみみに飲み込まれそうになつてていたが、その声で無理矢理覚醒させられた。

頭を動かしたくなかった私は眼球だけを傾ける。

無数に咲く色とりどりの花の隙間から、黒いブーツのよつなものが覗いている。先程聞こえてきた低音は男性のものだ。

人間？ 或いは魔物か？

だが今の私にとってはどうでもいい。それを確かめる気にもならない。

「ここにはヒトが来て良い場所ではない」

声は頭上で聞こえてきた。先程よりも近い。

「どうやら既に、瘴氣には侵されているようだな」

(瘴……氣……)

私は朦朧もうろうとしている意識の中で、その言葉だけを反芻はんすうしていた。それが意味のない行為だということが、頭の何処かでは分かっている。しかし何故か止められない。

閉じかけた瞼まぶたの裏側では、黒い影が蠢いているような気がした。

すると、身体が急に軽くなる。意識も鮮明になつてきた。

「な……今、何を……！」

驚いた私は、そのまま勢いよく身を起こした。

私を覗き込んでいたのは、切れ長の緋眼。長い黒髪。深い端正な顔立ち。

頬や腕など、薄手の布地の下から現れている浅黒い肌には刺青いれずみなのか、濃紺色の幾何学模様的なペインティングが数ヶ所に施されている。

外見上では二十一～三十歳代の男性だった。簡単に一言でいってしまつと、近寄りがたい感じの「美形」である。

アレックスやディーンも美形だが、彼らのような柔らかい雰囲気は感じられない。深紅の瞳の奥には凍て付くような鋭い刃と、触れば一瞬で燃やし尽ほのむかくされそうな焰が混在している。

それはもしかしたら、彼が魔物だからかもしれない。

そう、魔物だ。

背後に携えているのは漆黒の翼。それが少し距離を置き、私の視線へ合わせるかのように真っ直ぐに、こちらを見詰めている。

双眸は炎のように紅々としていたが、眼差しは氷のように冷たく感じられた。

「君は一体、どうやってこの中に入り込んできた？」

美形の魔物は私の眼を覗き込みながら、逆に訊いてきた。

「この中には俺以外は誰も入つてこられないはずだ。それなのに君

はどのような手段でここへ来た？

他にも複数の者が入り込んでいたな。この結界を解いたのは君なんか、或いは他の者か？』

結界。

『あたしが、あの中にいるヤツに用があるからだ』

不意に彼女の言葉を思い出す。

そうか。もしかしたらこの場所は、そしてこの魔物が。

「ルティナの言っていた……」

「ルティナ？」

思わず口に出してしまったことに気付き、私は慌てて顔を逸らした。

魔物ハンターである彼女の『用』というのは、素人の私でも簡単に想像がつく。なのに部外者である私が敵の前で、不用意にその名を口走ってしまった。

「成る程な」

(……あれ？)

その声に驚いた私は、反射的に顔を上げた。

たつた一言の咳き。先程までは冷たい印象だったが、その言葉の

中には少し、柔らかさのようなものも含まれている気がしたのだ。だが表情を見ると先程同様、冷めた眼差しを向けている。私の気のせいだったのだろうか。

「大陸三大国、何れかの差し金かとも思っていたが……あの娘か」

魔物は私から身体を離すと、背を向けた。

だが私は見た。後ろを向いた瞬間に、彼の口角が少し上がつていたのを。やはり先程のアレは、気のせいなどではない。

「ルティナを知っているの？」

「当然だ。隻眼の魔物ハンター『キラー・アイ』の名は、俺の元にも届いているからな」

再び抑揚のない口調が返つてくる。

「再度問う。結界（モンスター・ミスト）を破つたのは、君の能力か？」

先程よりも、更に強い口調だった。翼越しからこちらを窺うように覗いている瞳も揺らぐことなく、冷ややかだ。

「え……ええと、それは……」

私は迷っていた。本当のことと言つべきかどうか。

いつの間にか入り込んでしまつていてる私だったが、モンスター・ミストの結界を解いたのはアレックスだと思っている。そしてルティナも同行しているはずだ。

何故なら彼が誰の干渉も受けず、一人でこの結界を破るとは考えられないからだ……多分。

勿論ここへ来る途中で彼らに出会わなかつたし、その場面を見た訳でもなかつたが、何となくそんな気がする。  
それに目の前にいる魔物は恐らく、上位クラスだ。

何故そう断言できるかといえば、先程私にかけた術のようなもの。あれは何らかの精靈術だろう。

そして先日出遭つた上位クラスの魔物 サラが唱えていた術文と、似たようなものも唱えていた。

しかもこの魔物、サラと顔立ちや瞳の色が似ているような気がする。もしかしたら同じ種族なのかもしれない。

サラには私にもアレックスと同じ能力、『精靈の加護』が付いていると思い込ませていた。そして恐らくはそのお陰だと思つが、私たちは殺されずにすんだのだ。  
だからもしかしたら今回も 。

「この結界を破壊できるのは、俺が許可しているモノと、もう一つ。術効力を無効化できる能力 今のところ考えられるのは、精靈が英雄に与えたと言われている『精靈の加護』のみ」

## 第50話 その能力

思つた通り、である。この魔物もサラたちと同様、『精靈の加護』を知つていたのだ。

私の顔を眺めていた魔物が、少しだけ眼を細める。

「やはりそうか。

術無効化は、ヒトにも魔族にもない能力だ。

かつてこの能力を、意図的に創り出そうとした者たちがいた。ヒトは魔族に、魔族はヒトに対抗する手段として」

「この話は初耳だ。そのような能力を意図的に創るなど、聞いたことがない。

「だがそれは両者とも未だに成し得ていないはず。

『精靈の加護』という術無効化能力には、『精靈の意思』が必要不可欠だからな。地上に居る我らが簡単に創り出せるものではない」

（精靈の意思？）

何のことだろうか。

……それに。

（術無効化？）

この魔物は今『精靈の加護』が、「術効力を無効化」できると言つた。

だが実際に、私が目の当たりにしたアレックスの能力は、「術効力を防御」していただけに過ぎない。つまり効力を消失せずに防御

術と同等の能力

ただ攻撃を防いでいただけだった。

『無効化』というからには当然、相手の術効力も消失させなければならない。それは防御能力とは異なるはずだが、この認識の矛盾は一体何なのだろうか。

私が疑問に思つていると、頭上から微かな羽音のようなものが聞こえてきた。

そこに居たのは、黒くて丸い目玉が一つ。両脇にはコウモリのような羽も生えている。

この前、サラヤリチャードと一緒にいた小魔物に似ている……といふか、恐らく同じものだろう。

同じく見上げていた魔物の元に、ソレはふわふわと揺らめきながら降りてくる。

手の届く範囲にまで来た時、彼は少し距離を置いた状態でその頭を右手で翳した。次いで小魔物の全身が、黒く光り出す。

しばらく彼らはそのまま佇んでいた。が、やがて小魔物のほうは巣立つたばかりの雛鳥のように、不安定な動きで羽ばたきながら、木々の向こう側へと消えていった。

魔物は私に背を向け、それが視界から消えるまで見送つていたのだが。

「この場所には瘴気が充满している。君もその知識はあるのだろう？」

「こちらへは振り向かずに訊いてきた。

## 瘴氣。

父から受けていた講義で、何度も出てきた言葉だ。

術士や魔物が術を使用する時に必要な精霊の力は、この地上の大気中に存在している。そしてその中には「瘴氣」も含まれている。瘴氣は通常、低濃度で浮遊しているため、人体への影響は皆無である。だが濃度がある程度高くなつた場合には、徐々に体内へと入り込んでしまう。

嘔吐や頭痛、悪寒、恐怖心、気力低下、全身麻痺、圧迫感、破壊・暴力衝動……などなど、人によつて症状は様々であるが、それらを引き起こし、最悪の場合には死に至る　と、この程度の知識ならば私にもあつた。

「君は瘴気に侵されていた。俺がそれを中和して、影響力を一時的に防いでいる。が、およそ三時間程度の効力しかない」

「え！？ 防いでいる？？？」

「君の身体に、<sup>ガード</sup>防御用の薄い膜を張った」

私はその言葉で、自分の両手や体中を見回してみた。それらが先程から何故かキラキラと輝いて見えていたが、もしかしたらこれがそうなのか。

「但し体内に瘴気が入り込まない代わりに、精霊術も使えない。それにこれはあくまで、瘴気を防御するためだけの処置だ。外部からの攻撃を防ぐこともできない」

つまり今攻撃を受けてしまつと、防御さえもできないとこりと  
なのか。

私は愕然とした。精霊術を使えない精霊術士なんて 。

「あ……あなた一体、何を企んでいるわけ？」

「企む？」

「さうよ。術を封じて、その隙に私を一体、ビリショウツヒ言いつの  
出そうとする。

混乱しつつも精一杯張った私の虚勢に対して、魔物は少し吃驚し  
たような顔付きを見せた。しかし直ぐにまた元の険しい表情に戻る。

「どうもしない。ただ君を殺す理由がないだけだ」

それだけを言いつとこちらを振り向きもせずに、そのまま前へ歩き

「ちょ……！ それって、答えになつていないわよ！」

その返答に納得のいかない私は走り寄つて、思わず彼の翼に触れ  
よみと手を伸ばした。

が。

雷のような轟音とともに、私は地面へと投げ出されていた。

痺れと全身を暴れ回るような激痛。もし「大きな雷に打たれる」  
とするならば、こんな感覚なのだろうか。

「精霊術は使えないが『精霊の加護』ならば発動するはずだ。君は  
その能力を使って、この場所から早々に立ち去るがいい」

魔物は何事もなかつたかのようにそう言い残すと、木々の間へと

消えていった。横たわったまま、呆然と後姿を見送っている私だけが、その場に取り残されていた。

彼は私には『何も』していない。こちらに敵意も見せなかつたし、攻撃も 指一本さえも動かさなかつた。

単に私が彼に触れようとしただけである。それともアレは私にかけたものと同じ、防御術の類だろうか。

だが相手は上位クラスだ。私の知らない術を使っていたとしてもおかしくはない。その辺りのことは、あまり深く考えない方がいいのかもしない。

しばらくの間、全身に感じる痺れと痛みで、立ち上がることさえできなかつた。あの激痛でよく死なずにするんだものだと、我ながら感心してしまつ。

ようやく何とか起き上がる私は、早速掌へ意識を集中させてみる。  
「烈風天驅」  
ヴァン・ヴァオレ・ヴァイン

他にもいくつか思いいつくままに術を唱えてみたが、何れも駄目だつた。昼間の時は弱いながらも使用できたが、今回は精靈石さえも反応しない。

『精靈術は使えないが、「精靈の加護」ならば発動するはずだ』

何故あの魔物は、そう断言できたのだろうか。それに人間である

私を瘴氣から保護し、『ヒト寧』に忠告まで添えて、殺さずに放置するのは何故だろう。

考えられるのは、私のことを『精靈の加護保持者』と思っていることくらいだ。

もし翼の魔物がサラの仲間だった場合には、その可能性が一番高い。彼女もまたそのような理由で、私たちを殺さなかつたのだから。

それにサラと同種族のような感じだつたし、何より同じような術文も唱えていた。

……あれ？ 同じ術文？

私は左腕を押される。

もしかしたら彼ならば、サラに付けられたこの「紋様」が何なのかを、知っているのだろうか。

しかし。

彼の消えていった方向へ目を向けた。

あそこへは行きたくない。

それは本能的なものだろう。そして何故そのように感じているのか、理由を私は知っている。

瘴気だ。

私は幼い頃に、中位クラスから放たれる瘴気を浴びたことがあつた。その時のことは今でもあまり思い出したくはないが、恐怖の念を抱いたことを強く憶えている。

当時はその感覚が何なのかを知らなかつた。しかし後にその時の状況を父へ話した時、それが魔物の放つ「瘴気」だと教えられたのだ。

先へは行きたくない。けれど、腕に付けられた紋様の効力を知りたい。

私がその場でしばらく悩んでいると。

「……ハア……ハア……」

不意に背後から、獣の荒い息遣いのよつなものが聞こえてきた。それが耳に入った瞬間、私の身体は無意識に動いていた。そして前方にある木陰へと滑り込んだ。

ここは「モンスター・ミスト」つまり、魔物の創り出した結界の中だ。獣など居るはずがない。居るとすれば恐らく、結界を解いたであろうルティナたち、そして先程の魔物と私たちを追つてきた敵だ。

しばらく私はそこへ隠れて様子を窺つていた。息遣いは確実にこちらへ近付いている。

後方の木陰から黒いものが現れる。遠目からもその姿を捉えることができた。

黒装束に身を包んだ、トカゲの顔をした魔物 私の予想通りだ

つた。

しかし徐々にその姿が大きくなるに従つて、何処か様子のおかしいことに気が付いた。

酔っ払つたかのような覚束無い足取り。顔を前へ突き出し、不恰好に丸められた背。

剥がれたマスクから覗く口元は、だらしなく開けられ、血走った焦点の定まらない眼は動かずに、真つ直ぐ前を向いたままだ。

「……臭う……臭うぞ……」

魔物は口から涎よだれを垂れ流して、そのような言葉を呴きながら、私の直ぐ脇を通り過ぎていく。こちらには全く気付いていないようだ。私は魔物が茂みの奥へ消えていくのを、そのまま見送っていた。

何が「臭う」のだろ？ 確かにこの奥からは、瘴氣を感じているけれど。

私はここで覚悟を決めることにした。

どちらにせよ私には、「精霊の加護」がないのだ。勿論アレックスが居なければ、ここから抜け出せるはずがない。

昼間のルティナの話から考へると、彼女は先程の翼の魔物の元へ行くつもりなのだろう。ということはそこに行けば、或いは彼女たちに会えるかもしれない。

それに今の敵の様子も気になるし。

「取り敢えず、行ってみるしかないわね」

私は気合いを入れるかのように呟くと、思い切つて茂みの中へ足を踏み入れた。

## 第51話 瘡氣の森1

道のない場所をただひたすらに、私は気配の感じる方向だけを曰指していた。

途中で何度も遠ざかりそうになってしまい、その度に補正しつつ歩いている。

足を踏み入れてから一時間くらいは経過しているが、一向に景色の変わる様子もない。

しかも何だか先程から、同じ場所をグルグルと廻っているような  
氣も　いやいやいや、ここで弱気なことを考えてはいけなかつ  
た。

瘴氣はそのような「隙」が生まれる瞬間に入り込んで、精神を狂わせるという話である。例えあの魔物の術で防いでいたとしても、なるべく「ポジティブ思考」で行かなければならないのだ。

私はそのことを肝に銘じながら、慎重に茂みを搔き分けていた。

そんなことを色々考えている間にも、ようやく薄暗かつた空間から一転、田映い光が飛び込んでくる。

すると急に黒い影が、視界を遮りてきた。次いでソレと田が合つてしまつ。

ひとつ瞬きをする、大きな黒いつぶらな瞳。

突然のことに吃驚した私は、腕を思いつきり振り回しながら悲鳴を上げてしまった。そんな私に更に驚いたのか、ソレは慌てた様子で……しかし風船のようにふわふわと、上空へ浮かび上がっていく。

「君は……やはりまだ居たのか」

溜息混じりの声とともに、視界の戻った私の前に現れたのは、黒い翼の魔物だった。

「結界の開いた気配がないから、まだ中に居るとは思っていたが……ここに来るとはな」

「あなたは一体ここで、何をしているの？」

私は反射的に尋ねていた。

田の前にあるのは奇妙な光景だった。

魔物の前には黒くて大きな球体が、地面すれすれの位置に浮かんでいる。

大きさは彼の身長と同じくらいで、一見すると丸い形状の球である。しかしよく見れば霧状になつていて、その集合体が球状に形作つているようにも見えた。それらが全体的にゆらゆらと、小刻みに揺れている。

更にその一端が紐のように、魔物に向かつて細長く伸びている。魔物のほうはそれを受け止めるかのように、両手の平を胸の前へ突き出す体勢だ。

「それはこちらのセリフだ。俺のかけた術が有効な間に、ここを離れているはずじゃなかつたのか。それに今まで何をしていた。あれから随分時間は経つていると思うが」

「それは……あなたにいろいろ尋ねたいこともあつたし。だから今までずっと迷路のような、あの森の中を彷徨つていたのよ」

「迷路のような森の中？」

彼は怪訝そうな表情を浮かべながら、眉根を寄せた。

「一応用心のために軽い足止め程度の罠ならば、入口に仕掛けは

いたが……しかしそれは、外部からの侵入者対策用だ。中心地であるこの場所や周辺部、出口には何も置いてはいない。

それに君が先程居た場所からここまで、直線距離にしたとしても、ものの五分とかからないはずなんだが」

「…………」

「…………」

やはりそうかっ！

辺りに充満している瘴気のせいで、方向感覚まで狂わされていたのだッ！！

「それより……いや、だが丁度いいかもしない。君にも手伝つてもらひう」

「手伝う？ 一体何を」

私は驚いて訊き返していた。

魔物 しかも上位クラスが人間に頼み事をするなんて、有り得ない。

「ここの中心にあるモノを破壊してほしい」

「中心？」

私は黒い球へ出来るだけ近付き、覗き込む。

中心にあるのは鈍い光を放つ精霊石<sup>モビ</sup>の、小さな黒いガラス玉のようだ。それが周囲で蠢く黒い集合体の隙間から、見え隠れしていた。

まるで霧の渦が、ガラス玉を包み込むような形で存在している。

「これは『瘴靈の種』と呼ばれるものだ。これがこの付近一帯の瘴氣を生み出している源泉だ」

## 第52話 瘡氣の森2

私は一瞬、困惑してしまった。

今まで『瘴靈の種』などというものを一度も見たことがなかつたし、聞いたこともなかつたからだ。

それに瘴氣を排出する場所は確か。

「そうだ。瘴氣は通常、精靈の社近辺にある『瘴氣の穴』から噴出されるものだ」

『瘴氣の穴』はどの社にも、必ず数ヶ所は存在していると言われている。その場所は鉱山付近が殆どで、この辺りでいえば「水の社」を挟んだ、反対側の山に位置するという話だ。

しかし噴出量は年一~二三回程度と少ない。それに大気中で蔓延しているものと同様、低濃度の排出量でしかなかつたはずである。

「『瘴氣の穴』から噴出されるものは低濃度なため、魔物もそこへは群がつてこない。

だがこの『瘴靈の種』には、瘴氣の穴から噴出する濃度の、約数百倍の瘴氣が凝縮されている。だからこそ魔物が、この場所に集まつてくる

モンスター・ミストが出現すれば、魔物は湧いてくる。それが瘴氣のせいだとは知らなかつたが、「魔物を引き寄せる霧」 その正体が瘴氣の塊であるのならば納得できる。

しかし解せないのは。

「それじゃあこのモンスター・ミストが、『瘴靈の種』を生み出し

ているつてこと？ なのに破壊つて？？？

「モンスター・ミスト自体が、種を生み出しているわけではない。

この霧は外部へ漏らさないための結界だ。

しかし種から噴出される瘴気濃度が高いために、完全な遮断は難しがな」

するとこの霧が、内部の瘴気を封じてこなすことなのか？  
だがにわかには信じられない。

「にわかには信じられないといった顔付だな」

「！？」

何故、私の考えていることが分かつたのだろうか。

というかさつきから何だが、私の思考を全て見透かされているような気がする。まさか先程かけた術のついでに、心の中が読めるようになる術でもかけたのだろうか。

「そ、そそれなら一体、ソレは何だというの？ 何でそんなものが存在するの？ それにあなたはここで一体、何をしているわけ？」  
何となく意地の悪そうな笑みを浮かべている魔物に対して、つい勢い込んで質問をぶつけてしまった。

「俺はここで種の浄化を行つてゐる。そしてこれの持ち主は……俺と同族の者だ」

同族！ まさか。

「同族つて……サラ？」

「何？」

魔物はその言葉に反応した。

「君は、サラに会つたことがあるのか？」

今までそれほど顔色を変えたことのない彼が、初めて見せる表情だつた。

それに私は大事なことを思い出した。ここに来た目的だ。

「そうよ。それに私はあなたに訊きたいことがあって、ここに來たんだつたわ」

「訊きたいこと？」

「ええ、これを見て」

私は左袖を捲り上げると、装備している籠手を外した。そこには正円形のケーキに、ナイフを上から中心まで一本入れたような紋様がある。

「この刻印がどんな術なのか、私は知りたいの。

『精靈の加護』には、魔物からの術が効かないって話よね。なのに私たちは、この刻印をつけられたわ」

コレは本物の『精靈の加護』保持者である、アレックスにまで付けられていたのだ。

それ以外での魔物の術攻撃は、特殊能力によつて防御している。その場面を何度も見てきた私にとって、これが一番の疑問点だ。

「それにまだ発動もしていないし、未だに何も起こらないのもおかしいし……だからあなたに、このことを尋ねたくて」

私が腕を強く前へ押し出すようにして見せると、魔物はそれをじつと見詰めた。

「これは……この紋様は、君だけが付けられたのか？」

「え？」

私が答えようと口を開いた時、間近で破裂音が鳴った。  
魔物は直ぐに舌打ちをすると、顔を前へ向ける。霧の球が先程よりも、大きく膨れ上がってきた。

「……やはりここは君に、手伝つてもううしかないな  
「へ……えええつ！？？」

目の前の状況を全く飲み込めない私は、その場で戸惑うしかなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8376t/>

ゼロクエスト～第2部 異なる者

2011年11月27日13時49分発行